

断頭颶風の神殺し

春秋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神殺しの魔王、女神を弑し転生す。

壬生宗次郎を指針として武を鍛え、黄金と刹那の虜となり、黄昏を信奉する石上鉄也。
愛する女神を贊に王となつた彼の求道の行き着く果ては――

※ネタとして「PARADISE LOST」「Dies irae」「神咒神威神楽」
が登場します。おそらく他にも多数。ですが、原則として上記三作を知らないと理解で
きない描写が出てくると思われます。ご留意ください。

※作中で上記三作は創作物として登場します。ご注意ください。

三

次

80 73 65 58 52 45 37 30 21 15 8 1

2 2 2 2 1 0 9 9 8 7 6 断章 5 4 3

黒の騎士団

172 165 158 153 148 140 132 126 117 111 104 96 88

24

断章 剣王邂逅

終章・序段

終章・詠段

終章・破段

終章・急段

終章・終段

あとがき

228 217 208 201 195 191 185 177

「時よ止まれ、お前は美しい——か」

口から出たのは、歌劇の主演たる男の渴望。

「死に濡れて冥界の腐毒に侵されながらも、君は美しいままだ」

ああ、だからこそ——

「綺麗な君を、だからこそこれ以上汚したくない」

これはむしろ、愛を謳う破壊の君にこそ相応しいのかかもしれないが。

「俺がこの手で……殺してやる」

死は重い。だからこそ我が破壊あいを厳肅に受け止めて欲しい。

「俺は君を愛している」

愛しているから破壊するのだ、愛でる為にまずは壊そう。

「——君は、誰よりも美しいのだから」

その姿を心に焼き付けよう。

永劫、忘れる事などないように。

「さようなら…… ■ ■ ■ 」

その夜、七人目の王が嘆きの産声を上げた。

【十九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの著作『魔王』より抜粋】
……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。
読者諸賢のなかには、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかとしれな
い。

あるいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかも知れない。
だが、重ねて強調させていただく。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。
カンピオーネは王者である。

神より篡奪した権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。
カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！

【三十一世紀初頭、新たにカンピオーネと確認された日本人についての報告書より抜粋】
ヘカテーはギリシア神話に登場する女神のことです。

冥府の支配者であるハデスやその妻ペルセポネーに次ぐ地位を持つ、月と魔術を司りし冥府神。古くより三相一体の女神として信仰されていた地母神の一柱であり、「魔女の保護者」「死者の王女」「靈の先導者」などと呼ばれ、魔術の本尊として現在も崇拜される著名な女神です。

人間にあらゆる分野での成功を与えるとの伝承も残されており、旅の守護神であるヘルメスと同じく道祖神としても信奉され、中には神へ祈る前にまずヘカテーに祈りを捧げるべしなどと絶賛する者もいるほど。

狩りと月の女神アルテミスの従姉妹であり、時に同一視される処女神たる女神。「月」のセレーネー、「女狩人」のアルテミス、「破壊者」のペルセポネーとして具現する、三相一体の女神であるとも言われています。

石上鉄也いしがみてつやは、この神を弑逆しカンピオーネとなつた少年なのです。

【グリニッジの賢人議会により作成された、石上鉄也についての調査書より抜粋】

石上鉄也が女神ヘカテーより篡奪した権能『冥界の処刑刀』ヘカート・デスマサライズは、女神の冥府神としての属性を色濃く反映した代物である。

死の息吹たる冥界の風を武具に宿らせ、あらゆる生命を刈り取る処刑刀を生むとされる。その概要を本人より聞き出した魔術師の言では、嘘か真か不死性の権能を無力化する事も可能であると言う。

彼は祖国の結社を配下に治めたが、部下たちへの指示・命令はしていない。
権力闘争が起ころう厭い、護国の戦士として活動しているからである。

彼がこれ以降も王者として君臨する事はないのか、今後の動向を見守つていきたい。

「……つて事で、なんか神殺しやつちやつた」

あつけからんと言い放ち、照れたように頭を搔く少年。

ようやく幼さが抜けてきたという顔立ちで、年の頃は成人一步手前といつた所だろう。

ヨーロッパでの事件を自宅に返つて報告したのだが、両親は開いた口が塞がらない様子。

それもそうだろう。

俺も自分がこんな事になるなんて想像もしていなかつた。

硬直した両親を前にして、鉄也は現実逃避的に己の境遇を思い返す。

まず自身の生家たる石上家は術者の家系だ。

それなりに古い血筋らしく、元は彼の有名な石上神宮に纏わるとかどうとか。

その名残なのか神職の端くれとして呪術を、布都御魂大神を祀る系譜として剣術を代々受け継いでいる。

術は母を、剣は父を師として、幼い頃から双方を学んできた鉄也。

いずれは一廉の術者になるだろうと見込まれ、若くして日本呪術会を統括する正史編纂委員会に所属する事となつた。

とは言え、彼自身はまだまだ若輩。

剣は同年代でも突き抜けているものの現役の使い手には及ばず、術は補助的な物が多く本職には程遠い。

悪霊調伏などの荒事を専門とした部署を目指しながら高校に通っていたのだが、そんな中で鉄也に大きな転機が訪れた。

それが今回のヨーロッパ行きである。

あくまで結社間の交換留学の一種という形だったが、魔術の本場たる歐州で学べると聞いて飛びついた。

精々が一月程度の短期間だったが、彼の留学は僅か一週間で終わりを告げる。

鉄也は地上に顕現していたまつろわぬ神、冥神へカティーを斃しカンピオーネとなつて

しまつたのである。

バトルマニアで有名な歐州の魔王たちに目を付けられては敵わないと、書置きを残して即日で日本に舞い戻った訳だ。

帰国してから一目散に自宅へ向かい、両親に事情を説明。
そして現在へ至る、という事になる。

「あ、あんたがカンピオーネ？ 羅刹の王？」

「うん、昨日からそう呼ばれる事になつた」

震えながら聞き返す母に、申し訳なく思いながら肯定を返す。

「……このことは、もう誰かに言つたのか？」

「向こうの知り合いにはバレてたし、どうせ早いか遅いかだから委員会にも連絡しておいた。ただ、二人には直に言いたくてさ、遅くなつてごめん」

「いや、まあ、何だ……とにかく、良く帰ってきたな」

「——うん、ただいま父さん」

しどろもどろになりながらも、己の無事を祝ってくれる父に目頭が熱くなる。

不器用にも抱き締められ、ポロポロと涙が零れてきた。

「本当に、無事で良かつたよ」

「うん、うん……」

「生きてて、良かつたよお～」

「大丈夫だよ母さん、ちゃんと生きてるから」

気が緩んだのか泣きついてくる母親。

家族の温もりに触れ、鉄也も思わず胸中の弱音を零してしまう。

「そう、生きてるんだ。辛い、辛いことが、あつたけど――俺は、生きるから。生きているから……」

もう現世にいない少女を想い、喉が枯れるまで嗚咽を漏らすのだった。

「ご機嫌麗しく、石上王。わたしは正史編纂委員会東京分室室長、そして沙耶宮家次期当主の馨と申す者。この度は拝顔の榮誉賜り恐悦至極にて、御身の御健勝を心よりお祝い申し上げます」

そんな回りくどい程に謙へりくだつた挨拶をかましたのは、鉄也のかつての上司。

それも分室長にして四家の次期当主という、超がいくつも付く大物であつた。

「早々の挨拶ご苦労であつた……とでも言えればいいんですかね？」

「ははっ、有り難き幸せ……とでも返しておきましょうか」

目を見合せ、同時に吹き出す。

仰々しい肩書きや噂からキザつたいエリートを想像していたが、思ったより茶目つ気のある女性らしい。

沙耶宮馨。

智慧と謀略で有名な日本呪術会屈指の旧家。

その跡取りはあちこちで浮き名を流す遊び人であり、数々の巫女を虜にする男装の麗人だという。

「くくくつ、別に普通に喋つて貰つて構いませんよ。俺なんか下つ端の見習いですから」「そんな恐れ多い、王たる方に失礼を働くなど、臆病なわたくしにはとてもとても」

「おやおや、だつたら王様らしく命令と行きましょうか。心労を減らすべく只人として扱え、と」

「いや、そこまで仰るなら従わない訳には行きませんね」

某越後屋とお代官様を思わせるお約束の様式美を終わらせ、両者は笑顔のまま本題に入つた。

「では改めて、沙耶宮馨です。はじめまして石上さん」

「はじめまして沙耶宮室長、思つたよりお茶目な人で驚きました」

「こちらも、某カンピオーネ方のような性格ではないらしく安心しましたよ」

「まあ仮にも護国の任に就こうとしてきましたからね、そうそう権能で大暴れとはなりませんよ。まあ、神様でも来ない限りはね」

石上鉄也は日和見主義者である。

事を荒立てるのを嫌い、火事が起これば対岸に避難する。

しかし、だからこそ凶事は力ずくでも素早く片付けようとする武力主義者の面も持つ

て
いる。

安寧を求める市民にして、武力を振るう神殺しの戦士。
それが彼のスタンス、石上鉄也の王道。

「なるほどつまり——」

「俺は権力なんていらない。委員会には今まで通りに活動してもらつて、俺はそこに対
神部門として所属する。まあ名目だけなら王様として統治してもいいですけど、これと
言つた支配はしない。今のまで十分回つてるんだから、下手に手を出したくないんで
すよ」

正史編纂委員会は帝に仕える政権側の組織。

現在まで日本呪術会を統括してきた実績がある。
上手くいっているのだからそれでいい。

玉座に君臨して権力闘争が勃発し、組織機能が狂うなどしたら目も当てられない。
それが鉄也が考えた結論である。

「つまり、イタリアのサルバトーレ卿と同じ要領ですね。名前だけ貸して部下に運営は
任せると」

「そうそう。それで普通に働いて普通に給料貰つて、神殺しが出張る事態になつたら特
別手当でも支給してもらつて。俺が望むのはそんな生活です」

度を越えた権力も財力も必要ない。

ただ国を守り己の領分を護るだけ、それだけでいい。

彼女に貰つた女神の遺産でそれ以上の事は望まない。

「了解しました、ではそのように計らいます」

「よろしくお願ひします」

自宅近くにある山中の修練場。

石上鉄也は、そこで斬氣を高めていた。

腰の帯刀に手を添えて、静かに風を受け立ち尽くす。

ともすれば数十、数百倍に増えた膨大な呪力。

風呂桶が湖になつたかのような浮ついた認識を正すべく、現在の普通を確かめようと

していた。

「梵天王魔王自在天自在、除其哀患令得安穩、諸余怨敵皆悉摧滅」

その言靈は斬り尽くすという誓い、現れたるは切斷の事象。

石上神道流、首飛ばしの颶風。

「——蠅声ツ！」

蠅声とは悪意の総称であり、すなわち凶氣。

呪術によつて捻じ曲げられた吉凶が、物理的な殺傷力すら持つて飛翔する。本来の形は剣気をぶつけて氣勢を削ぐ、威嚇に近い技なのだ。

が、彼の身に渦巻く混沌とした呪力がそれを飛ぶ斬撃にまで昇華している。

それ自体は鉄也がとある創作物より着想を得て、以前から多用していた技なのだが。「……」これは、凄まじい威力になつてゐるな。具体的には御前試合から東外流つがるの辺りまで超常の破壊力を得た斬滅の念は、便利な飛び道具から遠距離必殺の絶技にまで強化されていた。

人間の何人かを同時に斬り殺す程度の威力だつたのだが、その何十倍の威力を連発すら可能な余裕を秘めている。

周辺への影響を考えて上空に浮かべた的に放つたのは正解だつた。

もしこれが大地に着弾していたら、小規模な地割れの類すら起きかねない。自分でやつておきながら、鉄也は胸を撫で下ろした。

「——だから鉄也、蠅声はそんな技じやないと何度も言わせるんだ」

「あ、父さん」

背後からかけられた声に振り返る。

父が何度も分からぬ呆れた顔で立つていた。

「だつて、石上流の剣鬼が使つてたから」「それゲームのキャラクターだよな……」

壬生宗次郎という生ける剣神。

求道の果てに神となる以前から、彼は天下無双を目指す剣鬼だつた。

その彼が修めていた流派こそ、石上神道流の剣術。

初めて宗次郎というキャラの剣技を知つて、鉄也は天啓を受けたように感じたのだ。己と同じ流派の同じ技を、己の色で染め上げ昇華しているその姿。

彼に感銘を受け、鉄也は剣術修行に励んだ。

それはもう病的なまでに励んだ。

思春期の少年がゲームのキャラを真似るというのは、世に有り触れた光景だ。

だがしかし、石上鉄也は本物だつた。

それを実現できる下地があり、後に神殺しを成し遂げる彼の根気は並外れていた。そして練習から僅か半年——実践可能な域にまで鍛え上げたのだ。

「あの頃は若かつた……」

「今も十分に若いだろうが」

それをきっかけにあのシリーズにハマり、三部作をこよなく愛する立派なオタクになつたのである。

「初めは宗次郎一択だつたはずが、今ではすっかり黄金閣下と刹那の虜だけどな」

「俺は龍明が…………いや、なんでもない」

「プレイしてたのかよっ!!」

思わぬ所に同好の士を生み出してしまつたと、戦慄と共に若干の罪悪感を抱いたの
だつた。

3

鉄也は現在、沙耶宮馨との会談に備えて待機している。
何かと顔を合わせる事が多くなった馨から、権能について教えて貰えないかと打診を受けたのだ。

待ち合わせの時間になつて、玄関の呼び鈴が鳴つた。

共にいた甘粕冬馬という黒スーツの男も交え、まずは定例の情報交換。

国内の自治やら国外の騒動やら、そういうしたものだ。

それに一段落ついて、遂に本題に入つた。

「俺の権能ねえ……」

「すべてを明かせと言つてはいる訳じやありませんよ。ただ、ヘカテーから篡奪した死の権能、としか情報がないですからね」

鉄也からすれば、一つしかない権能の情報は生命線だ。

おいそれと話すのも気が引ける訳だが……

「私たちからすれば、まあ壊滅的な制約でもあれば事前に知つておきたいなということ

でして。触りだけで構いません、何卒ご教授願えないでしようか」

馨に続き冬馬が頭を下げた。

そこまで言われて、鉄也も少し考える。

詳細を省いた大まかな説明くらいはしておくべき、と結論付けた。なので強いて言うなら、と。

ヒント程度にとある言霊を紡いだ。

「ギロチンに注ごう飲み物を、ギロチンの渴きを癒すため——なんて」

十中八九分からないだろうから、追つて解説しようと思っていたらだ。ピクッ、と反応したのはスーツの男。

恐る恐るという風に、しかしハツキリと切り出した。

「正義の柱、ですか？」

この台詞に対してもこの発言という事は、もしやこの男……

少し考え、間を空けてから唐突に呟く。

「……時間が止まればいいと思つていた」

「——今が永遠に続けばいいと思つていた」

「この日常が終わつて欲しくないつ」

「いつか終わると分かつていてもつ！」

徐々に語調が強まり、終いには互いに身を乗り出して握手。その後も確かめるべく次々と口に出していく。

「土台戦争、単体では成立せぬ概念よ」

「ならばこそ敵を、求めるゆえに部下を」

「愛し、率いて、壊すのみ！」

「私は總てを愛している！」

遂に歓喜してハグまでしだした。

まさか業界に趣味を理解してくれる相手がいようとは思つても見なかつたのだろう。互いに凄まじいはしゃぎようだ。

そして両者は更なる符丁を開示し始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ！」

「無限の時は鼓動を止め、人は音もなく炎上する」

「誰ひとり気付く者もなく、世界は外れ、紅世の炎に包まれる」

わあー、と興奮する二人に付き合いきれず、沙耶宮馨は静かに退室した。

「いやーごめんごめん、つい盛り上がりつちゃって」

「いや一面目ない。石上さんがここまで話の分かる方とは思わず」

「……いや、いいんだけどね」

王と友好的な関係を築く分には文句はないと、先ほどの光景は忘れることにしたらしい。

懸命な判断である。

「つまり俺の権能は、三つの種類に分けられる。死の風を喚ぶ力と、死を腐食毒として撒き散らす力、そして不死殺し」

「不死殺し、ですか？」

「そう。冥府神の権能として、不死たる神でも冥府に連れ去る事ができる。ヘカティーはゼウスから天地海を自由に行動できる権限を与えられたりしているし、天界からだつて冥界に引っ張つていけるつて訳です」

故にヒントが罪姫・正義の柱。

不死の英 雄すら殺す断頭の女神。

むしろ不死殺しが本命で、後の二つは余技に過ぎない。

という言い方をすると激痛のザミエルの剣っぽくて格好良い気がする。

「どっちかというと、軍勢変生の天魔・悪路ですな」

「ですです。さすが甘粕さん、分かりやすい」

「……いや、いいんだけどね」

一応の概要は分かつたし。

そう語り遠い目になる馨であった。

冬馬はその心中で普段の仕返しなどと思つていた、かは定かではない。

「にしても石神神道流とはまた、美味しい設定ですね」

「お陰で蝇声を練習しちゃいましたよ」

「ほう！ それはそれは、お好きですねえ」

「まあ呪力量が馬鹿みたいに上がりましたから、威力調整が大変でしようけどね」

太極とは言わないまでも、畸形 or 唯我ブーストを受けてる感じだ。

「古参のカンピオーネは太極位と言われても驚きませんけどねえ」

「そう言われると、否定できないような気も……」

ひょつとして神殺しの魔王ともなれば、下位の求道神くらいにはなるんじやなかろうか。

噂に聞く侯爵閣下は狼的にシユライバー一択。

魔教教主は拳法的に紫織か、はたまた文武両道的にエレオノーレか。

ちよつと毛色は違うが、傲岸な天才で夜行様という線もあるか。

ここまで考え、あまり違和感がないのは何故だろう。

絶対に自分を曲げない超越者、という部分が似通っているからだろうか。

「なら目指すは斬滅の剣鬼という事ですね」

「それじゃ場合によつては教主と殺し愛に興じなきやいけないじやないですかやだあ、顔を見た相手の目を抉り出す人とか嫌ですよ俺……」

……つて、あれ？

廬山に引きこもつてゐるから性別不詳なんだけど、教主つて男女のどつち何だらうか？

「羅濠教主つて、男性ですか？ 女性ですか？」

「そのへんの情報は出回つてないですからねー」

「カンピオーネの方々ほど実態の分からぬ存在はないですからね。もしかしたら、絶

世の美女という可能性もあるかもしませんよ？」

どつちにしても物騒な噂の絶えない人は勘弁して欲しいと思う鉄也であつた。

4

羅刹王、或いは墮天使。

神殺しの魔王、或いは戦士。

人類最強のチャンピオン、或いはカンピオーネ。

そう呼ばれる人種が、世界に七人だけ存在している。

一世紀に一人もいない時代も過去にはあつたので、今世紀は豊作と言つていい。

ただし、それが人類のためとは言えないのだが。

彼らはトラブルメーカーだ。

騒動の火種を見つけるのが得意であり、意識せずともそれを爆発させる傍迷惑な存在。

そんな者の一人が彼、石上鉄也。

七年目のカンピオーネとなつた、齡十八歳の少年である。

高校の卒業を間近に控えた彼だが、国包みの内定が確約されているので受験勉強とは

縁がない。

その代わりに命を掛けて戦っているが、それも魔王の生態を思えば困難ではない。彼は転生後も変わらず、順調に生活を送っている。しかし彼もまた騒動に愛された神殺し。

往く先々で事件が起きてしまうのは、避けようがない運命なのであつた。まる

「何を言つてんですか石上さん？」

「いやだつて、現実逃避の一つもしたくなるでしようよ甘粕さん」

石上鉄也と甘粕冬馬。

二人して呆然と空を見上げながら、力なく会話を繰り返す。

「俺つてばまだ奈良に着いたばかりなんですよ？」

「まあそうですね。私も一緒に乗つてましたから、良く知っていますとも」

新幹線やら特急やらを乗り継いで東京からやつて来た二人。

駅を降りて迎えの車を待つていたらこれである。

頭上から膨大な呪力が降り注いで來たのだ。

咄嗟に見上げると、上空に人頭龍尾の怪物が遊泳しているではないか。

それを目視した瞬間、肉体が活性化して思考が研ぎ澄まされた。

（まつろわぬ神ですね、分かりたくありません）

そうして澄んだ思考をわざと曇らせ、何とか現実逃避を始めたのだつた。

「俺もともと本流の石上神宮で祀られてる布都御魂いそのかみふつのみたまを借りようとしてただけなんですが」

「ならバチが当たつたんじゃないですか？ 御神体を神殺しが振り回そくだなんて、暴挙も暴挙ですからねえ」

確かにその通りだが、鉄也とて何の理由もなしにそんな暴挙に出た訳ではない。

彼の愛刀は女神を斬った事で死に侵され、風化し崩れ落ちている。

新たに何処から仕入れようにも、そもそも神との戦いで耐えうる代物など望めない。

これでは戦力低下が免れないため、沙耶宮馨を交えて話し合つたのだ。

そして父の意見もあり、展望が決まつた。

そうだ、神刀を借りればいいじゃないか！

という父の暴論を受けて馨が乗つた。

こうして鉄也本人と縁がある石上神宮で、神体として祀られる布都御魂剣を借り受け手筈が整つたのだった。

その裏に、とある媛巫女を通じて「配神たる天羽々斬を新たな神宝とする」という作が講じられた事を、鉄也は知らない。

「俺が剣鬼的に美味しい武器だとか思つたのがいけなかつたんでしょうか」「私も太極的に美味しい設定が増えたと喜んだのがいけなかつたんでしょうか」

どつちもどつちである。

「ところで甘粕さん、アレの正体つて分かりますか？」

「見たところ龍っぽいですが、後はさっぱりですな。強いて言うなら奈良県東大寺の大仏から連想して、仏教関連かもしけないと言つた所でしようか」「あんまり役に立ちませんねー」

「面白いですねー」

などとダラダラ会話を続けていた両者だが、そこで鉄也がある事に気付く。
「——甘粕さん、なんだか暗くなつていませんか？」

冬馬はハツとして辺りを見回す。

確かに、先程までと比べ明らかに光度が下がっている。

鉄也はその原因を目ざとく見つけた。

「太陽が陰つていいる……？」

「皆既日食、ですか？」

日蝕や月蝕という現象は稀である。

故に各神話体系においても、象徴する神格は数少ない。

そして先ほど言つた仏教関連という事から、冬馬はもしかしたらと一つの名を告げた。

もしこの名が正答だとするなら、龍のような体をしながらも頭だけが人の顔である事に納得がいく。

いやむしろ龍の胴体こそが後付けと言つていい。

それを聞いて鉄也は首を傾げる。

「それって仏教の神様ですか？ 発音的に漢字が当てはまると思えないんですけど」

「ええ、元はインド神話から流れた神ですよ。アスラ——三面の戦神と有名な阿修羅の原型、その内の一體です。彼の胴体はケートウと呼ばれ、凶星として空に上りました」
冬馬は、こう言うと親しみ安いかも知れませんねと続ける。

「夜行様、ですよ」

「——つああ！ 計都・天墜、計都星ですか！」

「不死を得た彼は頭と胴に別れながらも、その原因となつた神への復讐として日蝕と月蝕を引き起こすのですよ」

なるほど確かに親しみやすい。

そしてやはり、この男は博識だ。

甘粕冬馬の有能さを噛み締めながら、鉄也は遂に現実と向き合う。

「甘粕さんが格好良い所を見せてくれたので、俺もそれらしい所を見せましようか。人

里から離れるように誘導しますから、出来るだけ避難誘導をお願いします」

「畏まりました、王よ。御身の快勝を待ち望んでおります」

「ふふつ……では行つて参る。せいぜい、祝勝の用意でもしておくことだな」

最後まで茶目つ氣たっぷりのやり取りをして、両者は別れる。

これより神殺しの第二幕、カンピオーネとしての初陣だ。

呪力と戦意を昂ぶらせながら、鉄也は上空の神を睨み付けた。

まず『召喚』の術を使い、何よりも先に獲物を取り寄せておく。
業物は業物だが神殺しの武器というには不足している。

しかし無いよりは断然マシである。

鋼の重さを確かめながら、初の聖句を唱え始めた。

「冥府魔道の息吹よ此処に、洗礼をもつて吹き荒れよ」

まず顯すは死の風を呼ぶ権能。

高まる呪力に魔王の所在を知ったのか、怪物は鉄也に向けて咆哮した。

「そーら突風が吹くぞ——受け取れ！」

宿敵を討つべく向かつてきた人面龍を狙い、冥府の死に風で殴り飛ばした。

『GUGYAAAAAAA——!!』

墜落することこそなかつたが、巨体がよろめいた隙に疾走する。

術によつて後押しされた移動速度はかなりのもので、追いつかれるより先に市街地を抜けた。

『猿飛』の術——鉄也はその呼び名を古臭いと嫌い、洋風に『跳躍』と呼んでいる。

卓越した使い手は自動車とは比べ物にならない程の速度を出せるというが、今の彼もその領域に踏み込みつつあつた。

カンピオーネとなつて飛躍的に高まつた感性と戦闘勘が、肉体のポテンシャルを際限なく引き出している。

これも神との死闘に入つた影響なのだろう。

とは言え、相手は障害などない空を翔けている。

距離は確実に詰められていた。
だが——

「ここまでくれば、人的被害は避けられるだろう」

ようやく彼も、神殺しとして宿敵と向かい合う準備が整つた。

良いか悪いか相手は空中、刃を合わせる事がないなら壊れる危険もいくらか下がる。

銀閃と共に抜き放ち、峰を地に向け上段に構えた。

「如医善方便、為治狂子故、顛狂荒乱、作大正念」

瞑目し唱えるは、己の指針となつた剣鬼の祈念。
 それは彼のように意識を切り替えるための物ではなく、彼の剣を使う時のルーテイン
 に近いだろう。

「心堕醒悟、是人意清淨、明利無穢濁、欲令衆生、使得清淨」

もはや習慣、故に唱えないという選択が有り得ない。
 壬生宗次郎という男に羨望し感嘆し、憧れた。

無論、その人間性には欠片も共感できない。

すべてを斬りたい。

己こそが天下無双の刃だと証明したい。

現実に照らし合わせてみれば、馬鹿げているという他ない。
 だが、それでも。

思うところは、感じるものはあつたのだ。

「諸余怨敵皆悉摧滅——」

搖らぎながらも貫いた真芯。

斬るという信念、刀剣であるという信仰、その一途さには憧れた。
 剣鬼に、英雄勢に。

に託した。

「石上いそがみ神道流、首飛ばしの颶風かぜ——甲の第二・蠅声工さばえ!!」

そして何の因果か人を超えた鉄也は、彼らにこれだけ近付いたのだと、その昂揚を剣

蟻声——鉄也が最も多用し最も信頼を寄せる術劍。

權能の風を合わせた斬死の颶風ぐふうが上昇する。

使用者の意思と比例して威力が高まるという性質をそのまま受け継ぐこの剣は、最高潮に達した氣勢を受けて迫り行く。

空を斬り、音を裂き、摩擦を殺し——勢いの一切を減ずる事なく対象に斬閃を届けんとする。

それを黙つて見ている怪物ではない。

仮にも神の位階にある存在だ、龍尾を踊らせ華麗に躲す。

「でも、それじゃ躲せてないよ」

言葉通り、交差した刃風が弧を描いて旋回した。

自動追尾、という訳ではない。

權能の風を混ぜたことにより、ある程度の距離なら自由が効くというだけだ。日が隠れて闇に閉ざされた星空で、龍尾の巨体が舞い踊る。

「そのまま來い、 脣切りにしてやる」
なます

魔王の指揮で踊つた先は、 絶命による決着が待つ。

追い詰められて低空飛行になつた神に向け、 斬断の氣質を解き放つた。

「だああああ——ア!!」

先に放つたそれと合わせ、 計五陣の颶風が囲い込む。

剣風の檻に囚われた龍はその胴を九の肉塊に分割される事になる。

『G I——A A A A A A A A A A!!』

だが、 鉄也の顔は晴れない。

人面龍の上げた絶叫が、 悲鳴ではなく雄叫びのように聞こえたからだ。

そして、 その予感は的中する。

『G U U U A A A A A A A A A アアアアアアアアアアアア——ツア!!』

怪獣の、 分かりやすく言えばゴジラ的な響きだつたそれが、 いつの間にか人の肉声に近くなつていく。

龍鱗に覆われた肉塊が、 首に集まつて溶け出した。

変形し硬度を取り戻していった様は、 鎧に包まれた手足そのものである。

「中々にやるようだな神殺しよ。 仮初とは言え、 地上から我が胴を切り落とすとは」
厳かに通る神の肉声。

四つある拳を握つては開き、体の具合を確かめているらしい。

「自分の体を……ケートウを従属神として召喚したのか？」

「然り。その物言いから察するに、我が名は見知っているらしい」

「博識な知り合いがいてね」

「ならば隠す事もない。我はラーフ——太陽と月に報復を誓う者である！」

ラーフ、それがこの神の名前。

冬馬の予想は的中していたようだ。

仏教では羅喉星らごうとして九曜の一角に数えられる架空の星。

胴体は計都星けいととして、こちらも実在しない空想上の惑星だ。

どちらも月の交点であり、かつては実在の物と考えられていた。

一部の經典ではケートウは彗星・流星とも記されており、これが計都・天墜の元ネタとされる。

「胴体が生えたからって、調子に乗るなよ首無しがツ」

「あまり息巻くな、己の矮小さを晒すことになるぞ？」

四本の腕と一本の尾を持つとされるラーフは、龍尾を斬り落とされた事で逆に荒ぶる

戦神へ回帰したらしい。

すべての腕に剣を握り上段下段と構えた。

「さあさあ行くぞ羅刹の化身よ！ 我が剣舞にて散り碎けるがいい！」

「吐かせ羅喉星、斬神の神楽に塵と消えろ！」

初太刀から放つは斬首の死に風。

溜めなしに近い瞬間発動のそれは、首飛ばしの颶風として見れば異様だ。

だが先日の鉄也ならまだしも、今の彼には威力と溜めを反比例させる手段がある。

冥府の死に風による権能の後押し。

極小規模であれ蠅声を放つ最低限の間隙さえあれば、後の火力は権能で水増し出来るのだ。

故に。

「冥界の息吹よ吹き荒ベ！」

かまいたち

放たれた斬閃は七条の鎌鼬すざとして殺到する。

それぞれが四手二足一首を獲物と定め、今にも食いつかんと差し迫る。

しかしラーフはアスラの一角、時代が下るに連れて戦神として信仰を受けてきた神格だ。

この程度は児戯に過ぎぬと、体を回転させながら斬り伏せる。

遠心力の勢いを殺すことなく、そのまま四陣の斬撃で襲い来た。

「ぬおおおおおおおおおおおおおお！」

初太刀は上体を反らして躱し、二刀目は体を捻つてかすり傷で済ませる。人間が相手ならここで間が空いた事だろう。

だが敵は四本の腕を持つ阿修羅の一体、そうは問屋が卸さない。

更なる追撃に回避できる体勢ではなく、三撃目は刀で受けるしかなかつた。

人では有り得ない膂力により空に打ち上げられたあと、終の剣閃を叩きつけられ吹き飛んだ。

漫画やアニメでしか見られないような地面と平行した滑空を味わつてから、何度もバウンドして地面に打ち付けられた。

受身すら取れない無様な着地体勢を敵が見逃す筈もなく。

地に伏せる鉄也をラーフが追いかけてくる。

だが、そのまま安安と殺られる神殺しではない。

「冥府魔道の、息吹よ……此処につ」

クラクラと揺れる視界に目を瞑り、自分を中心に冥界の風を撒き散らす。

「死神の吐息か、だが効かぬわ！」

ラーフがアムリタを飲み不死化しているのは承知の上だ。

だからそれは砂利を巻き上げ敵の目を塞ぐと同時に、体を上空に打ち上げる役割も持つていた。

飛び上がった鉄也は刀を強く握り直し、己が権能の真価をみせる。

「我が成するは靈魂の導き、其が行き着くは絶命と知れエ——ツ！」

その聖句の通り、冥府へ誘う死神の剣を生み出した。

死毒を宿し鳴動する刀身が、無防備に晒された青い首へと——

「忌々しき太陽の加護ノロイを知れ！」

確かに届いた。

紙一重で冥府の風を祓われた直後に。

死の祝福なき鉄剣で、不死の阿修羅を斃す事はできず。

薄皮を切り裂いて終わつたその隙に、柄尻の殴打を受け再び倒れた。

「我はいま太陽スーリヤを呑んでいる。忌々しいことこの上ないが、この腹の光が闇を祓つたの

だ」

苦虫を噛み潰したような表情で宣う日蝕らごう神。

まさかこの闇の空にそんな効能があつたとは。

立ち上がり切つ先を向け、馬鹿にしやがつてと敵を睨み……

「あー、やっぱダメだ」

呟いて、鉄也は息を吐き脱力する。

「諦めたか神殺しの羅刹よ」

「うん、無理みたいだ」

無理だった、無茶だった。

カツコ付けたかつたけど無駄だった。

「殺し合いだからネタに走るのはやめとこうとか思つてたけど、やつぱモチベーションあがらねーわ」

神殺しの際に黄金と刹那を連想したからだろうか。

それとも権能のイメージに黄昏とか悪路とか言つていたからだろうか。
いや、そもそも――

「壬生宗次郎の威を借りながら、今更何を言つてるんだつて話かあ」

元がゲームキャラの技を真似ておきながらどの口が言うのだと、そういうことだ。

ならばここからは全力全開。

「思いつきり趣味に走るとしましようか」

故にこそ、敵諸余怨敵皆悉摧滅は悉く斬り伏せるのみ――

6

迷いを吹つ切つた鉄也は、切つ先を地面に突き立てて口を開く。

「種種ノ罪事ハ天津罪・国津罪。許許太久ノ罪出デム、此ク出デバ」

朗々と紡ぐのは『天つ罪・国つ罪』の言靈。

神道における罪の観念であり、祝詞の対句であるそれは冥府魔道の権能には相応しいと言える。

だが、この場合は違う意味合いの方が強い。

「頼んだぞ屑兄さん、でもつて武蔵さんよオ！」

思い描くのは黒円卓の屍兵。

絶世の名工たる初代と清らかな渴望の三代目。

その内約は、腐食毒を撒き散らす死界の創造。

「此久佐須良比失比氏——罪登云布罪波在良自！」

これより以降、周囲500メートル四方は大地すら腐敗する冥界の具現と化した。

草木は枯れ落ち、どころか形すら失い灰と消え。

コンクリートや鉄筋などの人工物、砂利や土石も塵へと還る。それ程の腐毒、神とは言え血肉を持つラーフも影響を受けた。

「ぐう、オオオオオオオオオオ——ツ!!」

皮膚は溶け落ち肉も崩れ、箇所によつては骨の白さえ見えている。

ラーフは不死の靈薬たるアムリタを口にしたが、それを飲み込む前に首を絶たれてしまつた。

不死身なのは首から上のみであるため、四肢は権能による死に抗えない。だが、それでも彼は修羅たる闘神。

形が残つている内にとばかりに、鋸び付いてきた剣を振りかざす。

それはともすれば、追い詰められて更に鋭さを増してすらいた。

「おのれ羅刹王おおおおおおおおおおおおおお——ツ!!」

「いい加減にくたばれ——ツ!!」

対する鉄也もチャンスとばかりに前に出る。

捌く、捌く、捌く――

肉を抉られ血を撒き散らしながらも、致命的な傷は避けつつ応戦する。

短い時間の中で幾十幾百と打ち合い、勝機が訪れた。

「クツ、我が佩刀をつ——」

刀身に宿る死風と周囲から侵食する腐毒に耐えかね、身体より先に剣が崩れた。

砂のように流れ落ちる刃が、二本、三本と増えていく。

それを認めたラーフは最後の足掻きか、相討ち覚悟の大振りで真っ直ぐ唐竹に振り下ろす。

決死の一撃に対し鉄也は、真っ向から打ち破るべく聖句を唱えた。

しかしそれは、先程までとは違う輪廻転生の言靈で。

「ギロチンに注ごう飲み物を、ギロチンの渴きを癒すため」

なぜ鉄也が『冥界の処刑刀』の権能を黄昏の女神に例えたか。

それは女神カナヘを愛していたというだけに留まらず、その異能が斬首を本懐としていたからだ。

女神は生来の罰当たり、触れば首を刎ねてしまう。

そしてこの権能は断頭刃、首を撥ねば不死でも殺せる。

首を落とす事が制約となつたのは、首飛ばしの颶風カゼという繋がりからか。

それとも、もしかすると。

人を愛した女神に惚れ込んだ、どこかの主人公と似ていたからなのかも知れない。

「断頭台カギトバシの……颶風カゼエ——ツ!!」

再び顕れた斬首の死刀は、以前のそれとは別物で。

氣合が違う。氣勢が違う。掛ける想いが——信仰が違う。
女神の断頭刃^{こののや}で断てない頸^{くび}などあつてはならない。

自ら黄昏^{ギロチン}を冠したからには、この程度の雜破神などに負けられない。
猛き狂念は常理を歪め、太陽の加護ごと斬り捌く。

剣を折り、太陽を降し。

遂にはその首を撥ねるに至った。

「あな憎し——否、口惜しや。我が剣舞、羅刹を斬るには至らずか」

首だけに戻つたまつろわぬラーフは、修羅の凶相を疲労の色で打ち消していた。
ふわふわと浮遊しながらも、確かに神々の領域に帰ろうとしているらしい。

「今生の別れとなる。此度の敵手よ、名を聞きたい」

「……石上鉄也」

少し躊躇したが、彼も剣士の端くれだ。

神殺しの戦士として冥土の土産と名を告げる。

「記憶した。次に人界に立つとき覚えているかは分からぬが、存命ならばこちらが挑む
としよう」

それだけを言い残し、修羅たる神は霞と消えた。

直後、両肩に荷物を乗せられたような重みを感じる。

最期は意外と潔かつたラーフだが、伝承を思えばむしろしつこい性格をしていそうだ。

新たに増えた権能が再戦の意気込みを訴えているように感じ、戻ってきた光が何だか忌々しく思えたのだつた。

八重垣・佐士神・蛇之龜正——壬生宗次郎でお馴染みの神代三剣。

その内のひと振り、佐士神こと布都御魂劍。

石上神宮で神体として祀られるそれを、鉄也は手に取つていた。

刃の方に湾曲している内反りの鉄剣。

どちらかと言えば剣というより鎌に似ているとさえ思える。

まつろわぬラーフとの戦いがあつた翌日、一晩寝たら全快してカンピオーネのデータラメさ加減に戦慄した昼頃。

戦闘後に脆く崩れ去つた刀に落胆した代わりに、奈良県は天理市までやつて來た目的を遂に果たせたのだ。

——靈劍・布都御魂。

神体として祀られ多くの信仰を集めたそれは、元がどうあれ紛れもない神刀であつた。

確たる意思こそ持つていないが、『Dies irae』で言う聖遺物のそれに近い力を宿している。

今は夜を過ごした近隣の宿で、これを相応しい形へと変えるところだ。

許可は（半強制的に）とつてあるし、そうしないと実戦では使えない。

それにより、抜刀と同時に斬殺という宗次郎節が再現できないではないか。

……いや、実行する気はないが。

しかし、出来ないと出来るけどやらないの差は大きいのだ。

などと己を正当化しながらも、慎重に呪力を流し込んでいく。

鍊金、製鉄、変性、変形。

呼び方は何でもいいが、つまり金属の形を変える術である。

のだが、この場合は少々事情が異なる。

仮にも神刀、仮にも神体。

宿つた中身を蔑ろにしてはこの剣を使う意味がない。

慎重に馴染ませ、それに最も相応しいと感じる言霊を詠唱する。

それさえ出来れば失敗はないと直感しているから。

まあ、鉄也がここで詠唱するものなど決まつてゐるが。

「壱、弐、参、肆、伍、陸、漆、捌、玖、拾。布留部、由良由良止、布留部」

傍で気配を殺してゐる冬馬も予想した通りの詠唱を始めた。

布留の言、十種神宝を意味する魂鎮めの法。

剣神となつた壬生宗次郎の神咒だ。

「八重垣・佐士神・蛇之龜正——神代三剣、もつて統べる石上の颶風。

諸余怨敵皆悉摧滅」

ドクンと、大きく鉄剣が脈打つ。

鉱物ながら生き物ように脈動し、震えている。

次いで、宣誓のように告げられた言靈に呼応した。

「——太極——」

それに本来の意味はない。

ただ詠唱の一部としてあるだけだが、それが重要な部分だと剣も理解してゐるのだろう。

そう、理解。

鉄剣は意思を持つた聖なる器物へと新生し、主に相応しい形を成す。

「経津主・布都御魂剣」

神咒ではない。

神威かむいでもない。

そこに神樂かぐらはなく。

故に太極たいきよくに非す。

しかして奇跡には違たがいなく。

靈劍・布都御魂は、こうして魔王の佩刀に新生したのだつた。

布都御魂は靈剣だ。

その靈力は毒気を払い活力を与えるとされ、日本刀の形となつてからも宿つた力はそのまま使える。

鉄也が携えた場合、発する剣氣だけで大抵の魔術・呪術は斬り払える術破りの靈刀だ。だから冥府の毒風と兼ね合えるかが不安だったが、その心配は杞憂だつたらしい。権能で処刑刀に変化させても、死毒の悪影響だけを取り除けるいいとこ取りが可能だつた。

「うん、流石だな。斬る対象も選別できるとか、流石は布都御魂剣だ」

「そのあたりは権能と同じく、石上さんの意識が影響しているのかも知れませんね」
まずヘカテーの権能からして術者の意識が如実に現れている。

不死殺しの首狩りとかはモロにそれだ。

「でも、カンピオーネの権能は神殺しを統括しているパンドラに調整されてるらしいで

すし、むしろ俺というより義母ははおやの方が怪しいと思うんですよ」

などと言い逃れに走る鉄也だが、その意見には一理あるかもしれないと冬馬は思つた。

「確かにまあ、有り得ないとは言えませんけど……そういう石上さんは、女神パンドラにお会いしたことは？」

「転生の時に一回だけ。薄ぼんやりとしか覚えてませんが、見た目だけ言えば可愛い女の子でしたね」

莊厳な空気を纏つた包容力のありそうな少女、という風体だつた氣がする。

体型的に少しばかりアレだが、イメージとしては太陽さんとか黄昏様とかが似合いそうな。

つてあれ、もしかして本性はバカつぽかつたり、どこか抜けてたりするのだろうか？
……いや、考えないでおこう。とりあえず顔は可愛かつた。

「女神は大抵がそうでしょうとも。人知を超えた神の造形など、まつろわぬ神には標準装備だそうですからねえ」

言つて、冬馬も少女神がエロがおまけなエロゲーをプレイしている光景を想像し、殘念な光景に萎えるようなマニアックな姿に萌えるような、何とも微妙な感慨を抱いた。
似たような想像をした鉄也も複雑な思いをしつつ、何だか違和感が湧かない不具合に

頭を振る。

「とりあえず、このまま権能が増えていけば明らかになるでしょうよ。神座万象な能力ばっかりだつたら、大人しく俺のイメージが反映されてるって事で認めます」

「何だかその姿を早く拝める予感がしますけどね」

「ちよつ、そういう直感つて神殺しのお家芸でしようと！」

という風に仲良く東京へ帰る一人であつた。

この予言が的中するのは、これから半年後の事である。

笑わせるなよ甘つたれども！ 真に愛するなら壊せ！

彼もそれを望んでいる。そしてこれは……我が君の遺命である！

「うう、龍明の姉御痺れるう！」

奈良での神殺しから一週間。

鉄也は休日を利用してパソコ聖典ンに向かい合つていた。

それもこれもラーフとの一戦で、己の指針を再認識したため。

自分の技は壬生宗次郎の威を借る剣。

自分の権能は歌劇の主演たちへの信仰の形。

ならばそれを誇り理解を深めようと、七割の本気と二割の遊び心、残り一割の暇つぶしを兼ねて熟読していたのだ。

これを木偶の剣と言われれば否定はできまい。

中身がない鍍金と言わればそれまでだ。

だがそれでも、俺は彼らを信奉している。

旧神の歌劇も新鋭の絵巻も、楽園の神話とてすべてが愛しい。

どこぞの正義の味方じやないが、借り物の剣でも貫きたいと思つている。

と、格好良いことを言いながらゲームに熱中しているだけな少年の姿がそこにあつた。

つていうか俺だつた。

「変わんないねアンタ……」

そんな姿を見て苦笑を零すのは彼の母。

帰国後は色々と気が動転したものだが、今となつてはまるで進歩しているように見えない息子に安堵を超えて呆れている。

「人類史に希に見る偉業を成し遂げたつていうのに、まるつきりそのままじやないの」「そりやそうだ、俺は何も変わっちゃいない。神殺しの魔王とか羅刹王とか言つたつて、

俺は俺なんだからそうそう変わつたりしないだろうさ」

両手のひらを上に向け、態とらしい態度で肩をすくめる。

そんな鉄也に呆れた目を向けながら、それでも何か感じる物があつたのだろうか。
近くに歩み寄つた母は、息子の頭をゆっくりと撫でる。

「ん……なんだよ」

「何でもないよ、ヨシヨシツ」

いい年をしてと照れながら、大人しくされるがままの鉄也だつた。

彼は、そしてその母も。

家に帰つて泣き散らした夜を忘れていない。

辛かつたと。

苦しかつたと。

女神殺しなんてしたくなかったと。

魔王になりたくなかつたと泣くその姿を、母親は決して忘れてなどいない。

自分では何の力にもなつてやれないが。

それでも、こうして愛してやる事は出来るのだと。

母の愛は誠に偉大である。

親子の触れ合いから一時間後、鉄也は再びディスプレイに向き合っていた。

しみじみとしたから熱いバトルで吹き飛ばせ！

とばかりにマウスを力チカチ、キーボードをパチパチと読みすすめている。もう末期だろうコイツ。

第三者がいればそう見限るような光景だが、とある一幕で手が止まる。

生きる場所の何を飲み、何を喰らつても足りねえ。

けどなあ、それで上等だろうが！ 甘えんなッ！

神様に頭下げて、摩訶不思議な神通力でも恵んでもらつて、そんな自分は強くてすごいだあ

——ふざけんなこの根性なしどもが！ 玉ついてんのか切り落とすぞオ！

「……」の台詞には色々と思うところがあるよな

呟いてベッドに寝転がる。

ぼんやりと天井を見つめていると、隅に追いやったはずの光景が再度浮かんでくる。

震える手振り抜いた太刀滴る血光を反射する刃金ひらひらと舞い落ちる布切れ潤んだ蒼穹の瞳鮮血に濡れた艶やかな黒髪微笑んだ口元微笑んだ笑顔笑顔笑顔笑顔——ごめんねテツヤ。

——ツ

神話から抜け出た神。

それを打ち倒す神殺しの王。

創作の題材にでもなりそうな馬鹿げた世界。

そんな世界に生き、あろう事か神をこの手で殺した自分。

愛した女神おんなを斬り殺しておきながら、王様氣分で悠々自適になど行くはずがない。

馬鹿げている世界。空想じみてる自分。

本当に自分はこの世界に生きているのか？

いやそもそも、本当にこの世界は現実なのか……

いやそもそも、本当にこの世界は現実なのか……

いやそもそも、本当にこの世界は現実なのか……

失意の中で眠りに着いた鉄也は、目覚めた途端に全力疾走で家を飛び出した。

「祓い給え清め給え祓い給え清め給え祓い給え清め給え」

早朝からどこに行くのかと思いきや、以前に蠅声の試し撃ちをした山中の修練場に向かう。

着いた途端に禊ぎの祝詞を唱え、音も遮断する結界に託^{かこ}つけて羞恥に悶え絶叫していた。

「何をアホなこと考えてんだよ俺はなにが『本当にこの世界は現実なのか……』だよバツカじやねーの中二病かよそだよ中二病だよじやなきやゲームキャラの真似とかマジでやつてるわけねーだろおおおおああああああああああああああああああああああああ——!!」

ゴロゴロ、ゴロゴロ。

頭を抱えて剥き出しの土肌を左右に転がる。

「バツカじやねーのバツカじやねーのバツツツカじやねえツのおおおおおお——!!」

一通り叫び終えた鉄也は、立ち上がりつて深呼吸を繰り返す。

「よし、何もなかつた」

呼吸を落ち着け瞑目したあと、記憶を抹消して立ち直つたらしい。言葉通り何もなかつたかのように剣を取り出し、素振りを始める。

剣道でよく見られる面のイメージで、前後に送り足を繰り返す。

一定数をこなしたら仮想敵を思い描いてシャドーボクシングの要領で訓練に入る。

その相手は鉄也が知る限りの暫定最強、日蝕の阿修羅ラーフ＝ケートウである。

この修練場に展開された結界に手を加え、彼を象つた影を投影する。

「唵・摩利支曳娑婆訶」
〔オン・マリシエイソワカ〕

それは本来、彼が目標とする壬生宗次郎の属性ではない。

彼の対存在である蜃氣楼、玖錠紫織の使う技。

とは言えこの術は、己の可能性を拡大して数多の自分という実像を展開する世界法則の歪みではなく、その場にないものを映し出す幻影創造という本来の形。

呪術の専門家ではない鉄也の腕では細かい装飾まで再現できず、鬼神の如き形相は黒に塗りつぶされて見えない。

だが、それでいい。

見た目など手足があつて首が分かれれば、斬り合う相手には十分だ。

強度も高い訳ではないが、鍔迫り合いが出来るなら構わない。

布都御魂剣も接触と同時に術を消してしまうので使えないが、そもそもラーフと戦つた時には持つていなかつたのだからむしろ邪魔になる。
影の術式を自律させた鉄也は、『召喚』で自宅の倉庫から予備の刀を取り寄せて構えた。

これで維持に意識を割かなくても、「こういう行動を取られると困る」という思考から勝手に動くようになる。

そして考えた悪い未来の通り、高速で死角に入つた影から斬りつけられた。

一撃、二撃、三撃、四撃。五閃、六閃、七閃、八閃……九斬、十斬、十一斬、十二斬

四本の腕から繰り出される連続斬撃は、絶え間なく敵を斬壓する驚異にして脅威の剣舞。

しかしそれも、鉄也からすれば攻略法が存在する拙い技術に過ぎないのだ。

いつかと同じように一撃は避け二撃も躱し、三撃は弾いて四撃は受ける。

五閃目からもこの流れを続け、徐々に盛り返しつつ十二斬の終わりには大打撃を与える。

た。

「で、すぐに倒せちゃうんだよなあ」

鉄也の想像力が足りないのか、実態のない神では不足しているのか。

そもそもからして、神殺しの戦士には訓練など気構えくらいにしかならないので仕方がない。

今も止めていないこの鍛錬とて、惰性で続いているに過ぎないのだから。

「……なんか、他の神殺しが強敵求めてる気持ちが理解できるようになつて来たかも」要は、この世界が窮屈で退屈なのだ。

なまじ人間社会など戯れに破壊できる力を持つてゐるから、それに大した意義を見い出せない。

彼らが恐れられる暴君の所業は、興味がない故の余波が行つてゐるだけなのだ。

「つてやめだやめ！　また世界がどうとか、変に思考が偏つていくし……」

帰つて朝食を食べようと、頭を振つて剣を収めた。

石上鉄也もやはり神殺し。

凌ぎを削る戦場こそが、最も迷いなく在れる憩いの場なのかもしれない。

それからの数週間数ヶ月は、何事もなく日々を送つた。

いくらカンピオーネが騒動の元とは言え、そう毎月のように敵が来る訳ではないのだ。

もしそんな輩がいたのなら、それは本人にも多大な原因があるだろう。
と、別世界に喧嘩を売りながら日常を謳歌する鉄也。

そんな彼も、もう高校卒業だ。

これからは正史編纂委員会において、対神職員として働く事になる。

表向きには特殊な資格を持つていたので勧誘された公務員の一員、という名目。

決して嘘を付いている訳ではないことが味噌だ。

(世界に七人しかいない)特殊な(神殺しの)資格を持つていたので(トップに立たない
かと)勧誘された(政権組織の一員である)公務員の一員(と言える立場)
詐欺みたいな言い訳だが事実だ。

この先の未来を思いながら花道を潜る鉄也。

どこか超全的な威風堂々とした態度は、意識していないからこそ際立つて見える。
愛を抱いて、ある意味での失恋を経験し、人間性という意味で大きく成長した彼。

その気風に惹かれる少女も、同学年に限定したとてそう少なくはなかつた。

だが、どれも一刀で袖にする様から、決めた相手がいるのだという事も知れ渡つてい
る。

どれほどの美貌でどれほどの器量があろうが、彼女以上の異性はいないし彼女以外の伴侶はいらない。

今はもういない、いつかまた出逢えるかもしれない少女を想い続ける。

次に顕れた時には覚えていないかも知れないし、そもそも同じ彼女かも分からぬ事だけど。

それでも俺は、待ち続けるつて決めたから。約束したから。

神殺しとなつた少年は、新たな一步を踏み出した。

式神。
しきがみ。

陰陽師が使役する人ならざる鬼神、式鬼、

式鬼神とも書かれる

ここで言う鬼神とは文字通りの妖怪変化であり、時には神靈や荒御魂も指す。

鉄也的に表現すれば「丁禮と爾子のこと」という一言で済ませるだろう。

つまり何が言いたいのかと言えば……

「この仔を式神にしてやりたいんですが、かまいませんねっ！」

「構いますよ何を言つてるんだあなたは」

沙耶宮馨^{かおる}が即答で斬つて捨てた。

石上鉄也がこんなことを言い出したのは、数時間まえの騒動に担を発する。

プルルルルルルルルルルルルルル！

東京の一角に建つビルの一室に電話の音が鳴り響く。

多くのデスクが並ぶ中で、その一つに男が一人だけ座っている。

「プルルルルル——ガチャツ！」

その一人だけの男、黒いスーツを着た鉄也が受話器を取った。

「はいもしもし、コチラ特命係い」

この名乗りはふざけている訳ではない。

正史編纂委員会東京分室、退魔部神靈対策課、特命係係長。

この春から増えた鉄也の肩書きである。

神靈対策課自体が新しく作られた枠組みであり、特命係とは即ち討伐による処理を行う部隊を意味する。

つまりは神殺し専門の部署ゆえに鉄也しか所属していない。

その特異性から、部下を持たない某警視庁特命係に似た特別待遇だ。

この場合の特別待遇は、もちろん良い意味で。

そんな訳だから、基本的には通勤だけして簡単な事務処理を手伝つて帰るような毎日

だ。

『どうも石上係長、僕です。こうして仕事用の内線でかけている事からわかるように、なかなかの事件ですよ』

こんな電話が来ない限りは。

相手は沙耶宮馨東京分室長。

鉄也の上司であり雇い主であり、裏政治的には部下で右腕と言えるだろう。

欧洲魔術界の方々には、サルバトーレ卿に政務を任せられたアンドレア卿と言えばイメージしやすいかもしない。

「こんにちは沙耶宮室長、とりあえずまつろわぬ神ではなさそうですね」
『ええ、連絡があつたのは埼玉の三峯神社みつみねから。神使しんしとして祀つてある狼が顕現したと
のことです』

神使とは、読んで字の如く神の使い。

神の意を代行する眷属であつたりを意味する。

三峯神社で守護者として祀られる狼が、神獸として顕現しているらしい。

今は在中だつた巫女たちが神社の結界で抑えていたが、それもどれだけ持つか分から
ない有様だという。

『そんな訳で、そちらに車を回して貰つてます。急いで向かってください石上係長』

「了解しました、沙耶宮室長」

と締めくくつたはいいが、ここで鉄也が流れを切つて脇道に逸れる。

「しかしまあ、何というか……特命係の係長とか言わると某ただの係長を彷彿とさせ

ますね』

『それはそうでしょうとも。なにせ、係長にしようと言い出したのは甘粕さんですから
「あの人ちよつと俺をおちよくり過ぎじやねえ!?」

『ちなみに、特命係と命名したのは僕です』

『沙耶宮室長、アンタもか!』

本当に愉快な職場である。

色々と退屈はしないようでそこに不満はない鉄也であつた。

「修羅曼荼羅・豺狼キタ━(。▽。)━！」

現場に到着した鉄也の第一声である。

色々と酷いのはいつものことだ。

「ゴホンツ……戯れ言は後にして、先に片付けた方が良さそうだな

神獣を抑えている巫女たちに礼を述べ、結界を解いて体を休めてもらう。

時間にして一時間弱と言えども、人間にはかなりの重労働だつたはずだ。

刀を持たず丸腰のままで近付くと、それでも警戒しているのか唸りを上げて姿勢を低く身構えている。

「言葉が理解できるか分からぬいけど、とりあえず俺の心構えとして聞いておく。このまま牙を仕舞つて不死の領域に帰る気はないか?」

『ウウウウガアアアアアアアア——ツ!』

神社の屋根とそう変わらない高さにある大口が咆哮する。
どうやら帰る気はないらしい。

となれば、もうやることは決まっている。

「退魔部神靈対策課、特命係係長、石上鉄也。護国の任を受けし者として討伐を開始する」

この名乗りにて意味がある。

魔王が正史編纂委員会という組織に組みしているというアピール。
委員会の権威を誇示し、魔王への畏怖を緩和する目論見だ。

まあ当の鉄也とて、カツコ付けたいという思いがないではないが。

何はどうもあれ、初の実戦となる布都御魂のお披露目だ。

「梵天王魔王自在大自在、除其袁患令得安穩」

手中に収まつたまつろわす霊剣が大狼を前に鳴動する。

あしほうなかつくにけがい
守護を請け負う神使と言えど、無辜の民を襲うならば化外として討つのみと。

葦原中國を平定した神代の宝剣が戦意を高めた。

「諸余怨敵皆悉摧滅——首飛ばしの颶風・蠅声」

静かなる宣誓により放たれた刃風。

敢えて権能を使わず己の斬氣のみで撃ち放つたそれは、確認の意味を込めたある種の当て馬に近い。

現に神獸は巨体でありながら軽やかに躲し、被害は石畳を穿つ程度に留まる。

(やつぱり、蠅声は強くなつたけど弱くなつたな……)

その光景から矛盾した事實を確信する鉄也。

甲の第二・蠅声は使用者の殺意・戦意・斬意によつて威力を増す。

逆に言えば、戦いに乗り気でなければ自然と規模は低下する。

神殺しなとなつた事で膨大な呪力により火力は底上げされているが、神が相手でなければ斬氣が絶頂に至らず振れ幅が大きい。

まつろわぬ神と相対すれば最高潮のコンディションとモチベーションで安安と限界を超えて行くのだが。

これではそれ以外に対して、剣技としては欠陥品となつてしまつた。

真なる殺意が込もらない剣などまさしく木偶の剣。

実力差を鑑みれば確殺するべき相手でも、万が一、億が一くらには生き延びられるかもしねりない。

そう、例えば御前試合の龍水のように。

この先、これが致命傷とならなければいいのだが。

嘆息した鉄也は、それでも隙を見せぬまま灰狼の前に立つ。神の使いは、静かに隙を伺つていた。

10

古来の日本において、狼とは即ち大神。

害獸を駆逐する山犬たちは、山の神の使いとして考えられていた。
そして狼その物が信仰を受ける場合がある。

害獸を退け悪しき者を噛み碎く魔伏せの神、真神——大口真神として神格化されてい
るのだ。

三峯神社みつみねではその大口真神を祀つており、この神獸もまたその系譜なのだろう。

故にこの大狼は放つておけばまつろわぬ神になるかもしがれず、そうなれば後世の「人
と家畜を襲う獰猛な獸」というイメージにより性質が歪み、海外の血脉や文明が入り混
じつた現代の人間社会を外敵と見做し、暴虐の限りを尽くすはず。
まつろわぬ神とは、そうせずにいられないのだ。

その事は痛いほどよく知っている。

「……だから、俺のやることは変わらない」

斬る。ただ斬る。ただ斬るのだ。

神を殺す羅刹の化身、戦いに生きる天性の戦士。
それこそが石上鉄也^{カンビオーネ}という生き物だろう。

「石上神道流・甲の第二、蠅声」

もはや自身の代名詞とすら言える剣閃を再度放つ。

一条、二条、三四五六——その場に留まつたまま剣気を飛ばす。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオン——ツ!』

一度見た技だと嘲るように、大狼は瞬足で回避する。

どのような術理が働いているのか、巨体を捻つて斬滅の檻をくぐり抜けている。

「お前は本当にシユライバーかよ……」

狂乱の檻に囚われた暴狼、と言えば間違つてはいない。

接触忌避による絶対回避とまではいかないらしいが、それでも驚異の速度と回避率だ。

決して広くない境内を縦横無尽に駆け巡り、右側面から襲いかかってくる。

『ガアアアアアアアアアアア!!』

そのまま右前足を大きく振り上げ、上から押し潰す勢いで叩き付けた。

『跳躍』の術で危なげなく回避したが、タイミングがずれていたら危なかつただろう。

先程まで鉄也が立っていた場所は、その巨体に見合つた大きな爪で抉り取られてい
た。

流石に洒落にならない威力だと感じたのか、彼も自分から前に出る。
地を蹴つて一息で迫り、布都御魂を右に薙ぐ。

人間の首程度なら二つ三つどころか十か二十は軽く飛ばせる斬の強撃。
靈刀の加護もあつて疾風の速度で成した高速斬術。

しかし巨狼はまたしても、紙一重ながら避け切つた。

それで終わらず、鉄也の周囲を円を描くようにして旋回を始める。
どこかで見たような構図だ。

具体的には淡海の辺りで爾子と丁禮がやつたアレを思わせる。

「でもまあ、白騎士^{あそこまで}じゃないなら——つて、え？」

斬滅の意をもつて呪力を高めると、急激に敵の動作が鈍くなる。
果ては踏み込みの振動や風を切る音と共に静止してしまつた。

大口真神の化身は名前の通りに大口を開けて、真正面から迫つて來ていたようだ。
急な出来事に鉄也も混乱を露にする。

何が起こつたかは分かるが、なぜ起こつたのかが分からぬ。
(……いや、そうか。なるほどこれなら)

鉄也は散歩でもするよう近付くと——まるで事のついでのような気軽さで首を撥ねた。

「この程度で片付くよな」

そこで、時間の流れが元に戻った。

後に残つたのは石畳の破壊痕と……

「なして？」

鉄也が首を傾げた先にあるのは、両手で抱えられそうな灰色の毛玉。

「クゥーン」

仔犬の大きさとなつた神獣の成れの果てであつた。

調べてみれば、仔犬は神獣の核として機能していた寄り代だつたらしい。

どこからか迷い込んだ山犬の子供が、神社の内部にあつた大口真神を象つた器物に接し、その結果として凶獸あんなつた変生と。

神獣相手だからと死の権能を使わなかつた判断を褒めてやりたい。

もし処刑刀で斬首していれば、死の呪いで仔犬まで死んでいただろう。

納刀と共に安堵のため息を吐く。

そして同時に、これから処遇に思いを馳せる。

仮にも神獣の寄り代、神狼の化身として変生した存在だ。
軽率には扱えないし扱うべきでもなく、過激な思考の者なら処分してしまうのが当然の対応だとする者もいるはずだ。

しかし、石上鉄也はそこに物申す。

鉄也が実は犬好きだったとか可愛いは正義とか理由は色々とあるが、彼が言いたい事はただ一つ。

——そんな後味の悪い結末を認めてたまるか。

ただこれに尽きる。

だから子犬の助命は決定事項として、できるだけ軋轢あつれきを生まない解決方法を模索した結果が、最初の一言に行き着いたのだ。

即ち、使い魔しきがみという名目で羅刹王じぶんが保護してしまえば済む話ではないかと。事実として、誰もその意向に反して手を出すような輩はいない。

黄昏の抱擁がウザいからと霸道神三柱の連合に殴りこめるような怪物も命知らずも、日本呪術界には存在しないのだから。

「という事で Take 2……この仔を式神にしてやりたいんですが、かまいませんねつ

！」

「まあ、その理由を聞いて断固拒否とはなりませんよ。それに結局のところ、あなたの意
思に背く勇気は僕にない」

苦笑ともに両手を上げて賛同してくれた馨。

とか何とか言いつつ、本当に譲らない一線に踏み込めば面従腹背で裏から手を回すく
らいは普通にやつてのけそうな彼女だが、今回の事情からしてそういう行動に出る事は
ないだろう。

方々にもそのように伝えると言つてくれた彼女、鉄也は眉目秀麗な麗人に感謝した。

「良かつたなあチビ助」

「キヤンツ！」

「つてえ！」

抱えていた件の子犬に話し掛けると、ガリツと腕を噛まれてしまう。

思わず振り落としてしまった鉄也だが、本犬はすまし顔で着地した。

「いきなりどうしたんだよチビ助え」

「ガウッ！」

「つとお！」

再び話し掛けると、次は足首の周辺を引っ搔きに来た。

流石に今度は回避するが、ここに来て鉄也も感付き始める。

「なにお前、もしかしてチビって呼んだの怒つてる？」

「ワンツ」

「え、なに、どういうこと？」

状況の変遷に興味を抱いたのか、馨も交えていくらかの検証を行つた。

その結果として分かつたことは、一時的に神獣として上位の存在に上がつていて影響か、子犬に何やら知性が垣間見えるのだ。

チビという言葉に反応して怒り、ちんちくりんと呼べば噛み付く。

あまりに人間的な態度を見て鉄也が思ったのはただ一つ。

「……お前は龍水か」

「クウ？」

流石にゲームキャラまでは知らなかつたらしい。

シユラライバーかと思えば中身は龍水だつたとか、確かに夜行繫がりで関係がないでもないが。

ここまでやり取りを見て馨の決意も固くなつたようだ。

「これは非常に興味深い、石上さんが引き取る方向で間違つていなかつたようですね」

「……まあ、流石にこういうのは予想してませんでしたけど」

「フフツ……これも魔王閣下のお導き、この子の行く先が楽しみだ」

苦笑する神殺しを尻目に、その右腕は訪れる未来図を模索し始める。

何とも愉快な立場と現状で飽きが来ないとご満悦な彼女。

主たる鉄也も似たような考えを持つていたが、これは似たもの同士の一種なのだろうか。

話のタネは、不思議そうな表情で両者を見上げていた。

それから半時間弱、鉄也はブツブツと呴いては唸っていた。

「素直に爾子にこと名付けるべきか……いやコイツは雄だしな、だからって丁ていれい禮も違うし。そもそも神獣状態ならともかく、このちっこいのにシュライバーは合わないか」

「ガウッ！」

「おつと喰らうかあ！」

ちっこいに反応しやがつた。

ホントに初期の龍水かよこのちんちくりん。

「よしよし分かつた、チビ呼ばわりしなくていいように名前を考えてるんだからな」

「グウ～……キュウ～ン」

うーん、ならば良し。

とでも言うような返答に苦笑いしか浮かばない。

こういつた感じで主従仲のいい両者だが、主の方は必死に頭を捻っている最中だ。

内容はやり取りからわかるように、彼の式神となつた子犬の名前。

日本の魔王が連れる日本の子犬に横文字の名を与えるのは体裁が悪く、だからといって日本的な名前となれば中々の難題である。

こうして名付ける立場になつてみると、世のお父さんお母さんの苦労も忍ばれるというものだ。

よく有りそうな名前とか思つててごめんなさいと、鉄也は胸中で両親に向けて謝罪した。

「にしても、本当にどうするかなあ。中身的に龍水関係を見繕うにしても、それっぽいのは見当たらないし」

夜行は摩多羅神として童子の丁禮多・爾子多を従えた三尊であり、それぞれが仏教の三毒たる貪・瞋・癡を象徴するという題材おもいかねのかみが存在している。

しかし龍水のモチーフと目される思兼おもいかねのかみ神には、丁度いい名前の象徴がない。

「だからつて普通に犬として名付けるのも、なんか違う気がするんだよなあ……」

それは将来的に開花するかもしれない才覚を、無意識にでも見透かしているからか。なおも唸る鉄也に助け舟を出したのは、様子を見守つていた馨だつた。

「石上さん、何も無理を探す事もないのでは? 聞いている限り主軸としている物があるようですし、関係するものではなくそのものから名前を取つてみては?」

「なるほど……ふむ、まあそれが妥当なのか?」

言われてみれば確かに、名前なのだから呼びやすい事が第一。

変に凝つた物を持つてくるより、一部拝借という方が適しているだろう。

そうなるとどう持つてくるか、鉄也は思案の末に一つの名を決めた。

「よし、お前はコロだ。やこころおもいかねのかみ八意思兼神だから、それから取つてコロ」

あくまで本当の意味は八意であり、愛称がコロ。

コロコロしていて犬っぽい名前だし、我ながら悪くないんじやないかと思う。

あと恋姫で言う真名まなとか英靈の真名しんめいとかみたく、そういう伏せ名みたいで格好良いし

!

「つて事で名前はコロ……じゃ、ダメか?」

「フウ~」

「うわコイツため息吐きやがった!」

「ワンワン」

「はいはいそれでいいよ、つて感じで鳴かれた……」

あまりに人間臭く、そして心を抉る反応に泣きそうになる。

しかし名前の件そのものは認めてくれたらしい。

「それじゃ、よろしくなコロ」

「ワンツッ！」

最後は仲良く元気よく、一人と一匹は主従かぞくになつた。

「明日までには事務所の方もペツト可にしておきますから、安心しておいて下さいね」「ホンつつつトに何から何まですみません沙耶宮室長、どうぞよろしくお願ひします」「はい、お任せ下さい」

「……フウ」

最後のコロのため息には、締まらねーなコイツという意思が感じられたらしい。

コロを引き連れて帰宅した鉄也の姿に、両親は特に驚く様子もなく対応したのだった。

まず鉄也が風呂場で体を洗っている内に、母は最低限のペツト用品を買い揃えて來

対する父はと言えば、ちょっとした日曜大工で専用の木製トイレを作つたかと思えば、凶事避けの呪符を家の各所に貼つて回つたりと、色々気を利かさせてくれたようだ。

流石は両者ともに術者だけあって、ひと目でコロの特異性を見抜いていたらしい。

そのきっかけとして、神殺むすこしが連れて來たのだからただの動物な訳が無い、という確

信的な先入観があつたことは否めない。

結果として何も間違つていないので、その非常識な息子も反論のしようがなかつた。

「唐突だつたけど、ありがとう」「一人共

「何言つてんの、アンタが唐突で無茶苦茶なのは今に始まつたことじやないでしょ?」

「はい、返す言葉もありません」

ヨーロッパ留学から途中帰国し、言い放つたのが「なんか神殺しやつちやつた」である。

いくら言葉に窮していたから茶目つ気を出してみたといつても、思い返せばアレはなかつたと後悔している。

「それには、コロちゃんの事情を聞いて、少しホツとしてるのよ」

「つて言うと?」

首を傾げる息子に、母は普段通りの聲音で語りかける。

これは語つておかなければならぬ事だと、己自身をも諭すように。

「まあ十年、二十年くらいは先の話になるだろうけど、人間どうしたつて寿命つて物があるじやない。順当に考えれば、私やお父さんはアンタより先に人生を終える」

「……まあ、だよな」

まだ遠い先の話だと考えたくもない事だが、それは否定の出来ない事実だろう。

「それにアンタの場合、侯爵や教主の例を見るにいつまで生きるか分かつたもんじやないでしょ？ 母親としては息子の長生きは嬉しいけど、これでもそこと人生経験積んできた方だと思うから、先に逝かれて残される辛さも知ってる」巫女の系譜としてかつて幾度となく戦場に出ていた彼女は、その過程で幾人もの知人友人を無くしているのだろう。

鉄也もまた呪術者、人死にを見た事がないでもないし——余人ではそうそうない経験もしてしまっている。

「だからね、コロちゃんがアンタの式としてそばにいるなら、少しくらいは寂しさも紛れるかなつて安心したの」

無論、彼女とて理解している。

神獣の成れの果て、神狼の雛形もある八意^{コロ}は、いざれ戦場に立つだろう。

そしてその時の相手は、まず間違いなくまつろわぬ神々か神殺しの魔王になるということも。

そうなれば果てる可能性も爆発的に跳ね上がるということも、もちろん理解しているとも。

だが、そこは人間には関与出来ない領域だ。
故に息子を信じるしかない、信じていると言わせてほしい。

既に大空へ羽ばたいてしまった若き息子へ、それしか出来ない母親の愛だ。

「このバカ息子をよろしくね、コロちゃん」

「クウーンクーン」

分かつたから安心してね。

しみじみと母の足に擦り寄る姿からは、そんな心境が伝わって来そうだつた。

「ところで鉄也、コロが神獣化していた時の事なんだが……どうだつた?」

「すぐく、シユライバーでした」

斬撃の檻を回避した一幕などを身振り手振りに伝えると、父は感動と興奮を覚えたらしい。

「そうかそうか、俺も見たかつた物だなあ」

「ま、コロが育つたらいつかは見れるんじゃないの?」

「そうだよな。よしコロ、よく食べてよく育つて俺にも見せてくれよお」

「クウー」

件のコロからは、コイツらはまつたく……とでも言いたげな視線を向けられた気がした。

プルルルルルルルルルルルルルル！

「はいはいはい、特命係の石上ですよつと」

鉄也とて一応は組織に属する社会人だ。

このようにふざけた挨拶をするのは、特定の人物に限られる。
つまりこの電話は、その例外の一人という事であり。

『どうも壬生さん、私です』

「これは大尉殿、ご無沙汰します」

一部の人種ならば分かるだろう。

電話の相手は大尉こと甘粕冬馬であつた。

「ところで正彦さん、俺の名前は石上ですよ」

『失礼、囁みました』

「いいえ、わざとです」

『かみまみた』

「わざとじやない?!」

『かぎろいの』

『燃ゆる春へとなりにしものを』

今さらに、雪降らめやも、かぎろいの——燃ゆる春へと、なりにしものを。

万葉集の歌の一つである。

『おや、そちらを選びましたか。私としては人麻呂さんの方を思い浮かべてましたが』

「咄嗟に出てきたのがこつちだつたんですよ。それに、俺としては当然の選択ですよ

まりしてん
摩利支天的に』

鉄也の言う摩利支天——玖錠紫織はこの歌を自己催眠の祝詞としている。

信者たる彼が思い浮かべるのにも領ける。

対して冬馬が言つているのは、こちらも万葉集の短歌。

東ひんがしの、野かぎろいの、炎かぎろいの、立たつ見みえて——かへり見みすれば、月つきかたぶきぬ。

どちらも陽炎かぎろいで有名な歌であり、後者の作者が柿本人麻呂かきのものひとまろとされているのである。

『なるほど。それにしても石上さん、私の名前は冬馬ですよ』

「これは失敬、勘違いしていました」

『勘弁してくださいよ、それは甥つ子の名前なんですから』

「本当にすみませんで s………甥っ子オ!?」

暫し思考が麻痺し、言葉の意味を理解して絶叫する。

思わず立ち上がつたせいでガタンと椅子が倒れたが、そんな事に頭を割く余裕はない。

「あ、ああああ、ああああああ甘粕さんつ——甥っ子つてどういう事でせうつ!?」

『あ、そうそう。石上さん、この電話の用件なんですがね』

「そそそなこと、どおおおおおおおおでもいーんですよお!! 甘粕さん、ねえ甘粕さん、あなた一体何者ですかあ!? つてか甥っ子が何者ですか! 諦めなければ夢は必ず叶うと信じているのかアツ!!」

もう何を言つているのか聞き取りにくいくことこの上ないが、その意気込みと混乱の程は察して余りあるだろう。

そんな彼の状態に無視を決め込んでいるのか、電話口の冬馬はスラスラと用件を言い始める。

『実は奥多摩の方で龍が顕現しましてね。そばには氷川神社が建つていて、それ閑連だと目されています』

「ちよつとそれどころじゃあ……ない、とも言えないかあ。龍だもんなあ、そりや遊んでる場合じやないよなあ』

未練タラタラにも程があるものの、何とか意識を切り替えていく。

しょよおんてきかいしつざいめふ
諸余怨敵皆悉摧滅——まさか斬滅の祝詞を精神安定として使うなど、天狗道の住民でもなければ思いつくまい。

しかし逆に、天狗道に則した排他的な戦闘準備としては相応しい。

「それで、状況は?」

『ええ、実は近くにいた委員会の媛巫女が応戦してましてね、あくまで事情の通達ということでお電話を——少々お待ちを』

龍との戦闘に駆り出される媛巫女というと、噂に聞く剣の媛巫女だろうか。
三貴神の内の暴風神から力を借り受け、神刀を授かつた『神懸かり』の使い手。

いつか神代三劍的な意味で会つてみたいと思つていた少女を思い浮かべ、急報が来たらしい冬馬の応答を待つ——途中で、体に力が漲つて来たのを感じた。

『申し訳ございません王よ、事情が変わりました』

石上鉄也を王に頂くその事態。

何が起こつたのかは本人も自覚していた。

「ええ、こちらも感じました。すぐに車を回して下さい

『仰せのままに』

電話口の向こうで頭を下げる甘粕冬馬。

そして鉄也は、室内で窓いでいた己の式に待機を命じた。

「コロ、行つてくるから待つてくれよ」

「ワオオーン！」

居残りとなつた子犬は、主を鼓舞するように遠吠えをひとつ。

今は式神ペットとなつてゐる神獣との戦いから一週間。

斯くして平穏な日常は終わりを告げ、神殺しの戦場にちじょうへ移り変わる。

彼は本来、この国で顕現するべき神ではない。

おおらかで混沌とした宗教観が蔓延るため信仰が薄く、その神話体系が形を成すには下地が不十分。

しかし、彼の持つ伝承がその常道を覆した。

曰く、東の果てに宮殿を持つ神。

これは神話が榮華を誇った土地から見ての方位だったが、この国は極東と呼ばれる島

国だ。

曰く、空からすべてを見渡す太陽。

お天道様が見て居る、というこの国のことわざが示す通り、彼に距離も国家も関係がない。

曰く、大蛇を射殺した狩人。

彼はとある神と習合したことで、この性質を手に入れた。そしてこの国にはいま、龍^{（へび）}がいる。

「君ら、ちよつといいかい？」

神の造形に狩人の端正を併せ持つ美丈夫が、龍と巫女の立ち合いに割って入った。

『グルウウウ？』

「——まつろわぬ神ツ?!」

太陽の温かみを匂わせる金髪の男神を前に、神獣を相手取っていた媛巫女——清秋院惠那は、困惑以前に敗北を悟った。

（ダメだ、勝てない。逃げる事すら許してもらえそうにないかな……）

見るからに西洋風な神がどうして顕現したのか。

それを疑問に思わないでもなかつたが、それよりもこの先の算段を立て始める。

彼女とて媛巫女、護國のために半生を費やしてきた呪術者だ。

草民を護るためにならば死を厭いはしない。

そのあたりは、半端な術者たちよりも氣構えが出来ており、また思い切つた性格の恵

那らしい判断である。

本物の神に会つたのが初めてという訳でもなし、身は竦むが動けないほどではない。身の中に僅かばかり残留しているスサノオの神氣も、まつろわぬ神の發する威圧から守ってくれている。

十全とは言えないまでも体が動く事を確認した恵那は、なんとか被害を抑えられる方向に舵を取ろうと画策する。

幸いにしてここは奥多摩、我が国の羅刹王が住まう地域からほど近い。

会話なりなんなりで時間を稼げれば救援が望めるという希望もあつた。

「お初にお目にかかります、西洋の神よ。どうか矢を番えられる前に、我が進言をお許しありますでしょうか」

「君は……この国の巫女のようだね。なかなか面白い特技を持っているみたいだし、無碍にしたら僕も危ういかもしれないな。いいよ、話してみなさい」

「それでは失礼仕ります。わたくしは古くよりこの国の守護を担つて來た四家の一角、清秋院家の末にござります。護国の巫女として、御身がご来訪なさつた訳をお聞かせ願いたいのです」

惚けた口調で促す神に、極力敬意を払つて対処する。

その態度に何の関心も抱かず神は答えた。

「それは簡単、あの龍^{（らび）}を退治するためさ。こんな風に——ねつ！」

言うが早いが、無駄の無い動作で一矢を放つた。

その鎌^{（やじり）}には太陽の輝きが宿り、状況の変遷に苛立つていた龍を射貫く。だけに留まらず、神の一撃は爆撃のように地表を抉つた。

「お止め下さい神よつ！　このままでは、近辺に住まう民が死に絶えてしまいります！」

「うるさいなあ。多少特別なのは認めるけどね、それでも——」

空色の瞳を恵那に向け、微笑みのままで矢を番える。

「人間が僕に指図するなんて許さないよ」

矢羽根から指が離れたのを見て、清秋院恵那は死を悟つた。

「石上神道流、丙の第三——」

人知を超えた速度で己の脇を駆け抜けた、羅刹の落し子を認めるまでは。

「——首飛ばしの颶風^{（かぜ）}」

斬滅の刃風が狩人の矢を斬り払つた。

まつろわぬ神の顕現を感じした鉄也は、毎度お世話になつてゐる専用の警察車両に乗つて移動していた。

車両はサイレンを鳴らして車道を全力で爆走していく。

運転手の女性も委員会の息が掛かつてゐるだけあつて呪術師なのだろう、車を追い越す時やカーブを曲がる度に呪力を発しているのが分かる。

乗り込んでから一度も減速していないのは、この運転手の呪術手腕ゆえだ。

法外で常識外な速度の割に乗り心地はそう悪くないので、彼女の片桐という名前は覚えておこうと思う。

ところで、横を覗き見るかぎり時速180kmのメーターをどうに振り切つてゐるのだが、改造でもしてゐるのか術で強化でもしてゐるのか。

「おおつ！」

聞いてみたいと思つていたところで、地震のような揺れが伝わってきた。

いや、力の波動からして神の攻撃の余波か。

鉄也は運転手にここまででいいと告げて下ろしてもらう。

「大丈夫ですよ、ここまで来れば俺一人の方が速いですから」
三峯神社での戦いで自覚したラーフの機能。

そう、神速の機能を使う時が来たのだ。

ラーフ＝ケートウは太陽と月を呑み、日蝕・月蝕を引き起こす神。

空に浮かぶべき二つの天体が消え去れば、それが太陽暦にせよ太陰暦にせよ、暦じかんが流れなくなってしまう。

何ともこじ付けがましい理屈だが、それが通つてしまつたのだから仕方がない。

そして、この機能を何より喜んだのは他でもない鉄也本人だ。

機能の利便性云々ではなく、ただその能力が使える事が何よりも嬉しくて。

「日は古より変わらず星と競い、定められた道を雷鳴のごとく疾走する。そして速く、何より速く、永劫の円環を駆け抜けよう」

詠唱と共に『跳躍』の術で地を蹴ると、景色の流れがどんどん加速していく。
速く、速く——何より速く。

雷光の進む速さで駆け抜ける鉄也には、世界のすべてが止まつて見える。

「光となつて破壊しろ、その一撃で燃やし尽くせ。そは誰も知らず、届かぬ、至高の創造。

我が渴望こそが原初の莊嚴——

この一瞬を永遠に味わいたい、そう願った事は数多い。
それを叶える無限加速こそこの異能。

歌劇の主演が叫んだその創造の名は……
「Eine Faust Ouverteure!」

秒を幾百幾千、万に億にと斬り刻み刹那を引き伸ばす異界法則。
まつろわぬ神に呼応している今の彼は最高潮まで高まっている。

故に加速倍率は四桁の大台に乗つており、常人の目には影すら捉えられないだろう。

爽快だ、痛快だ

この術理でもつて時を加速することが出来るなんて！

刹那の瞬きで数キロメートルを駆け抜ける。

直感に従つて進んでいくと、山中にいくつかの姿を捉えた。

まず横たわった目体

次に金髪の美男子。

見るからに神々しい洋風の男、感じる感覺からしても神に間違いない。

次に黒髪の少女。

恐らく清秋院恵那だろう彼女は、手の神刀を掲げもせず棒立ちになつてゐる。

(——ちつ、流石に神の射撃には反応出来なかつたか)

或いは万全の状態ならば回避か防御も出来ただろうが、龍との戦闘後の消耗した状態でまつろわぬ神の相手は、いくら彼女とて荷が重かつたのだろう。

序曲の加速率が落ちてきたのを感じ、鉄也はならばと走力を上げる。

無価値や主演ではなく、益荒男あたりなら抱き上げて助けたりするのだろうが、流石にそんな余裕はない。

少女を庇つて傷を負うリスクを背負うなど、美談的だが戦士としては許容できない。故に選択は迫る矢の方に対処することだ。

媛巫女の横から飛び出し、限界を迎えた神速の代わりに冥府の死に風を召喚する。

「「石上神道流、丙の第三——首飛ばしのかぜ」

普段のように薄く鋭く研ぎ澄ますのではなく、敢えて斬氣を拡散して広範囲に影響を及ぼすようにして放つた。

常人ならざる鉄也の眼には見えていたのだ。

一矢の影に揺らめく、今まさに広がろうとしている神力のうねりが。

その証拠に、閃断の颶風が斬り払つた矢は総数五本。

飛び道具の分裂などタチが悪い、どこの手裏剣影分身だという話だ。

「あつ、王様……？」

「清秋院恵那だな？ 返事はいい、下がつてろ。動けるなら山を降りて養生しておけ」

背に庇つた少女がコクンと頷く気配を感じた。

そんな化物じみている自分の感覚に苦笑を覚えながらも、顔に現れるのは獰猛な笑み。

背を見つめて何を納得したのか、少女は一礼して走り去つた。

あの様子だと間を置かずとも戦闘域から離脱するだろう。

鉄也は庇護者がいなくなつたことを確認し、真に眼前の神へと目を向けた。

「アンタ、見るからに西洋の神だな。なぜこの国に顕現したんだ？」

「ん？ それは僕が東の果てに宮殿を構える神だからさ。この極東の国も、一応は僕の活動圏内に入るのだよ」

にこやかに答える男神は、朗らかな雰囲気を崩さない。

だが、それは戦意がない事を意味しない。

先ほどの恵那に向けた一矢だつて、この優しげな笑みのまま放つたものだ。

これは狩人の微笑み。

殺意を内に溜め込み、獲物を仕留める一瞬に全力を注ぐ獵師の貫禄だ。

「名前を教えてくれ、つて言つたら答えてくれるかい？」

「んー、別に答えた所で不利益を被るとも思えないけど……なんか気分じやないから教えない」

言つて爽やかに笑う神。

流れるような動作で、ついでのよう矢を穿つ。

鉄也もまた焼き回しのように斬り払う。

「うーん、その権能……僕らの冥府に似てるねえ」

「——アンタ、ギリシア神話の神か」

海外の有名どころと言えばギリシア神話やローマ神話、ケルト神話や北欧神話といった神話体系が根強いイメージがある。

洋風だつた所からギリシア神話かローマ神話の類だつとアタリをつけていたが、どうやらその通りだつたらしい。

「ああ、そうだよ。じゃあやつぱり、君のそれは同郷の神から篡奪したんだねえ」

これはちよつと、殺^やる気が出てきたかな。

そう呟いたギリシアの神は、更なる矢を番える。

「太陽の導きのもと、我が標的を射殺したまえ」

物騒な聖句とともに神の弓矢が襲い来る。

放たれた矢は一矢だが、迫り来る射撃は十数発。

それぞれが太陽の輝きを宿し、神速に近しい速度を打ち出している。鉄也もそれに対抗すべく再び神速に入る。

「時よ止まれ——おまえは美しい！」

美麗な刹那を止めたい。

聖句の通りに周囲は静止し、これで難なく回避できるとそう思った。

だが、現実はそう簡単にはいかない。

黄金に輝く十数の鏃が、割断された時の中を変わらぬ速度で進んで来る。

(ギヤー！ 矢も神速に入りやがつたーあ！)

心中では絶叫しながらも表情は冷徹なまま、両手に握った布都御魂を振り回す。

驚異の動体視力で軌道を見極め、一つ一つを的確に対処していく。

最初に到達する三発は斬り上げで処理し、間髪入れずに斬り返して二発を叩き落とす。

振り切る前に左手を外し、体を捻つて手刀で一気に五発を折り捌けば、勢いのままの回転斬りで残りも一掃した。

手刀の際に呪力を割り振つて強化した事により体感時間も戻つたが、権能に力を注ぎ再び神速化して近付く。

アサシン。

彼の領域にはまだ及ばないが、鉄也が思い描くのは美麗なる剣士。

首飛ばしの颶風と布都御魂による同時二撃と、冥府の風刃の一撃による同時三連斬。

「偽剣・燕返し——ツ！」

秘剣にも魔剣にも至らぬ偽りの剣技が、弓の神に斬りかかる。

鉄也が放つた燕返^{ネタわざ}しは、思いのほか度肝を抜いたらしい。

狩獵の神は胸元と脇腹を薄く裂かれ後退した。

「——驚いたあ。あんな事が出来るんだね、随分と芸達者だよ君は」

「……軽く避けておいてよく言うぜ」

首を飛ばし胴を裂き両肩を切断するはずの銀閃は、しかし切つ先が血に濡れる程度に留まっている。

「しつかし参つたなあ。陽光の矢にも対処するなんて、どうしたものかなあ」「……アンタ、やつぱり太陽神なんだな」

ギリシア神話の男神、太陽の輝き、弓と狩獵の神。

あまり明るくないギリシア神話の知識を動員したところ、浮かぶ名前はひとつしかなかつた。

「アポロン、なのか？」

おつかなびつくりで問う鉄也だが、対する太陽の神は朗らかに否定する。

「まあ間違いではないんだけどね。彼は僕の——いや、この場合は僕が彼の、になるのかな？」とにかく、彼は僕と同一視された神でね、この僕は『彼と僕が習合した太陽神』の一側面なんだよ」

例えば、『神A』と『神B』の習合した『神AB』がいふとする。

その総てを受け継いで顕現した神はABのままだが、祖となつた神の片方のみを継いだ神が顕現すれば、Aの性質を持つBとして顕現する事になる。

それがこの黄金の髪の男——ギリシア語の太陽を語源とした純然たる太陽神でありますから、狩獵の神アポロンと習合した事により弓を持つて顕現した遠矢の神。

「僕はヘリオス、月の女神セレネーを姉妹を持つ神だよ」

どこか責めるような凄みを持つて放たれた言葉に慄く。おのの

セレネーという名をここで出したその意味。

鉄也は否応なしに理解し、戦慄と共に後ろへ下がつた。

(ダメだ、それを聞いたら——ツ)

らしくなく怯えをあらわにする鉄也へ、善意だとでも言うようにヘリオスは告げる。「死の風を受けて理解したよ。君が殺したのはヘカティー、セレネーと同一視される月の女神だ。うん、その様子だとアタリみたいだね」

手が震える。

呼気が乱れる。

セレネー、ヘカテー……

(■■■——ツ)

もういなくなつてしまつた少女の残影を思い出し、足が竦んでしまう。

——もうあんな思いはしたくない！

邪念などと斬つて捨てるには余りに悲しいその雑念が、神殺しの心境を揺るがした。

「だつたら尚更、君は僕が殺さないとね——ツ」

先程までと違ひ、弓に番える矢は三本。

人差し指から小指までの四指でそれを挟み、わざとタイミングをずらして手を離す。それぞれがまたしても陽光を宿し、更に以前とは比べ物にならないほどに数を増した。

「姉妹の仇討ちだ、神殺し」

言葉の矢を受け身体が重い。

だが、鉄也とて仮にも神殺しの戦士。

内から湧く生存本能に突き動かされ、武器として振るわれる布都御魂自身の支援もあつて、雨あられと襲い来る矢を打ち払う。

しかし、鉄也の心は冷め切っていく。

やめろ、どうして、いやだ、いやだ嫌だ嫌だ。

まつろわぬ神と神殺しの魔王は、基本的に前者が上回っている。

だからこそ絶対に勝つのだという不屈の闘志が劣勢を覆す要素となるのだが、今の彼にそれは望むべくもない。

故に、この結果は順当なものだ。

——空を穿つ一矢が心臓を貫き、四肢の末端にまで毒素が廻った。

ヘリオスが習合したアポロンは、弓矢で疫病をもたらしたとされる。その弓を持つて顕現した彼の矢は、射抜かれた者を死に追いやる病の呪毒を有している。
死ぬのか、と。

あまりにも当然のようにそう感じた。

殺し殺され、死に死なれ。

そういう世界だ、自分にもお鉢が回つて来ただけ。
目を閉じ、死後に思いを馳せる。

だが何故だろう。

なにか、大切なことを忘れているような気がする。
とても大切な——

愛しているわテツヤ。

……至高の刹那を。

「がつ、ああああああああああああああああああ——ツ!!」

そして少年は思い出す。

何を信じ、何を願い、何を求めて、何に至つたか。

「——ああ、そうだった」

どうして忘れていたのだろう。

「俺は刃だ、神殺しの刃。俺が自分でそう在ると決めたのだから是非もない」

そう、あの時にそう決めたのだ。

時よ止まれ、君は誰よりも美しいから。

だから美しいまままでいてほしい。俺の知る美しい君のまま、

俺を殺そุดなんてしないでくれ。

「ふつ……」

鼻で笑い飛ばしたくなつてくる。

所詮は俺も自己愛に囚われた天狗なのだから、ウジウジと悩む必要なんてなかつたと

いうのに。

俺はただ、生きていたかつただけなんだ。

だから殺した。愛していると囁きながら、だからお前を壊すのだと。

彼女とてそれを見抜いていただろう。

仮にも女神だ、人間を読み解く程度の天眼は持ち合わせているだろうから。
——なんて無様。

「見縊るなよ、俺の感情は俺が決める……」

狂天狗だと嗤うなら嗤え。

だつたらそれらしく振舞つてやろうじゃないか。

俺は俺を愛している。俺が至高なのだから、愛していると感じた俺自身を信じよう。
故に――

「俺は彼女を愛している」

他人の言葉を借りなければ口にも出せない弱い俺だけど、いつかは必ず自分の言葉を
吐いてみせるから。

だから生きる。生きていくんだ。

いつかまた出逢えたら、今度もあなたが殺してね。

そう、だから神殺こされしこそが――

「俺の女神に捧ぐ愛だ！」

故に石上鉄也は、神殺しの刃は碎けない。

靈刀を構え己の存在意義を高らかに謳い上げる。

——掛け巻くも畏き、神殿に坐す神魂に願い給う。

「曰く、この一児ひとつきをもつて我が麗しき妹なにものみことに替えつるかな。すなわち、頭辺に腹這まくらへはらばい、脚辺に腹這はらばいて泣きいさち悲しげたまう。その涙落ちて神となる。これすなわち、畠丘はらねの樹下このもとにます神なり」

それはつまり、神を殺す為の刃で在りたいという祈り。

壬生宗次郎の色を帶びてはいるが、紛れもなく鉄也自身の渴望による誓い。
 「ついに佩はかせる十握劍つかのつるぎを抜き放ち、軒遇突智かぐつちを斬りて三段みきだに成すや、これ各々神おののおのと成る。剣の刃より滴る血、これ天安河あめのやすのかはら辺にある五百個磐いほづいはむら石、我が祖なり」

女神の血によつて新生した自分は、神殺しこそが存在理由だと主張する。

この祝詞は求道を謳うものでありながら同時に女神への祈禱おとめらがそでふるやまのみずがきのもあるのだ。
 「謳うたえ、詠うたえ、斬神の神樂。他に願うものなど何もない。未通女等之袖振山乃水垣みずがきの之、
 久時從憶寸吾者ひさしきときゆおもいきわれは」

女神を殺して得た余生。

ならばいま生きる我が生は、弑逆と篡奪の道であると。

「八重垣・佐士神・蛇之鹿正——神代三剣、もつて統べる石上^{いそがみ}の颶風^{かぜ}。

ならばそう、敵は皆悉く摧き滅しよう。

遍く神の首を斬り飛ばしてみせん。

「——太・極——」

これぞ我が愛。 我が求道。

恥じる事なき魂の宣誓なり。

「神咒神威——経津主・布都御魂劍ツ!!」

亡き女神へ捧ぐ神殺しの神楽。

「断頭颶風」の神殺し、 石上鉄也の繚乱舞闘^{武刀}

——今こそ開幕。

諸余怨敵皆悉摧滅^{しょよおんてきかいしつざいめつ}

笑う嗤う嘲笑う狂笑う哄笑う。

神殺しは独り天狗笑を上げ、この戦場に生まれ直した。

「かははははつ、クツハハハハツハハハハツハハハハハハハハハハ——ツ!!」
いくらた神咒いきよ神威くわいなどと息巻いたところで、ここは神座絵巻の中ではない。

そもそも抱いた渴望が神域の念だなんて本人ですら思っていないのだから、宇宙を己へ染

しかし、祝詞には呪が宿る。

言葉には靈が乗る。

——掛け巻くも畏き、
神殿に坐す神魂に願い給う。

『不死の領域』へと還った女神への祈り。

それを己の上位に坐す義母へと捧げ希う。

どうかこの渴望を寿いでくれと。

それが叶えられたのか、それとも自我の高まりに呼応しただけなのかは分からぬ。ただ事実を述べるなら、石上鉄也の存在強度が跳ね上がったという結果のみ。

蜃の胸を捌いても劍の臓腑を潰しても死にはしない。

皇獣の心臓を刺したところで、針でつついた程度の傷でしかない。

針の一本でも人は殺せるが、それでは山は崩せない。

人間一人を殺せる程度で、石上鉄也
斬神刀は壊れない。

「ああ、なんて清々しい気分なんだ——」

思えば、最近は馬鹿なことばかりを考えていたものだ。

——本当にこの世界は現実なのか？

知るか失せろよどうでもいいんだ。

ここが現実でも幻想でも、永遠でも刹那でも、俺は神殺しであればそれでいい。

——蠅声が神以外に対しての欠陥品？

だからどうした本望だろう。

神殺しの刃たるこの身は、ただ神のみを斬る刃であればいいのだから。

斬滅の剣鬼、上等だ。

もうあんな思いはしたくない、なんてバカバカしい。

あんな思いを他の誰にもさせたくないから、俺がこの手で殺すんだろうツ！

疫病の遠矢を克服し、胸の矢を引き抜く。

シャツとスーツに血が滲むが、活力を与える靈刀の力を借りて『治療』を施す。

「——またまた驚いた。芸達者な上に生き汚いんだなあ、君は」

「お生憎、俺は生き足搔くと彼女に誓つたものでな……」

それは忘れていた訳じやない。

しかしどうしたことか、曇つていた。

かつて人であり、今も人を脱していない俺に、絆を永遠になど出来はしない。

だから刹那よ、黄昏よ。

朽ちる事なきあなた達のその愛を、俺にもどうか習わせてほしい。

口ずさむのは忌まわしき血のリフレイン。

「血、血、血、血が欲しい。ギロチンに注ごう、飲み物を——」

武神の靈剣を冥神の処刑刀へと変生させる。

斬る、ただ斬る。

この身は神殺しの刃たる故に、そこに怨嗟も逡巡もない。

「ギロチンの渴きを癒すために、欲しいのは血、血、血」

神聖な光沢を放っていた布都御魂が黒く透き通る光を纏い、冥府の加護を得てギロチンへ変わる。

同時に、今度は神速も合わせて発動した。

美麗刹那・序曲——E i n e F a u s t O u v e r t • r e。

先ほどまでなら両立は出来なかつたそれ、権能の同時発動。

今の鉄也は苦もなく実現してみせ、遂に超越者ツアラトウスの戦闘を再現できる域に達していた。

「——斬アツ！」

即座に戦闘を終わらせようと近寄る鉄也。

だがそれを妨げたのは、金色の毛並みを持つ四頭の馬だつた。

ヘリオスは馬車に乗つて空を移動する太陽神、彼を乗せる馬車の引き手なのだろう。
嘶きいななと共に主を取り囮み、その本来の役目たる馬車を召喚していただのだ。

踏み込みは神速の速さだが、相手もまたそれに追従するもの。

斬首の一刀はひらりと躲され、馬車は光の尾を引いて空へ逃れる。

斬の神威に至らぬ鉄也は、概念の斬滅にまで至つていないため回避されてしまう。

「やあやあ、神殺しは油断も隙もないなあ。いや、君に限つてはさつきまで隙があつたん
だけど、どうやら克服しちゃつたらしいねえ」

揚々と語るのは、馬車に乗つた事で神速に適応化したヘリオス。

空を東から西へと翔けるこの状態こそ、彼という神の本来あるべき姿。
つまり、まつろわぬヘリオスの本領である。

空へと上がつた馬車は上空にて旋回し、鉄也目掛けて一気に降下しだした。

「いざ往こう、僕らの突撃で仕留めてあげるよ！」

黄金に輝くその様は流星の如く。

鉄也に言わせれば、こう表現するだろう。

「騎英の手綱かよつ」

エクスカリバ

驚嘆する鉄也は星の聖剣など持つてはいない。
だが、そこに不安はなかつた。

——斬ればいいだけだ。

純粹に、当然のようにそう思つた。

だから当たり前の流れとして納刀し、腰を落として抜刀の構えに入る。
駿馬たちの嘶き、車輪の回る音、空気との摩擦音。

すべてが重なつて流星の轟音となつてゐるそれが近付いて来る。

着激の一瞬に、文字通りの神速抜刀が閃く。

鯉口を鳴らし、刀身を抜き放つ。

鞆走りと共に引いていた左足を踏み込み、更なる加速を。

緋色の流浪人が誇つた最速の抜刀術——天翔龍閃あまかけりゆうのひらめきの再現。

「刃オレを思い出させてくれた礼だ、首はいらん——権能だけ置いてけツ!!」

ここで話は逸れるが、神速の元となつたラーフは太陽と月を憎む神だ。

彼の権能の影響下にある神速状態ならば、僅かばかりだがその属性を持つ相手への特性を得る。

疫病の遠矢のように神そのものによる攻撃には効果がなくとも、その眷属である馬ならば力を食い散らして障害にもならない。

鉄也の自己暗示に巻き込まれた布都御魂さじのかみも、主に呼応して靈格を引き上げている。馬車の骨組みなど滑るように斬り流し、遂には内部のまつろわぬ神へと。

昇り龍の斬閃が、太陽の流星を斬り穿つた。

勝利を祝う誰かの拍手！

その音が聞こえてきたのは、権能獲得の重みを感じて座り込んだあと。

疲労困憊の身でありながら戦意が膨れ上がる異常事態に、鉄也は呆れと疲れと困惑を覚えた。

まつろわぬ神との連戦など勘弁してくれ、と。

立ち上がりやすいように膝を立ててから背後を振り返る。

「——え？」

その姿に目を奪われた。

あまりに見覚えがあつて、しかしそれは絶対にありえない姿で。

「いやあ、あんた強いんだね。流星を斬ったのを見た時はびっくりしたよ」

大和人特有の黒髪黒目。

異様に長い髪は後ろで編んで、毛先には手鞠らしき球体が結わえ付けられている。

握りこぶしを阻害しないように出来てている紅色の手甲は、彼女が拳闘家である証左。

「初めまして、自己紹介は必要かな？」

——玖錠紫織が、そこにいた。

断章 黒の騎士団

イタリアはサルデニヤ島にて。

地域的に見れば珍しい、東洋人の少年。

日本からやつて来た彼は、連れの少女の言葉に首を傾げる。

「せいそう……じゅうさんきしだん?」

随分と大仰な響きに困惑を覚える彼に対し、ブロンドの髪を棚引かせる美しい少女が頷く。

「ええ、某帝国の秘密組織を元にした創作物に登場する集団。それが聖槍十三騎士団黒円卓というらしいわね」

創作物の内容までは熟知していないのだけど。

そう続ける少女の顔に、遊びはない。

「それを流用した呼び名が日本では畏敬の念を込めて呼ばれているわ」語る少女の瞳に貫かれ、しかし少年は戸惑いを隠せない。

「十三騎士団つて、このご時世に、しかも日本にそんな数の騎士団なんて……」

言葉尻が小さくなつていくのは、この地で経験した超常現象ゆえだらうか。

事情の説明を求める意思を読み取り、赤の少女が説明を進める。

「十三騎士団というのは、騎士団が十三あるのではなく、十三人で騎士団を構成しているということよ」

それを聞き、少年は疑念を深くする。

「だつたら尚更おかしいだろ、たかが十三人で——」

「たかが、ではないから畏れられているのよ」

少女の瞳は真摯で、澁みない。

常はからかい好きな彼女のそんな姿に、少年もすかさず姿勢を正した。

「私も詳細までは知らないけれど、創作の騎士団の首領と現実の騎士団の首領には、ひとつ絶対的な共通点があるのよ」

「共通点……」

それを口に出すことそのものが恐れ多いかのように、少女は告げた。

「——神殺し」

「——つ!!」

神殺し。

現実で聞くにはあまりに陳腐なその言葉。

だが少女には、そして少年には重く重い意味を持つ単語。

「日本国に君臨せし王者が率いし、殺神のための勇士たち」
陰ながら囁かれるその名は――

メダリオンを持つて帰国した護堂の前に、背広を着た男が音もなく現れる。

「正史編纂委員会、甘粕冬馬と申します――草薙王よ」

その第一声から隠された怒気を汲み取り、頬を引き吊らせる羽目になつた。

「本来は室長の補佐的な仕事をしているんですが、現在はある部署の特命係に出向中でしてね」

イタリアから持ち帰った代物を鑑定すると言い出した冬馬は、説明がてら自己紹介を進めていた。

「退魔部神靈対策課、現世に出現した神に対して強制処理を執行する……要するに、神様退治の部門ですよ」

その中の言葉に、護堂はギクリと身を固める。

「一部の者たちは俗に、極東十三騎士団黒円卓……などと呼ぶこともありますねえ」

まさに危惧していた名称が飛び出し、彼は波乱の予感を抱いた。

まつろわぬアテナと対峙し、死の先制を受けた護堂。口から吹き込まれた冥府の吐息に視界が霞む。

しかし倒れる寸前で足の踏ん張りが効いた。

どころか、気付けば何事もなかつたかのように体調が快復している。その疑問を解消する答えが、いま背後に到達する。

「冥府の権能には覚えがあつてね、しかもギリシア神群のそれならお手の物だ」軽快に響く声には、それ自体が質量を伴つていてるかのような重圧感がある。このような埒外の存在が発する威圧に護堂は覚えがあつた。

ならばそう、背後に立つ男の正体はひとつしかない。
「……初めまして後輩君、少しばかり手を出させてもらうよ」
ゆっくりと振り返る。

歳は成人して間もないよう見えるが、纏う貫禄が並ではない。

護堂とて年の割には風格が垣間見える傑物だが、これはそんな程度の生易しさからは遠い。

「俺は石上鉄也という、仲良くしてくれよ?」

凄みを見せて威圧している部分もあるのだろう。

だがそれでも、ただ思つたのだ。

(綺麗だ)

とても綺麗な、芸術のような刃の波紋を見ているような。

それが本質を突いた並々ならぬ感性と直感の成せる技だというのを、彼は自覚してい

ない。

だが、その姿に強く憧れた。

そのことだけは、よく理解していたのだつた。

そして彼は遂に――

「エリカ、俺はあの人に近付きたい。あの高みへ俺も行きたい」

だから、そう言つて左手に愛しい重みを抱き抱えた。

「頼む。俺の女だというのなら、俺に知識ちからを貸してくれツ」

赤の少女は……忠義あいを捧げし女は彼にその身を委ねた。

「ええ護堂、わたしの護堂——わたしが導いてあげるわよ、あなたは天に君臨する王なのだから」

斯くして魔王の片割れは、象徴たる黄金を抜き放つ。

「歓迎するよ後輩君、特命係にようことそ

朗らかに笑い、次に高みから睥睨した。

「ああ、本当に歓迎するぞ——我が盟友」

玉座に君臨する彼は、躊躇いなく右手の席を指さした。

「同格おまえが座るべきはこれ、Xドライチエーン IIIスリしかないだろう」

未だ半数近くが空席の黒円卓を見渡し、それも満足げに笑う。

「最も難関たる双首領の席が埋まつたとなれば、後はいずれ揃う。その時を待つのもまた楽しみだ」

颶風の王は笑いに笑う。

黄金を象徴とする魔王が己と並び立ち、そして副首領の座に着く事実を寿いで。

「さあ、今宵の歓迎会を始めようか」

「あがー」

まつろわぬヘリオスとの戦いから三日。

体力気力共にすっかり快復した鉄也は、だからこそやり場のない戦意を持て余していた。

食卓に突つ伏していると、見かねた母がポンと頭を叩く。

「はいはい、茹だつてないで山に行つて暴れるなり神獣狩つて暴れるなりしてきなさい」「暴れてばつかじやねーかよー」

「アンタ、暴れる以外に能ないでしょ？」

「……否定できない」

そもそも、今の職場とて神殺しだから実現したもの。

生まれ育ちの関係で神仏の知識はそこそこだが、その道のベテランに比べると吹けば飛ぶ塵のようなものでしかない。

現にギリシア神話に属するヘリオスの事も知らなかつたし、件のヘカテーとて図書館

で調べて正体が分かつたのだ。

例えばラーフの一件でその見識を見せつけた甘粕冬馬などと比べれば、無言で頭を下げるしかない有様である。

「つたく、なら修業でもしてくれば？ まつろわぬヘリオスから篡奪した新しい権能も分かつてないんでしよう？」

「カンピオーネに修業なんて意味ねーの。魔獣みたいな生態だから実戦じやないと成長しない……って、たしか義母ママが言つてた気がする」

その言葉を聞いて、母は思わず後ずさる。

突然の行動を不信に思つた鉄也は疑念の眼差しを向けた。

「——あんだよ？」

「アンタ、その年でママつて……」

話の流れで神殺しの統括たるパンドラを指すのだという事は理解した。
が、他所の女を云々というのですらなく、純粹に息子のママ呼びを気味悪がつただけである。

「……本人がそう呼べって言つてた……ような気がするんだから仕方ないだろ？ それ
に、このママはママはは継母ママのママだ。甘えるような意味は断じて込めていない」
「まあ、そう言うんならいいんだけどね。うん」

「信じてねーだろおい」

「……そんなことないわよ〜」

多少の間こそあつたものの、普段通りの表情と声音で答える母。流石に年の功というべき——でもないなうん。

途中で細められた目に怯え、鉄也は即座に思考を逸らす。
「さあて、久々にパラロ^せスでも読むかなあ……」

そっぽを向いて口笛でも吹き出しそうな大根の息子に、母はもう一発平手打ちを見舞つてやる。

「あいたつ！」

「ところで、新しい神様の方はどうなつてんの？」

決闘を申し込まれたんでしょう、と尋ねられた鉄也は、苦々しい顔つきに変わる。

「うん、まあちよつと……」

言い淀み胸中で思い出す。

一度と現れぬ絶世の敵手であり、斬滅を誓つた天敵たる彼女との一幕を。

その顔にはニヤけた笑みを浮かべ、鉄也の反応を面白そうに見つめる女性。

髪に結わえられた球体には摩利支天マリしてんだから鞠マリ、という製作者の遊び心が見て取れる。

「玖錠、紫織……なんで――ツ！」

顔を引き吊らせながら呼んだ名前に、しかし彼女は予想と違った反応をみせる。

「玖錠……紫織――そつか、それが私の名前マネイってことね」

紫織、紫織、と口ずさむ女性の姿に、鉄也も訝いぶかしげな表情を浮かべた。

「アンタいつたい……彼女じやない、のか……？」

「ん？ あはははっ」

対する女性も不思議そうな顔をしたのち、軽快な笑い声を上げた。

「この様子だと、やつぱりいるかな自己紹介？」

「――ああ、そうしてくれるとありがたい」

些シテか以上に放心気味な鉄也は、しかしこの発言で自分を取り戻した。

「私は蜃 shin、蜃氣楼の神なんだ。だからこの姿もあんたが蜃氣樓 shinaiに対して抱いてる印象を具現化したもの。あんたが相手だからこの姿なんであつて、他の相手なら多分、龍とか蛤マグリとかになるんじやないかな？」

蜃 shinとは、中国及び日本で語り継がれる靈獸。

蜃氣樓 shinaiとは「蜃」が「氣」を吐いて『樓』閣ろう閣を出現させるという、説から生まれた言葉。

その姿は大ハマグリとも、龍の一種であるとも言われて謎めいている。

「——なるほど、なるほど。本人じやなくて、俺の記憶の再現つて訳ね、なるほど」

ああ、ならば良かつた。

もし彼女本人がご降臨召されたのであれば、俺は平身低頭して命乞いをしなければいけなくなつていた所だ。

なに、情けないだと？

そんな訳があるか！ 相手を誰だと思っている……玖錠紫織だぞ！

神号・摩利支天、玖錠降神流、玖錠紫織。

己の可能性を求めた果てに神へ至つた求道神、有形無限の蜃氣樓。

その拳は宇宙を碎き、その足は世界を揺るがす。

よしんば神域に至つていないとしても、人の彼女は岩を粉碎する生身の重機か爆撃機。

実際問題として勝てる見込みがないし、一信者として戦いたくないし、彼女の伴侶に肖つている身としては助命嘆願するしかない。

例えその行動によつて見限られたとしても、石上鉄也はそうせずにはいられない。

なので本当に、本当に……本人でなくて良かつた本当に。

そう安堵に胸を撫で下ろすと同時に、神にすら己の趣味を論われる羽目になるとは思わ

あげつら

なんだと、少しばかり泣きたくもなつた。

その様をおかしく思つたのか、からかう様な忍び笑いを漏らす。

「ひひひ、変なやつだねあんた。さつきのまでとは大違ひだよ」

「俺からしたらお前のほうが変な存在なんだけどなあ……」

文字通りに想像の中から飛び出た存在。

空想の具現であり、空洞の権現。ごんげん

鍍金ですらない彼女は、中に何も詰まつていない霞の集合体。かすみ

殴つたら拡散したりしないだろうかと、少しばかり的外れな懸念すら浮かんでくる。

「大丈夫、あんたの前じやこれで固定されてるから、殴られたらちゃんと吹つ飛ぶよ」

「……親切にどうも」

心の内を読んでいたかのような発言にギクリとする。

自分の空想から生まれただけに、そういう古明地姉サトウトリ的な能力があつても不思議ではないと思つたのだ。

だがしかし、彼女は尙も否定してくる。

「ああ、心配は要らないよ。蜃氣樓わわたしがそういう状態で固定されたら心象を覗き見るくらいは出来るんだろうけどさ、玖錠紫織いまとわわたしにそんな力はないって」

あまりに心中を言い当てた対応に疑わしくすらあるが、真偽がどうあれ警戒などする

だけ無駄だ。

読心が出来るならそもそもその意味がないし、出来ないならばそれもまた杞憂に終わる。

開き直った方が得策と思考をまとめ、鉄也は立ち上がりて向き直る。

「石上鉄也、神殺しをやつている」

憧れの姿をしているからだろうか。

なんとなく、彼女に名乗りたくなった。

それを受けた蜃しおりはニヤアと、どこか猛獸めいた笑みを浮かべる。

「まつろわぬ蜃氣樓、知つての通りすつごく強い神様だよ」

〔己〕こそ神であり至高の唯我。

そんな天狗道に即した自愛発言だが、事実そのままなのでまつたく笑えない。

その容貌には否が応にも苦手意識を持たざるを得ず、そこに加えて本人曰くの性質を鑑みた結果、まさしく摩利支天そのままの可能性拡大をも実現しそうな予感がある。

色々な意味でかつてない、そして二度と現れ得ないであろう強敵。

嫌だ嫌だと憂鬱になる思考と裏腹、心と体は澄み渡つて燃え滾る。

意味のない代償行為というのを理解していくも、逸はやる心が止められない。

——この蜃氣樓を斬り捌ければ、剣神に誇れる刃になれる。

鉄也の心境を要約するなら、そんなところだ。

まつろわぬ神との二連戦という窮地で、どこまでも愚かしい求道の性^{さが}。

そんな神殺しを前に、しかし仇敵たる神は両手を上げる。

戦意がないのだと誇示するように。

「生きがいいのは結構だけど、自分の身体を見てから言いなよ。塞いだとはいえ胸を射抜かれてるんだからさ、そんな状態で私に敵う訳がないでしょ？」

どこまでも傲岸不遜な神の宣告。

それが絶対の事実だと確信しているがゆえに、彼女はこの場では戦わない。

「だから今日は顔見せだけにしておくよ。そんな状態のあんたを殺したら、私が矮小に見られてしまうからね」

どこまでも天狗を地で行く彼女は、それこそ本質を表している。

神楽を舞っていない玖錠紫織は天狗道の住人なのだから、この姿こそが当然なのだ
と。

どこまでも己を持たない事が己の証。

故に自分は誰でもないが、同時に誰もが自分そのもの。

そんな幻影の体現たる彼女は笑いながら去つて行つた。

満身創痍の鉄也を抱き上げ、そばの神社に運ぶという律儀な真似をして。

「じゃあね鉄也、また逢おうよ。今度は私たちも、アレと同じような舞闘を演じよう」
そうすることで真に摩利支天になるのだと、最後にそれを言い残して。

紫織^{シジン}との邂逅から幾日。鉄也はだらけていても仕方がないと気合を入れ直し、別段得意という訳でもない書類仕事に向かつていつた。

……のだが、幸か不幸か除霊師の人手が不足しているらしく、布都御魂剣の靈力を頼つて応援要請がかかつた。形だけとは言え王たる鉄也を顎で使うあたり沙耶宮馨も流石だが、彼らの間では文句も齟齬もなく決着しているので問題ない。鉄也も事務よりは役に立てるだろうと、コロを伴つて現場に向かう。

「大人しくしておけよ？」

「バウツ」

了解！ とでも言つたのだろうか。本当に賢すぎて涙が出そうない子である。

……主に俺が負けてその的な意味で。

車を回してもらつて着いたのは、郊外の一角に建つ大きな倉庫。事情を知る人間に案内してもらい出入り口の扉を開けると、見るからに慌てふためいている男とそれをなだ

めている男の二人がいた。

「すいません、特命係からの応援ですけど」

気が引けながらも話しかけると、なだめていた方の男が素早く振り返つて近寄ってきた。

「やあこれはこれは石上さん、よく来てくださいました」

「……いや、なして甘粕さん？」

滅茶苦茶見知った顔だつた。というか、ある意味で最も親しいと言える同僚だつた。彼は沙耶宮馨の子飼いであり、昼行灯を気取つてはいるが相当な使い手なのは分かる。だからこそ鉄也は理解できない。なぜ彼がここにいるのか、そして彼がいて解決でききない問題とは何なのか。応援として来たからには、遠慮なく追求する事にした。

「そもそも、どうしてあなたがここに？　除霊関係だつて聞いてきたんですけど……」

「いやあ、身内の恥なので言い辛いことですが……まあ石上さんも身内というかある意味のトップなんで大丈夫でしょう」

正史編纂委員会は対外的に鉄也傘下の組織ということになつてている。名義だけ貸している状態だが、名目上はトップなのは間違いない。

なので自分が顔を出して怯えられたりしないだろうかと及び腰になりかけていたが、相手が甘粕冬馬とあれば何ら気を遣う必要もなしだ。鉄也が自分を納得させていると、

冬馬も同じ結論に達したのだろう。遠慮は無用とばかりに本題に入つた。

「実はこの倉庫の建つてゐる場所なんですが、戦時中は委員会の術師が所有していた倉庫が建つていてましてね。この術師は終戦を迎えるより早く亡くなつてしまい、戦後の混乱で管理が杜撰すさんになつていた事もあつて、大した処理もせずに土地が売却されてしまつたらしく……」

その後に土地を買つて新しく建てたのがこの会社という訳か。で、話の内容から察するに当時の処理から漏れたナニカが出現したと。

「はい、要はそういう事ですね。過去の事とは言え、正史編纂委員会の不始末が原因で起こつた事のため、馨さんに呼ばれて私が出てきたという訳で」

「でも、甘粕さんじや手に負えなかつたと」

「お恥ずかしながら、私は僧侶でも神官でもないのでよ」

「盜賊アサシンは淨化ラム呪文を覚えませんからね」

「職業とそのフリガナに思うところはありますがあ、まあそういう事で間違つてませんよ」

身のこなしや沙耶宮家令嬢の子飼いという立場から、忍者の何かだろうとは思つていたがやはりそうだつたか。隠密・工作・暗殺、全て忍の技術である。やはり何も間違つた事は言つていない。

「それに、その現れた悪霊がまた厄介でしてね。どこかにある寄り代を本体としている

らしく、祓つても祓つても戻つてくるわ、この社長の夢枕に立つたりまでするらしく恐々とされているんですよ」

慌てふためいている男は、どうやら社長だつたらしい。冷や汗とユルユルのスースを見る限り、元はもう少しふくよかだつたようだがすっかり寝てしまつていて。でもまあ、夢枕になると素人じや恐ろしくて敵わないよな。

本当に悪霊の類なら相応の妖気邪氣を有しているはず。それが何の耐性もない一般人に害を成そうというのだから、生きた心地がしなかつたことだろう。

「早々に解決してやりたい所ですけど、布都御魂で祓つても復活したりしないんですか？」

「そこはほら、もしそうなつても石上さんが何とかしてくれるでしょうし」

「対処法まるなげですか!? ホントに遠慮ないですね甘粕さん!!」

「はつはつはつ

胡散臭い程に爽やかな笑顔である。呆れていた鉄也だが、邪氣を知覚して目を細める。

「戻つてきたようですね」

「ですねえ、という訳でお願いします」

「はいはい、つと」

『召喚』したるは靈劍・布都御魂。神刀として破邪の靈氣を漂わせている。

『呵呵呵呵……呵呵呵呵呵呵——ツ！』

呵呵大笑で現れたのは、いかにもという感じの瘴氣の塊。漫画にでも出てきそうなく
らいに、いつそ見事なまでの悪靈だつた。

「なんかシオンタウンで出てきそうですね」

「あれの寄り代は骨なんですかねえ」

「ガラガラだけに、ですか？」

「ええまさしく」

馬鹿な会話をしつつも、靈刀の刃は神々しい光を放っていた。そのまま一閃——特に
手応えもなく振り払えた。

「なんか、追い払いはしても追い祓つた感じはしませんでしたね……」

「という事は、やはり寄り代の骨ですか」

「まだ骨とは決まってませんって」

などと続けつつも、さてどうしたものかと頭を捻る。冬馬と二人して悩んでいた所
で、言い付け通り大人しくしていたコロがワンツと吠えた。

「どうしたコロ?」

「ワンツ、ワンツ!」

鼻先で向こう脛を突きながらある方向に向けて吠える姿に、さしもの鉄也もティンと来た。

「……お前、まさか分かつたのか？」

「ワオオ～ンツ！」

そのとおり。的な音程の鳴き声を聞いて、冬馬と鉄也は顔を見合させる。まさかと
いう思いは強かつたが、もしかしたら、或いはやはりという思いもあって案内させる。
たどり着いたのは裏手にあつた枯れ木。その根元を掘り出したので手伝つてみれば
……

「やっぱ骨でしたね……」

「やはり骨でしたか……」

「ちよつと気分が悪くなつたんで離れていいですか？」

「どうぞどうぞ、後は私がやつておきますので」

お言葉に甘えて、鉄也はコロと共に入口の扉まで戻つた。何ともスッキリしない仕事
であり、愛犬の有能さを再認識した一件だつた。

日本列島から船で進んだ離れ島。

住人はおらず動物は本能で退避し、中心に立つのは二つの人影。

鬪気のぶつかり合い吹き荒ぶ風は、彼らの勝利を叫ぶ観客の声。

ぶつかり合う視線は火花を散らし、彼らに渦巻く超常の力は鬪気の物理的な衝突を起こしている。

一人は女、緋色の装甲を身に付けた妙齢の女性。

大和人の特色たる黒の虹彩頭髪。

袖はなく足の付け根を露出した独特の和装に、結い髪の先の毬が良く映える。

——西方、まつろわぬ神。

「——蜃氣樓、玖錠紫織」

名乗り上げと同時に像がぶれる。

い。立ち眩みでも起こしたかと錯覚してしまいそうな現象に、しかし相対者はうろたえな

その名乗りを聞いたときからこうなる事は当然に過ぎないと予測していた。ある意味で期待した通り、幾重もの虚像が実体として地を踏みしめる。

「いざ尋常に……」

一人は男、紋付を纏い右に和刀を下げる少年。

日本人らしい黒の瞳にミディアムヘアの黒髪。

この相手に然るべき出で立ちをと、石上流の戦装束に身を包む。

——東方、神殺しの王。

「——石上神道流、石上鉄也」

名乗り上げと同時に風が凧ぐ。

否、風を薙ぐ。

風を殺す。空気を殺す。天を殺す——神を斬る。

空を静める斬の意、殺の念。

この神を斬り殺すのだという激烈な意思が胎動する。

「いざ尋常に……」

お前の命運は自分のものだと拳を握り。

お前の命運は自分が断つのだと剣を執り。

「推して参るツ！」

既視感を覚える流血舞踏が幕を開けた。

共に武芸者、己の武威を誇る者。

己の借りている絶世の武威を誇る者同士、互いに初撃は譲らぬと前に出る。

滅刃の魔王は鋭き嵐とでも形容すべき暴風の一刀を振るい。

陽炎の神は落雷の爆撃とでも形容すべき拳打の一撃を放ち。

それぞれの存在を主張すべくぶつけ合つた。

「破あああああああああああああツ！」

「雄おおおおおおおおおおおおおおおツ！」

風刃雷神両雄激突。

一刀と一撃は互いの威力を殺しあつたが、鉄也の方に余裕は無い。

なぜなら敵手は虚実の揺蕩う霞の化身。

自分は剣の一振りなれど、眼前の女性はそうではない。

武術家たる彼女の武器はその四肢すべて。

両の拳は人体など容易く葬る自在の重機。

両の足は鞭となって刀となつて、大地を碎き空を裂く。

だけでなく、なにより重要なのはその特性。

正体不明ゆえに発揮する異能は可能性の拡大。

別次元に同時存在する己という、世界の壁を超えた像すら具現できる。即ち敵は彼女一人だが、決して一対一には成り得ない。

「——やるう！」

「でも、まだまだ」

「私の芯には届かないよ！」

新たに紡がれた可能性が追撃に迫る。

一人が二人、二人が三人、三人が四人と。

搖らぎ搖らいで、像がぶれて重なり幾重にも分かれる。

正面から殴打が来たと思いきや、背後からも同一の気配が襲い来る。

流石は蜃気楼だと鉄也は胸に感嘆を抱いた。

同時、実際に戦うとこうも厄介なのかと舌打ちし、身体を捻りながらその両方を斬り

捌く。

「颶風よツ！」

曲芸の如き宙返りでの回転斬り、そのままの勢いで残りの蜃氣樓に殺風を浴びせた。
——だが。

目に見える全ての彼女を殺したはずなのに、突如として出現した勇姿には傷の一つも
ありはしない。

「だあああアツ！」

真っ向からぶつかつてくる神はお返しとばかり突きを放つてくる。

見た目はただの正拳突きだが、神殺しの直感が警報を鳴らしている。
そして鉄也自身の理性もまた同じく。

故に迎撃でも防御でもなく、選択するのは回避行動。

初手から剣を振るつてしまえば後に続かないから。

その選択は功を奏することになる。

正面から来る右の拳打を左に躱すと、進行方向に右の拳が待ち構えていた。

その場で足を止め背後に跳ぶ。

すると追い討ちを掛けるように腹へ衝撃を喰らう。

二撃目の可能性から枝分かれした膝蹴りだ。

「——うぐつ！」

痛みに気が緩んだ隙を突き、両肩に踵まで落とされた。

その勢いで膝を付くことになり——そこで打撃の連続が中断される。

止まつてくれ！

神速によつて違う世界に逃れた鉄也は、拳撃足刀の包囲網から脱出する。

原型たる美麗刹那・序曲から「加速度は精神状況に左右される」という性質まで受け継いでいるため、攻撃に晒されていた中での加速度は精々が十数倍といった程度。

しかし、至近距離での格闘戦でそれほどの時間差が生まれれば、形勢を立て直す隙は十分に生まれる。

紫織の近くにいては陽炎に囚われるからと。

可能性を呼び出せないのであろう射程外に飛び退り、元の時間流に身を委ねた。

(序曲は性能が疎らだからって出し渋らずに、最初から使つておけば良かつたかな……)

先に述べた様に、鉄也の神速は出力が適度に安定しない。

発動の度に加速度は違つてくるし、使用中とて増減の変化は付き物だ。

随所隨所で決定打の後押しにはなるのだが、恒常的な戦闘力の底上げは難しい。

刀を振るう瞬間に時間が伸び、或いは縮めば距離感や力の入れ具合も狂つてくる。

使い続ければ慣れて行くのかも知れないが、今の鉄也にそこまでの掌握は望めない。

そのあたりは、まだまだ若輩ゆえの経験不足という事だろう。

「それが神速、極限の時間加速なわけだ。実際に相手してみると中々に厄介だよねあんたつて」

「……お前が言うなし。陀羅尼摩利支天だらにまりしてんの可能性拡大、敵に回ると厄介この上ない天魔・奴奈比ル・サルカ壳が蜃氣樓の異能を使っているのを見て「これなんて無理ゲー」と呟いた過去に想いを馳せる。

その異能、強度はともかく継戦能力では群を抜く。

まつろわぬ神の存在強度でそれを使われると、単なる不死身などより余程タチが悪い。

それを解決する打倒案自体は作中でも示されている。

百の剣を百発振るうのではなく、一つの億を叩き込むこと。

即ち、あらゆる可能性を手繰り寄せても絶対に回避できない至高の一撃を放てばいい。

——のだが、現実問題として実行に移せるかは別の話。

実現不可能と言つていい結論を導き出した鉄也は、しかしその思考を鼻で笑う。

(だけどまあいい。とりあえず斬つて斬つて斬つて、斬つてみれば結果は出るよな……)

段々と剣鬼に染まつてきた事を自覚する鉄也。
それを喜ぶべきか危ぶむべきか。

喜悦の裏に苦笑を隠し、魔王は斬神へ気を昂ぶらせた。

剣の魔人が腹を括つた。

ひしひしと伝わつてくる威圧感から怨敵の威勢を感じ取つた蜃氣樓は、それでこそ我が好敵手たる者だと歓喜の笑みを浮かべる。

そうだ、そうでなければこの戦いの意味がない。

斬神の神楽を舞い踊り、天狗の自愛を脱却すること。

そうして変異した性質に便乗し、摩利支天の神格を獲得すること。

この蜃氣樓はそのために戦場にいる。

常に搖蕩いまつろわぬ蜃氣樓。

故に求むる、実態なき自己の脱却を。

故に求むる、確固たる自己の確立を。

本来ならば霞と揺らぐ様こそが本質なれど、まつろわぬその身は反発せずにいられない。

そこで示した行動が陽炎への転化というのは、本末転倒と嗜めるべきだろうか、それ

でこそだと是正するべきだろうか。

どちらにせよ彼女は取り合わない。

それこそが蜃氣楼であり、玖錠紫織より受け継いだ性質なのだから。
だからこそ――

「私は理想の私を追い求め続けるツ！」

常に最高の自分でありたいと、そう願うのだ。

「太極」——無間叫喚

そんな蜃氣楼の求道を嘲笑うように、魔王は毒の腐海を展開した。

「全然使つてないから半分忘れてたけど、俺つて実は悪路の真似事できるんだよね」
天魔・悪路。

彼が掲げし祈りは、大切な人たちが美しくあるよう、全ての穢れを己が引き受けると
いう救済。

その清らかな渴望が生み出すは、己に触れたものを悉く腐り落とす埋葬の地獄。
殴りかかって来た蜃の腕を掴み取り、接触により腐り落した。

その地獄の名に相応しい絶叫を上げる女。

飛び掛からなかつた可能性へと逃れる彼女に、腐食の魔王は冷めた目を向ける。
それは眼前の敵を見下すものではなく……

「ああ、知つていながら解かつてなかつた。ただ予想外の相手が現れた事に興奮して、本質が全く見えちやいなかつた」

それは、己に対する自責。

興奮で盲めしいていた自身への落胆。

「そうだ、それが玖錠紫織なんだ」

天狗道に生まれ自愛に浸つた武門の求道者。

そう、それこそが玖錠紫織——摩利支天ではない彼女。

「お前はまさに彼女の生き写しだよ蜃氣楼。今なら解かる、玖錠紫織と呼んで差し支え
ない」

玖錠紫織という女は神座絵巻において。

求道の果てに神へ至り、利己と利他を共有することで天狗道を脱却した。
故に、摩利支天ならぬ彼女は狂天狗を仰ぐ掃き溜めの塵だ。

「お前には自分しか見えていない。自己愛に傾倒している木偶でしかないんだ」

今ならば一端くらいは分かる。

波旬の走狗、薄汚い波旬の細胞、ただ酔いに酔い狂つた亡者共。

黄昏の残影たちが口々に貶し、散々に忌み嫌つていた化外たち。

自分だけを愛する者は確かに強靭だ。

他から影響を受けない外郭の硬さは恐るべきものだ。

だがだからこそ、こんなもの無間叫喚で終わつてしまふ。

「人は一人じや生きられない」

そう悟り他者を認めた剣鬼がいた。

その根底を築いた渴望の基——第六天波旬とて他者を強く意識したから最強になつた。

誰もが唯我ではいられない。どれだけ望もうと、誰も孤独ではいられないのだ。

「それを知らないような人格障害者が、刃の好敵手オレライバルを名乗ろうなんて許さない」

故に無間叫喚地獄。

腐つて見える、だから腐れ。

そんな単純な理屈でと思わないでもないが、相手もまた自分が最高だからお前はその

糧となれど、傲岸不遜に突き付けてくる無法者だ。

そう考えればやはり自分たちは似た手合いなのかも知れない。

などと薄く笑う鉄也は、しかし女神への愛ゆえに容赦なく権能を振るう。

「血の道と、血の道と、其の血の道返し畏み給おう。禍災に悩むこの病毒を、この加持に今吹き払う呪いの神風」

自己収束の求道だけではなく、他者染色を含めた叫喚地獄。
体内に展開していた腐海が徐々に大気を汚染し始める。

「桶の小戸の禊を始めにて、今も清むる吾が身なりけり」

その様を見て危険だと判断したのだろう。

己の可能性を細分化し、四方八方にと散開していく。

だが、それを呆然と見過ごす鉄也ではない。

「千早振る神の御末の吾なれば、祈りしことの叶わぬは無し」

祝詞の完成と共に腐食の風を抜き放つ。

一陣の颶風が戦場を翔け、飛び交う蜃氣楼を切断、あるいは腐敗させる。
更に刀を一振り、また一振り。

逃げ惑う化身たちを神速で追い詰めてはまた一振りと。
血みどろの鬼ごっこが繰り広げられた。

鉄也が蜃氣楼を追い掛ける島の反対側。

目視すらも欺く隠形によつて潜んでいた蜃氣樓が氣を練り上げる。

神速によつて距離を詰める魔王が駆けつける前に、少しでも必殺性を高めようと画策していた。

「今さらに雪降らめやも陽炎かぎろいの、燃ゆる春へと成りにしものを——」

体内に循環する膨大な生命力——まつろわぬ神たる身においては神力と呼称すべきかも知れないが——を統率し、頭の先からつま先までの流れを把握する。

流れを速め圧を高め、より透き通るように精錬し。

気脈が氾濫しないように手綱を握りつつも圧縮していく。

刻々と迫り来る斬滅の未来を遠ざけるように、いくつもの可能性を向かわせる。

「唵・摩利支曳オン・マリシエイ、薩婆訥ソワカ——玖錠降神流」

紡ぎ上げた旋律に乗せ拳を振るう。

正面には示し合せたように鉄也の姿があつた。

膨大な力を感じて向かつた先で、鉄也は驚愕を露わにしていた。
(経路を誘導されたつ!?)

途中で幾人もの蜃氣樓を斬り捨て、あるいは無視して来たが、それらによつて出現箇所を巧みに操作されたことを悟る。

文字通りに腐つても敵はまつろわぬ神。

一筋縄ではいかぬことが分かつていただろうに。

そんな戸惑いは、押し寄せる生命圧にかき消される。

「陀羅尼孔雀王オオオオオオオオオオオオオオ——ツ!!」

全身から迸る夥しい生命力は、拳に流れ込み眩い輝きを発している。

背筋に怖気が走った。

考えるまでもなく食らえば死ねる。

あれが原典そのままだとしたら、同規模以上の気力と体力で応じなければ相殺すら不可能。

防御すればそれごと貫かれる。

回避などこの相手には考えるだけ無駄だ。

ならば答えはひとつ——

(全力で迎撃するしかない)

いや、むしろ分かりやすくて結構だ。

刀を振るう鉄也の顔は、剣鬼によく似たものだつた。

振るうは石上神道流甲の二、己と剣鬼の代名詞。

「蠅声エ——ツ！」

腐食の風を纏つたままの斬撃。

首飛ばしの颶風の体を取つてはいるが、その実態は少し違う。

序曲による時間操作の恩恵あつてこそだが、放たれたのは無拍子の剣。

これを更に鍊磨し最高位に至れば、級長戸辺颶風と呼ばれるようになる。

流派奥義のその一端、石上鉄也はこの一刀で以つて遂に触れたのだ。

「玖錠降神流・陀羅尼孔雀王ツ！」

「石上神道流・首飛ばしの颶風ツ！」

極大の鬪気がぶつかり合い、生命の白と冥府の黒が反発する。

日本列島の地図から一つの無人島が消失した。

日本列島の本土より遠く離れた無人の孤島。
見晴らしの良い平地に佇む二つの人影。

和装の男女が緊張の中で向かい合っている。

一つは我らが羅刹王、石上鉄也陛下その人。

一つは地上に顯現せし神、まつろわぬ蜃。

それを四方八方に設置された呪符及び監視カメラを通し、近くの離島でつぶさに觀察する人影もまた二つ。

こちらも男女であり、それぞれ部下と上司の関係。

誰あろう甘粕冬馬と沙耶宮馨であつた。

「どいう事で対神戦の監視——もとい観測にやつて参りました。実況は正史編纂委員会 東京分室室長・沙耶宮馨さん。解説は私、甘粕冬馬がお送りいたします」

冬馬がいつもの笑みを向けた先には、小型の録音機材がセットされていた。

「面白そだから実況はいいけど、これは誰かに見せるのかい？」

「ええ、石上さんのご両親に。ノーカット版の戦闘シーンと、私たちの解説が入った編集版の二種類を提出するようになると、彼のお父上から打診がありましてね」「……なんというか、あの親にしてこの子ありの一種だね彼ら」

馨は呆れつつ横目で冬馬を見て、類は友を呼ぶでもあるかと嘆息する。

因みに彼女、時々会話に着いて行けなくなるので、一応右腕として知識は仕入れていた方がいいだろうと三つのPCゲームを取り寄せていたりするのだ。
……委員会に獣の爪牙^{オタク}が増えるのも時間の問題である。

「——つと、はじまるみたいですね」

「お互いに名乗り上げから、まさしく決闘という風情だね」

両者は初撃からぶつかり合い、設置されたスピーカーからも豪快な衝突音が響いて来る。

※以下、音声のみでお楽しみ下さい。

「お互いに後方へ弾かれ合つたけど、蜃気楼の方が……幻影？ もしくは分身したね」「ほうほう、可能性拡大が現実に起こるところ見えるんですか。幻影か分身か。元ネタ的にどちらでもありどちらでもない、という感じでしょうかねえ」

「分身の追撃を受けた石上さんが纏めて斬り払ったね。おつと、続けて冥府の風だ」

「馨さん、風ではありません。颶風かぜです」

「ん？ だから風だろう？」

「いいえ颶風かぜです。まだまだ勉強が足りてませんねえ」

「分身が消えて本体だけになつたね」

「いえいえ馨さん、彼女に本体とか分身とかの区別は関係ないのですよ」

「それはどういう……斬り付けたはずの切創がない？」

「ええ、あの程度では彼女の蜃は斬れても——芯までは決して届かない。なんて、ちょっと正田卿的な表現じやなかつたでしようか？」

「……シン、蜃、蜃氣樓。本体と分身の区別、可能性拡大……なるほど、そういう絡繹りか」

「無視された上にネタバラシより先にネタバレした。な……何を言つているのかわから

(r y)

「右拳を避けた先に右拳が、それを更に避けると今度は膝蹴り、最後に右肩に左踵落としを決めながら左肩に右踵落とし。随分と芸達者というか、奇天烈な神様だね」

「まつろわぬ蜃そのものはこんな異能を持つていないのでしょうがね。彼女は異例であり特別、私や石上さんのような人種だからこそああまで強化されてしまつた悪い例ですな」

「ねえ甘粕さん、神速の権能っていうのは人間たる我々に目視可能な程度の加速じやないよね？」

「この場合は石上さんが特別なのでしょう。能力の内容的に、加速度は精神状態に影響されてそうですしね」

「……それも例の作品が由来なのかい？」

「ええ、言うに及ばずその通りです」

「久々に見たね腐食の権能。実質、使用は二回目かな？」

「軍勢変生・無間叫喚！さすが石上さん、期待に応えてくれますね！」

「被害が大きいから本土では自重してくれていたけど、まああの島なら人的被害はないから構わないか。ところで甘粕さん、石上さんの雰囲気が急変したようだけど、なぜか分かるかい？」

「そうですねえ、今の心情を端的に言い表すなら……『透けてんだよオ、霧に殴られて効くか阿呆がア！』といった所でしようか」

「神と魔王のリアル鬼ごっこ……」

「リアルで見る首飛ばしの颶風^{かぜ}は良いものですねあ」

「つ！ こんなところにいつから!?」

「——姿を隠すどころか認識を妨害すらしていますね、ここまで隕形はとてもとても」

「石上さんも気付いたらしい、そつちに向かつてゐる」

「おや、妨害を迂回するのに海上を走つていますね。やはりそれくらいは当然のようにはやつてのけますか」

「誘導されてゐるつ、流石に巧みだなあ」

「おおつ、陀羅尼孔雀王ですよ馨さん！」

「いや、言われても分からんんだけどね……」

「…………甘粕さん、衝突した力が飽和状態になつてゐるようなんだけれど」

「…………均衡が崩れたら爆発しそうですね、周辺の海域も巻き込んで」

「逃げようか！」

「逃げましょう！」

一時間後、冬馬と馨は海を漂つてゐる鉄也を確保（救助に非ず）する。

「さて甘粕さん、事後処理はよろしく頼んだよ」

「…………かしこまりました」

甘粕冬馬の受難は続く！

「シュピーネさんをロート・シュピーネと続けると、ロートスピーネと間違えることがあるんですよね」

沙耶宮馨のそんな戯言^{たわいご}と共に、鉄也の一日が始まった。

「——え？」

発言の意味が解らず、反射的に聞き返す鉄也。

いや、それは現実逃避だ。

彼は言葉の内容を誰より何より分かつていてる。

「間違えて『—d^{イク}i e W^ンiede r k^フu n f^トt』を購入してしまったんですが、『A m a n t e s a m e n t e s』との対比で楽しませてもらいましたよ」

一言目は脳が理解を拒んだが、続けられた言葉で流石に理解せざるをえなかつた。

「室長、アンタ……」

間違いない……っ！

この男装麗人、堕ちやがつた。

完膚なきまでにハマリやがったのだ。

果てと底なきこの魔窟世界オタクに……

神殺しに戦慄を覚えさせた少女は得意げに続ける。

「リルの『人間は共食いをする生き物でしよう?』には衝撃を受けましたよホント」「ええ、ライルの動搖も分かりますよ。俺も愕然としましたもん」

得意げに続ける。

「曙光夫婦の神世創生篇、殺し愛夫婦の威烈燎乱篇、解脱夫婦の染土血花篇、変態夫婦の咒皇百鬼夜行篇とクリアしていくんですけど、どのルートも胸を打たれました波旬死ね」

「俺的には殺し愛夫婦に色々と思いつ入れがありますけど、やっぱり皆かつこいいですよ波旬死ね」

得意げに続けられるそれに、鉄也は喜々として応答していく。

馨の変化にはとてつもない衝撃を受けたが、それを越えれば彼にとつて望む所だ。

同好の士が増えたことも、それが己の上司であり部下であることも、彼女とネタ会話ができることも喜ばしいことこの上ない。

思いがけない出来事に、鉄也は堪え切れない笑みを溢す。

それを見た馨もまた、爽やかながら実にイイ感情を乗せた笑顔を向ける。

「僕はあなたの威を借る右腕ですから、第三位神に刃向かう者とでもお呼び下さい」
輝ける曙の息子ヘブライ語で、それは明けの明星ルシフェルを示す。

即ち墮天使ルシファー、延いては神へ反逆せし魔王サタンの事である。

神殺しに仕えその威光で以つて組織を束ねる彼女に相応しいと言えなくもない。

という事を本人から説明された。

入り口が中二燃えゲーだったために萌え豚の類ではないようだが、いささか設定厨の
きらいがあるようだ。

組織運営の計画やら企画やらで、元から素質が育てられていたのだろう。
そこまで考えて、ふと思い至つた。

「——つて、それ遠まわしに俺に黒円卓を作れって言つてます？」

第三位、そして威光の代行者。

その意味するところは、某「親愛なる白鳥よミ☆」「B r i a h」の人である。
石上鉄也とラインハルト・ハイドリヒには、愛を謳う神殺しの魔王という重要な共通
点もある。

困惑気味な本人とて、その手のネタを考えたことがない筈もない。

むしろ真っ先に考えた類だと言つて構わない。

一人一人が一騎当千、万夫不当の勇士たち。

魂の輝きは只人と比べることすら烏滸がましく、その渴望が誇る熱量は、数多の雑魂を容易く呑み食らい焼き払う。

それが真正の超人たちであり、神の呪法によつて人を超えた正真しょうしんの魔人たち。

神殺しの獣が率いる黒円卓。

それを現実に再現するという耽美に過ぎる所業。

想像するだけで身が奮い立つ。

己がそれを実現できるという事実に心が揺れ動く。
だが。

「俺は嫌ですよ、神殺しの戦場に人間を送るなんて馬鹿な真似は」

そう、それが唯一にして絶対の隔たり。

神々の力が振るわれるという他に類を見ない悪魔的な——神話的な様相を成す戦場に、ただの人間を連れ立つなど徒に死者を増やす愚行でしかない。

そんな馬鹿げた真似は出来ないと拒絶する鉄也に、右腕を名乗る少女は白旗を振つた。

「いえ、流石に勘織り過ぎですよ。その辺のことは石上さん本人のご意思に委ねます」

故に強制はしないし、嫌だというなら結成もしないと。

あつさり意を汲んだ発言が逆に怪しいと胡乱な目を向ける鉄也。

「ホントですよ？」

「ホントですよ？」

ジッと見つめる主に対しにこやかに応答する馨。

それが惚けているように見えて更なる追及を行う。

「甘粕さんあたりと悪乗りしません?」

「しませんしません（今のところは……）」

二回続けられると嘘くさく感じる。

そんな鉄也の疑念は、やはりというか当たっていた。

これぞ世界に畏れられる神殺しの軍勢、極東十三騎士団結成の前日譚であつた。

「それはそれとして。もし結成するなら第十位、シユピーネさんの席は……分かつてますね沙耶宮室長？」

「無論、確と滞りなく。手筈は整えて御座います首領閣下^{マイノヘル}」

「……その呼び方に思う所はありますが、今の俺はあなたの部下ですよ」

「クスツ——これは失礼したね、石上係長。それでは今日はこの辺で」

それを一番喜んで、かつ最も割を食つたのはとある忍者な男であつた。

「…………（はツ！素早くツ！セイバーツ！）」

平日の真昼間からソファーに座り、仕事中だというのにスマホを持ち出し、無言でソーシャルゲームをする男の姿がそこにあつた。

……つていうか俺だった。

「…………（はいつ！行きますとも！お任せを！）」

その対面のソファーに腰かけ、同じく職務時間の真つただ中というのにスマホを弄り、無言で同じゲームに精を出す男の姿がそこにあつた。

……つていうか甘粕冬馬だった。

「…………（なんだよ。アイツ？やれやれ……）」

「…………（選定の剣よ、力を！邪悪を断て！『勝利すべき黄金の剣』！）」

鉄也は思う。

課題達成を目指してちまちまやつてる自分を前に、この男は何を宝具なんて使ってるん

クエストクリア

だと。

「…………（はい。了解です。行きます。）」

「…………（「束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流。受けるが良い！『約束された勝利の剣』!!」）

鉄也は思う。

コイツ宝具チエインとか舐めた真似をしてくれると。

「…………（ステータスアップ、頑張ります）」

「…………（卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め！『約束された勝利の剣』!!!）

鉄也は思う。

アルトリア三連星とか羨ましいことしやがつてと。

「…………ところで甘粕さん（私以外のセイバー死ね……）」

「…………どうしました石上さん（突き立て！喰らえ！十三の牙！『最果^ロ_ゴにて^ミ_ニア^ド輝ける槍』！）

鉄也は思う。

コイツ金に物を言わせてアルトリアコンプしてやがると。

「今日はどういつた用件で？（星光の剣よ……赤とか白とか黒とか消し去るべし！ミニナニハナイショダヨ！『無銘勝利剣』!!）」

「いえね、最近馨さんがなにやら裏で根回しをしているようとして。何か心当たりでもありはしないかと思いまして（選定を真にするまで、私は倒れません！）」

「……さあ、俺も与り知らないところですね（セイバーに遭えばセイバーを斬る……神に遭えば神を斬る……主にセイバーばかり増やす神を！）」

下手な誤魔化しだ。

鉄也が自分でそう思つたように、冬馬も盛大に違和感を覚えたらしい。
共に一区切り付いたためケータイを仕舞い改めて向かい合つた。

「甘粕先生、聖剣ブッパしたいです（＼＼＼＼＼）」

具体的には騎士王の聖剣を、彼はキメ顔でそう言つた。

つまり全力で話を逸らしにかかつたのだ。

発したのは紛れもない本音だが。

「諦めなさい。それは作品が違いますよ」

「やだやだ！ 僕も約束された勝利の剣——ツ！ つて叫んでみたい！」

「首飛ばしの颶風で満足しておきなさい」

「それとこれとは話が別です。神座はアレでいいものですけど、運命はこれで違うカツコよさがあるのです」

「まあ、ヘリオス戦で燕返しとかやつたそうですしね」

「やめて！ あれ実は微妙に黒歴史なの！」

——閑話休題。

「で、実際のところどうなんです石上さん。何かご存知なんでしょう？」

「……実は先日、室長から黒円卓を立ち上げてみないかと打診を受けまして」

「ほう。ほうほう。非常に興味深いですね。叶う物なら私にも関わらせて頂きたいことです」

「……もし結成するその時には、甘粕さんにシユピーネさんの席をお願いするという話に纏まりまして」

「——ファツ！」

奇声を上げて硬直する冬馬。

致し方ないだろう。告げられた事が事だ。

獣の爪牙、ならぬ剣鬼の佩刀の一振りに任せられる。

それ自体は非常に光榮な事で、元ネタを愛している冬馬からしても心躍る事案だ。

永劫回帰を繰り返しても絶対に顔の差で負ける形成（シユピーネ）さん（笑）の席とは言え、黒円卓

第十位という栄誉を賜れるとなれば小躍りでもしそうなものだろう。

——が、しかし。

考えてみてほしい。

創作でも現実でも変わらず、黒円卓は神殺しの騎士団である。

一緒にまつろわぬ神と戦おうと、そう乞われて頷く術者がいるだろうか？

断言しよう。

そんな馬鹿は現状、世界に七人しかいない。

だからこそ彼らは人を超えて、王と崇められているのだから。

「…………それは、第十位という事は、主に諜報活動ですよね？」

「頼むのが甘粕さんという事もあるので、本人の資質からしてもそうなるでしょうね」

談義の際には軽いノリで応答していたが、鉄也と馨とて見かけほど軽々しく指名した訳ではない。

まず神殺しと戦場を共にする可能性が跳ね上がる危険。

それを推してなお職務を実行し、成功させる卓越した資質。

互いに不安を押し殺してでも事を成せる程度の信頼関係を築いている人材。

それらを加味して考えると、現状では沙耶宮馨と甘粕冬馬の二名しか存在していない。

政治的かつ社会的な活動を期待される馨はまだ良いにしても、問題は冬馬だ。

彼の場合は諜報暗躍という内実からして、死地へ飛び込まざるを得ない可能性が高くなる。

それを考えると気が重いため、鉄也は黒円卓結成を保留にとどめたのだが。

「やれやれ、仕方がありませんね。給料を弾んでもらうよう馨さんに打診してみましょ
うか」

「……甘粕さん」

「はは、そう気に病むことはありませんよ。この業界に入つてから、危険なんてもう友達
みたいなものです。そう思えば、同じ危険なら楽しい職場の方がいいでしょ
う」

それに、と。

普段通りの胡散臭い笑みで、一欠けらの変化すらなく忍は宣う。

「戦場以外のアナタは些か殺しやすく見えてします。神殺しではなく剣士としては、ま
だ隙が多いようですからね。周りに誰かがいた方がいいでしょ。いずれ来る招集の
ときは、楽しみにしていますよ」

眼光を鋭くしたり、笑みを消したり、或いは深くしたり、殺意を滲ませたり、空気を
異にしてみたり。

そんな漫画のような展望などいらない。

真に忍ぶ者は頼りない笑顔のまま、相手に違和感すら覚えさせる事無く立ち去る。
変わらず抱く親しみのまま、殺されたとて怨めない。
見よ、これぞ影の使者。

闇に住まう男の本懐である。甘粕さんかつけー」

「前も似たようなことをしてませんでしたっけ?」

「これ持ちネタにしようと思います。僕はキメ顔でそう言つた(、・ω・)」

22

「ううう……」

清秋院恵那は死にかけていた。
ただ暇を持て余しているだけなのだが、本人としては至つて眞面目に、このままでは退屈に殺されると思考していた。

事の始まりは先月の一件。

奥多摩に出現した龍との戦闘に始まり、まつろわぬヘリオスと対峙したことによる消耗は大きかつた。

あれからまだ僅かほどしか経つていないとはいえ、人類最強格と分類していい彼女が未だに本調子ではないのだ。

まつろわぬ神の偉大さ、強靭さは推して知るべしということだろう。

そして、龍と交戦したばかりか神と対峙し、羅刹王の到着まで僅かなりとも時間を稼いだ功績。

うら若き少女が人の身で成したその偉業に報いるべく、政府内の老骨共も枯れ果てた良心から幾らかの温情を捻出した。

そうした気遣いから少女は個室を宛がわれていたのだが、逆に退屈を煽られて不満だつたというのは、小さな親切大きなお世話という諺の通りと言える。

「あゝあゝ。せめて話し相手でもいればなあ……」

これがもし大部屋なら、奔放な氣質と獸染みた直感によつて生まれる天衣無縫の振る舞いでもつて、同室の病人たちと仲睦まじく交流していたことだろうに。

加えて言うなら、呪術行使を禁じられているというのも辛い。

特に封印を施されている訳でなければ身体に支障があるという訳でもないのだが、彼女の場合は神おろしという特異性により内側からも神力に蝕まれる。

その後遺症とでも言うべき影響を危惧され、顔馴染みでもある沙耶宮馨から「大人しく寝て安静にしているように」と釘を刺されたばかりだ。

アレもダメ、これもダメと。

野生児な面もある彼女には気が滅入る環境に嵌まつていた。

——コンコンコンツ。

そんな折、彼女の個室にノックが一つ。

少女の无聊を慰める——退屈を叩き壊す者が扉を叩いた。

恵那も渡りに船と喜色を露わに、しかし落ち着いて返事を返す。

「はい。どうぞ」

「——失礼します」

そうして開かれた戸より現れた男を目にし、傍目にも大袈裟な程に驚嘆した。

「突然の訪問失礼する。傷の具合はどうだ清秋院恵那？」

「……王様？」

石上鉄也。

魔王。羅刹王。神殺しの王。

アメリカでは墮天使、イタリアではカンピオーネと称される超常の戦士。

前一件ですれ違つた護国の霸王が入室する。

……と表現すると壮大な印象を受けるが、要は単なる見舞いである。

「そう畏まらなくて……いや、畏まつてゐるのか？ まあ、普通に名前で呼んでくれて構わないよ」

「じゃあ、石上さん？」

「それ却下。沙耶宮室長と甘粕さんで間に合つてるから」

無難な答えを敢え無く切り捨てられ、ならばと順当にファーストネームに移行する。

「なら鉄也さん？」

「よしそれでいこう」

「だつたら、恵那も名前でいいよ」

「そうか？ じやあお言葉に甘えて、よろしく恵那ちゃん」

ゴホンと咳払いをしてから、気安い王様は姿勢を正す。

「改めて、石上鉄也だ。以後よろしく」

「清秋院家嫡子、恵那で御座います。こちらこそ、末永くお付き合いをさせて頂きたく存じます」

ベッドの上ながら正座し礼儀として頭を下げる。

そこに先程までの氣息さは微塵も窺えず、大和撫子の面目躍如といったところか。
しかし、それもここまで

天性の気質でもつて彼我の適切な距離感を看破し、故に馴れ馴れしいとすら言える態度で接し始めた。

跳ねるような軽やかさで飛び上ると、部屋の隅に追いやられていたパイプ椅子を並べる。

「はい鉄也さん、お話ししよう！ 恵那つてばやることなくて退屈だつたんだ！」

「お前病人だろうに」

「とはいつつ、鉄也もこの様子では問題なさうだと判断して大人しく従う。

「それで、恵那に何か用でもあつたの？」

「いやただの見舞いだよ。昨日の昼に甘粕さんと会つてね、物のついでと入院場所を教えてくれたんだ。つていうか、甘粕さん知つてる？ 胡散臭い笑顔の甘粕冬馬さん」

「うん。知つてるよ甘粕さん、忍者な人だよね？」

「そうそう。いつも足音消して歩くのが癖になつてゐるあの人」

とは言え、恐らく時と場合に応じて癖や習慣すらも偽つてのけるのだろうが。

彼はNINJAではなく忍びであるのだから当然だ。

などと鉄也の中で甘粕冬馬という男がどんどん美化されていくが、それでも実像を超えていないように思えるから不思議なものだ。

或いはそれも正体を掴ませぬ隠密の内なのだろうか。

「つまり甘粕さんは凄いんだよ」

「……鉄也さん、なんのその甘粕さんリスクト。ちよつとあの人のこと好きすぎない？」

「恵那ちゃん、男の子は誰しも一度は忍者に憧れるものなんだよ」

忍者と侍は日本が誇る文化であると。

そう宣う彼は、古来より剣術を伝える一族の末裔なのであつた。ある種の自画自賛か？

「あとアレも憧れるな。着物の帯を引っ張るやつ」

「あーあれーえ、つてやつ？ やりたいならやらせたげるよ？ 家に着物なんて燃やすほどあるし」

「…………非常にありがたく興味がそそられる提案ではあるが、流石に現役女子高生が相手となると犯罪臭がするので辞退させてもらいます」

泣く泣く提案を蹴った鉄也の態度が可笑しかったのか、少女は盛大に笑声を上げた。そうして両者が談笑をしていた頃。

海の向こうでは一風変わった出会いがあつた。

——中華大陸は南部に位置する廬山の奥地ろざん。

厳しく険しい自然の風景。

峰々が織りなす風景の雄大さは感嘆を齎し、莊厳な空気が吹き抜けていく。

世界文化遺産にも登録されている高山の、人が踏み入ること敵わぬ高高度にひとつのが庵いおりが鎮座している。

原始的な草ぶきの小屋だが、それでも文明を匂わせる異物。

だというのに周囲の環境に溶け込んでいる不可思議な光景だった。

そこに更なる異物が足を踏み入れる。

いや、これもまた異物と言うには明らかに馴染んでいる。

それもこの僻地に踏み込んできた異物——彼女の真実からすれば当然だろう。
其^きは霧^{きり}。其^きは霞^{かすみ}。其^きは靄^{もや}。

「頼もう。羅豪教主は御在宅かな」

軽^{けい}舉^きでありながら嚴^{げん}かに。

蜃氣樓と呼ばれた女は告げた。

呼応するように霧中から現れたのは、鋭い眼光を向ける麗明なる佳人。

「この庵に侵入する不届き者。我が名を知りますか、拳武の神よ」

まつろわぬ蜃氣樓と神殺し羅翠蓮が相対した。

「初めまして教主さん、ちょっと私に付き合つてよ」
相対する神と魔王。

大和の英傑と中華の武侠という両者は、自然体を維持しつつも互いに力量を計り合う。

人を超える魔を下し神に及ぶ彼女らは、当然のように相手が無手を得意とすることを悟り合つた。

「ほう……拳法家の神ですか。しかし胡乱な、あなたより感じる気は闘神のそれと些かズレる」

「うつわ流石に目聴い」

二百と余年を神魔の闘争に費やした羅濠教主は連戦鍊磨。

武術だけでなく法力にも長けた彼女は、持ち前の直感力もあつて蜃氣楼の違和感を掴んだ様子。

まさに一瞬で見抜かれた女神はと、ばれたなら仕方ないとあつさりネタばら

し。

「まあそうだよ。本来の私は武道家の神じゃないし、この姿だつて借り物だ」「有形にして無形、個にして群——否、正鵠を射るならば单一にして無限と称すべきでしよう。それに通づる幻の如き神は……」

羅濠の脳裏に一節の单語が過ぎる。

有るが無いもの、単独でありながら無限の姿を持ち得るもの。

即ち陽炎。霧の楼閣、蜃氣樓。

「——つと、だから凄すぎるつてば」

真実を見抜かれた途端、彼女の輪郭が人からズレた。

腕は膨張し青の龍鱗が肉を突き破り、頭蓋には角であろう不自然な膨らみも見えた。

「あゝあ、正体が分かつた途端に鱗が生えて来ちやつたよ、まだまだ至らないなあ」

言つて、鉄也から汲み取つた情報を想起することで、玖錠紫織という型に己を嵌め直す。

〔唵・摩利支曳薩婆訶〕
〔ワタシはワタシ、くじようしゃさふわ〕

やがて体躯は人の骨格を取り戻し、再び端正な東洋人へと移り戻つた。
揺ら揺らと移ろう様子を見て教主も確信を得る。

「やはり蜃、その姿は何者かの投影という事ですか」

陽炎を生み出す化生の正体は蜃。

大ハマグリとも、或いは龍とも伝えられる。

「正解。だからさ、協力して欲しいんだよ。蜃氣樓が玖錠紫織（わわたなし）で在るためには、東洋龍（ドラゴン）のそれだつたということだろう。

端的なその発言に、神殺しは何を見たのだろう。

羅刹の女帝は真意を見定めるように目を光らせる。

「……移ろいの化身が姿を定め、されど揺蕩うその心や如何に？」

問われた神は言葉を探すように虚空を見つめ、ポツリと一つの単語をこぼす。

「花嫁修業、かな？」

どこか照れくさそうにはにかむ蜃氣樓。

そうだ、花嫁修業。

自分で選んだ言葉ながら言い得て妙だと自画自賛する。

「私は、あいつのお嫁さんになりたいんだ。あの鋭い綺麗な切つ先に、私の事を写して欲しい。私だけを写していく欲しい。だからそのための修業中つてわけ」

石上鉄也の剣は真つ直ぐで美しかつた。

ただただ愚直に、鮮烈に、振るわれる一刀それぞれに彼の愛が乗つっていた。

自分以外の神へ向けた愛が宿つていた。

最後の衝突でそれが分かつたから彼女は退いたのだ。

致命傷程度は覚悟の上で、打撃に乗せた力を陽炎の展開に割いた。よつてあの一戦は両者生存の引き分けに終わっている。

相手も權能の篡奪が出来なかつた事から、自分の生存を理解していることだろう。次に会つた時に、彼の剣閃はより鋭くなつてゐるに違ひない。

魔王の撃劍。神殺しという偉業に隠された愛の宣誓。

刃に乗せられた激烈な意思を感じ取り、どうしても自分のものにしたくなつた。

ああ、つまり――

「アイツに恋しちやつたんだよね」

だから、彼を振り向かせるには力が必要なのだ。

あの殺意を自分の物にするには、より強固な自我が必要なのだ。

彼との神楽で摩利支天に――などという戯れ言はもはや不要。

確固たる玖錠紫織という型を手にして後に、全靈を賭して石上鉄也を打ち破る。

彼の愛^{やくば}を打ち碎き、その魂に消えない疵を刻み込む。

純正の殺意を振りまき。

否、内に秘め高める姿を括目し、対する女傑も顔をほころばせた。

「武琳の至尊たる羅濠とて、処女の一人に違ひありません。殿方に理想を求め、己もまた

理想を追い高め合う。その心意氣、久しく心打たれました」

半歩足を引き僅かに腰を落とす魔教教主。

本当に些細な動きだが、自尊心の高い彼女が戦闘前に身構えたという事実。拳を合わさずして実力を悟つたというのもあるだろう。

だがこの場合、それ以上に彼女が乗り気だという事が大きい。

そう。 そうなのだ。

羅翠蓮はこの修練たいけつに心が躍っている

彼女の価値観に合致する乙女の来襲に、その巣立ちを手助けできるという幸運に。

「良いでしょ。 この羅濠、あなたの嫁入りに力を貸して進ぜます——参りなさいツ！」

世界一恐ろしい女教師。

神殺しの魔王、羅翠蓮。

「応ツ！ まだ名乗れぬこの身でも、拳を届かせて見せようじゃないツ！」

世界一逞たくましい女生徒。

まつろわぬ神、玖錠紫織。

こうして当事者たる鉄也の知らぬところで、世界一おつかない花嫁修業が始まつた。

24

教師の体を取つてゐる羅豪に對し、紫織は生徒として胸を借りるべく疾走する。

喜悦を描く表情で繰り出される剛腕の破壊力は言わずもがな。

岩肌を碎き地を割るそれを、しかし教主は物ともせずに往なしてみせる。

迫り来る右の拳を左から弾き、外から内に力を加える事で体幹を揺らすことなく外させた。

本来ならば尋常でない速度と腕力でなる拳打の軌道をずらすのは困難極まる。

それは困難を成し遂げた羅豪の腕力もまた、尋常ならざる規模である証拠。

人間の枠より遙かに突出した無双の怪力を保つたまま、高速の右で紫織の心臓を貫く。

怪力無双の正体は彼女の権能、**大力金剛神功**^{だいりきこんごうしんこう}。

名が示す通りの金剛力が肉の器を四散させてしまう。

——と同時に。

確かに仕留めた手応えによつて生じた隙を、背後より忍び寄つたもう一人の紫織が突き穿つ。

有形でありながら夢幻を体現する神の機能。

石上鉄也曰くの名を、おんきょうこうじん隱形の降神——だらにまりしてん陀羅尼摩利支天。

自己を陽炎と化しその場にないものを映し出す摩利支天法。

神の御業により物理法則をも無視する彼女のそれは、別次元に同時存在する己という、世界の壁を超えた像すら具現できる。

在るが無い物。

無いのに在る者。

蜃氣樓に相應しい実体の幻影創造。

玖錠紫織を捉える事など何人にも不可能である。
そう。

蜃氣樓を捕らえる事など何人にも——人間には、不可能なのである。

故に、眼前の相手が羅翠蓮でさえなければ、或いは綺麗に決まつていたのかも知れない。

い。

しかし流石は音に聞こえし魔教クンフー・カルトマスター主。

簡単に突かれる隙など持ち合わせておらぬとばかりに、刹那の間も置かず紫織の背後

に回り込んだ。

ただの体捌きや立ち回り、高速移動の類では断じてない。

それならば闘神としての属性を得ている蜃氣楼が気付かぬ筈がないからだ。

不意を突き返した羅豪より放たれるのは前と同じ右拳。

着撃の方向が前後の違いこそあれ結果は同じく。

人外の腕力と達人の技巧を以つて、骨と臓物を磨り潰した。

確かに肝を潰したのだが、羅豪が出した攻撃が焼き回しなら紫織もまた同様に。こちらもまた新たな像を結んで何事もなかつたかのように立つている。

互いの立ち位置は最初に戻っていた。

「実像と虚像の区別なく、ですか。成程これは手の掛かる子弟のようですね」

「そつちこそ、縮地で後ろを取るなんてやつてくれるじゃないのお師匠さん」

実際にぶつかつた事で互いの手強さを再確認し、両者ともに唇が獰猛な笑みを描く。

「縮地神功・神足通。武林の至尊たるこの羅豪、武術を納めた程度で満足する小物ではありません」

縮地法。

武術における歩法などをそう言う事もあるが、この場合は本来の用法で使われている。

或いは縮地術、或いは神足通、或いは遁甲術。

呼び名や伝承は様々だが、即ち距離を縮め空間を跨ぐ仙道の術法を指す。

「武術を治めた程度、ねえ？ 随分と驕つてているように聞こえるけど」

「私とて個々の解釈までは戒めません。王者たるは器の広き傑物、それはそう取る者が
狹量なのです」

「……まあアンタ程の使い手に言われちゃぐうの音も出ないけどさ」

本人も言うように、彼女のそれは驕り高ぶつてゐる訳ではない。

態度や口調こそ尊大な物言いだが、それに相応しい実力を持ち合わせてゐる。
強者が強者たるを誇るのは慢心や傲慢ではなく余裕というものだ。

言動に値する偉業せんせいゆえにこそ羅豪は在るがまま振る舞つてゐる。

「さあ続けようか師匠」

「いくらでも掛かつておいでなさい」

ひと当て終えて前座は仕舞い。

玖綻紫織の花嫁修業は、いまだ始まつたばかりである。

そんな一幕が起ころる大陸より野を越え山越え谷越えて。

海の向こうで自分が渦中に巻き込まれつつあるとも知らぬ石上鉄也は、今日も今日とて趣味に全力を費やしていた。

具体的には、恵那の病室が個室なのをいいことに給料で買った高性能ノートパソコンを持ち込み、二種類のゲームをインストールした状態でヘッドホンを渡し、退屈していた幼気な少女を相手取り布教活動に励んでいた。

「失樂園は18禁なのでやらせません。後の二作品も『Amantes amante s』と『曙之光』のCS版なのでご安心ください。」^{まる}

巫女さんJ Kにコンシユーマとはいえエロゲーを勧めている男が今更何を言うのか。

彼とて自覚しているが建前と言う物があるのだ。

悲しい大人になつたものである。

「鉄也さん、誰に向かつて言つてるの？」

「気にしないでいいよ恵那ちゃん。ささつ、それよりも始めて始めて

「うん——？」

恵那は首を傾げながらも退屈が紛れるならばなんでもいいやと、己の仰ぐ王が推す作品をクリツクして実行する。

それは、一人の少女を魔道に染め上げる最後のひと押しであつた。

——たとえば、己の一生がすべて定められていたとしたらどうだろう。人生におけるあらゆる選択些細なことから、大事なことまで選んでいるのではなく選ばされているとしたらどうだろう。

機械から紡がれる音は言い現しようのない不気味さを匂わせる。

聞く者を嘲弄しているような、或いは俯瞰して何も感じていないような。須らく平坦な声音であるが、それが返つて妖しい色気を醸し出している。

まあつまり何時もの先割れ……もとい鳥海ヴォイスである。

水銀ウザイ。糞ウザイ。でもハマる超ハマる。しかしウザイ。メルクリウス死ね。これも愛のある罵倒とは鉄也談。

波旬は死ね（本氣）。

同じ罵倒でもこちらは愛も糞もない本音である。

ベッドで上半身を起こして画面を見つめている少女を尻目に、鉄也は思考を回転させ
る。

春秋院恵那。

性別は女。年齢は満十四歳。

四家の一角、清秋院家の一人娘であり、降臨術師として暴風神スサノオの神力を借り受ける使者でもある。その異能もあつて、剣術・呪術ともに日本最強の実力を持つ媛巫女。

神がかりの術を行使すればスサノオの加護により暴風の神威を操り、まつろわぬ神や神殺しの魔王への対抗札になり得る。

加えて神の巫女として、日本一有名と言つて過言ではない宝剣・天叢雲剣を授かつてもいる。

あの神刀はそれ自体が神獣や従属神と呼ぶべき存在だ。

今も簡易的な神殿に奉納され祀られているが、それがなければ扱い手の恵那か主神たるスサノオを求め、現世の空気に当てられて暴走を始めかねない暴れ馬である。同室でゲームに没頭している少女についての概要。

彼女の戦闘力と諸々の事情を併せて、戦士としての冷徹な思考が結論を下す。
戦友としては些か不足。

しかし配下として、己が黒円卓に座す佩刀の一振りとしてなら申し分ない。

(つて、ゲーム布教しながら考える事かよ。なんだかんだ言いながら黒円卓結成に乗り気とか、我ながら度し難いな)

趣味全開で交流しておきながら、醒めた眼つきで少女を見つめる己に自嘲気味な感慨を覚える鉄也。

しかし事は戦いに関する模索。

戦に生きる魔王として心情と離れたところで思考は巡る。

暴風の神威は冥界の腐毒と相性がいい。

たとえ神がかりを使わずとも、彼女のスペックなら他にやれる事も多いだろう。
もし黒円卓に加えるとして、神の巫女たる彼女に相応しい席は――

「——sieben、天秤の第七位」

円卓を割る資格と力を持つ剣の媛巫女。

流石に幕引きの鉄拳と比べれば随分格も落ちるが、それは比べる方が間違っているだろう。

思わず口に出してしまったが、恵那はヘッドホンを着けている。

聞かれなくて良かつたと安心した半面、話を切り出す口実が出来なかつたと落胆してもいる。

切り捨てることも割り切ることも出来ない自分がもどかしく、度し難い神殺しの性を疎ましく思う鉄也であった。

断章 剣王邂逅

——そして、出会つた。

「サルバトーレ・ドニカ……」

「テツヤ＝イシガミ、だつたかな？」

『断頭の剣鬼』と『剣の王』が出会つてしまつた。

「どうしてだろうな、自分でも不思議だけどさ」

「一目見てすぐに思つたんだ、君もそうなんだろうって」

あまりのおかしさに笑みすら零れる。

両者共に当然の如く剣を執り、自然の流れで前へと踏み込む。

「俺はお前が——」

「僕は君が——」

——心の底から氣に入らないッ！

ぶつかる刃は同じ軌道を描いた故に衝突した。

即ち共に、問答無用で首を飛ばしに掛けた証拠。

立ち上る氣炎は剣気ではなく極大の殺意。

斬り合いを愉しもうだとか、腕を高め合おうだとか、そういうふた馴れ合いの尽くが放棄されている。

斬りたい。殺したい。——斬り殺す！

石上鉄也なら常に見られる冷徹な思考が跡形もない。

今のは、ただ殺意の赴くままに刃を振るう悪鬼でしかない。

それは対するサルバトーレ・ドニもまた同じく。

常なら戦場に在つてなお変わらぬ朗らかな笑みが鳴りを潜めている。

日常と寸分変わらぬからこそ戦場では怖気が走る彼の笑顔が、今はいつそ分かりやすいほどに冷え切っているのだ。

返す刀で首を狙う剣閃は、同じことをした相手に再び防がれる。

だが、防がれたと感じたのは相手もまた同じく。

剣に余裕がない。

殺意に遊びがない。

どこまでも純粹に相手への殺意のみで腕を振るうから、フェイントや他の部位を狙うという発想が頭から抜け落ちている。

神殺しとしても剣士としても、石上鉄也としてもサルバトーレ・ドニとしても、これは有り得ない失態だろう。

より疾く敵の首を落とすことにのみ執着する理解不能の接戦は、しかし数十秒と待たず終わりを迎えた。

唐突に静まり返った場の空気。

それは事態の収束ではなく、爆発に向かつて張り詰めているだけだ。

「ああなるほどな、そういうことか」

「どうして君が気に食わないのか、少し解かつたよ」

冷え切つたままに高まる呪力の渦が、遂に暴風となつて吹き荒れる。

次の瞬間、銀の魔剣と黒の神刀が真の意味で激突した。

「自分は何だって出来ると信じているその傲慢！　その自尊！　虫唾が走る。思い上が
りも甚だしいッ！」

「君は強い。君は鋭い。なのにどうして殺意を押し殺しせつかくの刀を納めるのか、僕には理解できないな」

彼我はどちらも純正の剣士でありながら純粹な剣士ではない。方や剣に拘り剣で敵を倒す状況を作り上げる策士の面を持ち、方や剣を愛の象徴として殺意を乗せながら、あらゆる能力を剣以外に徹底している潔癖症。

サルバトーレ・ドニは魔剣変生の権能を持ちながらも、それは己の腕はあらゆる剣の性能をも凌駕するという自負故に。

石上鉄也は神刀侵食の権能を持ちながらも、それは己の女神へ捧ぐ愛と誓いの証たる故に。

「俺たちは剣士、剣客だ！　斬るべきを斬り、斬らざるべきを斬らぬ。武の道を歩む者として当然の心構えすら持たない愚物めツ！」

刃を振るう。刀を振るう。愛を振るう。

この尽きることなき愛に誓つて、目の前のサルバトーレが許せない。

「僕たちは剣士であり戦士だ。目の前の悉くを斬り伏せる気構えもなく剣を持つなんて在り得ないだろう！」

刃を振るう。剣を振るう。命を振るう。

命の限りを尽くす信念に基づき、目の前の鉄也が許せない。

どちらも共に言つてること自体は真つ当なことだ。

しかし、その言葉に掛ける誇りが、情念の重さが尋常ではない。

「このツ——剣に狂つた凶鬼がアツ！」

「君はそう——愛に狂つた剣鬼さツ！」

より一層強く衝突する刃。

伝わる衝撃の重さが相手の意思の強さを感じさせ、だからこそ退けずにまた繰り返す。

絶え間なく響く刃と刃の鳴動が、まるですり泣いているかのようだ。

これほどの腕を持つ達人が、自分の心を理解してくれない哀しみ。

そんな主の慟哭を剣が肩代わりしているかのようだ。

「そうだ。俺は彼女の愛に生かされた！　彼女の愛の為に生きている！　これが俺の彼女への愛だアア——アツ！」

だから有無を言わさず斬り捨てる。

こんな出会いしかできなかつた好敵手よ、我が愛を証明する礎となれ。

「そうだとも。僕は僕に斬れぬものを許さない！　地上の全てを斬り尽くし、天上の神々を僕の刃の鎧にするツ！」

故に何も言わず朽ち果てる。

こんな出会いしかできなかつた好敵手よ、我が剣を飾る華となれ。

「お前は此処で斬り殺すツ——!!」

「君はこの場で斬り殺すツ——!!」

他のなにを切れなくとも神だけは斬る絶対の神殺しになりたい男と、神々を含めたすべてを斬る無双の剣士になりたい男。

似ているようで決して違う両者の邂逅は、過去最高に殺意に塗れた出会いであつた。

終章・序段

神の愛は既に尽きた。

失せた楽園には、罪が溢れる。

「あなたがこの国を治める王か？」

童女の形をした闇の化身が語り掛ける。

月明かりを映す白銀の頭髪が、その神秘性を驅り立てている。

此より彼方は地母神が領土。

進むは冥府、退けども囚われ、骸へ朽ちて死屍累々。

ああ、この世はなんて憎ましい。

「俺の殺意を教えてやるよ」

神殺しの刃が鳴動する。

昏く、昏く、世界へ向けた恩讐が滾る。

我が祈りは汝へ向けた感謝の憎悪。

ありがとう、ありがとう。だからその身を斬り拓こう。

ありがとう、ありがとう。そうしてくれると待っていた。

ああ、神とはなんて罪深い。

この世界は歪んでおり。

この世界は狂つており。

この世界は——故に孤立し、隔離されているのだから。

では一つ、皆様私の歌劇をご観覧あれ。

『太・極』

『太・極』

その筋書きは、ありきたりだけれど。

『隨神相

役者が良い。至高と断ずる。

『神咒神威

ゆえに面白くなると願つているわ。

それは日本より遠いイタリアの地。

一人の少年が神へと向けて宣誓を放つた。

「……草薙護堂だよ。覚えておけ」

それはあまりにちっぽけな。

しかし当人たちには欠かせぬ意味を持つ存在証明。

「これだけいっしょにあれこれやつてきたんだから、名前ぐらい覚えておけ。エリカにも言つたけど、俺の名前とか気にしてなかつただろ？　つたく、失礼な連中ばかりだ」

直後、景色は稻妻と白焰に飲み込まれる。そして――

「さあ皆様、祝福と憎悪をこの子に与えて頂戴！　第八の神殺し――最も若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言靈を捧げて頂戴！」

地上に顕現した女神は宣う。

それは祝福。愛し子の幸を望む母の愛。

それは呪詛。神を贊とし、子を怪物へと成り上がらせる忌まわしき邪法。

「ふつ、よからう。ならば草薙護堂よ、神殺しの王として新生を遂げるおぬしに祝福を与えるようではないか！　おぬしは我的――勝利の神の權能を篡奪する最初の神殺しじや！」

何人よりも強くあれ。ふたたび我と戦う日まで、何人にも負けぬ身であれ！」

地上より消え去る贊たる神もまた宣う。

それは祝福。好敵手を認め加護を与える神の愛。

それは呪詛。仇を憎み、その生より安寧を奪う忌まわしき怨嗟。

七人目のカンピオーネ、石上鉄也の再誕から僅か二年。
新たな魔王がここに誕生したのである。

斯くして物語の序章は終わりを告げた。
そして今、舞台の幕が上がる。



これより、激動となる一年間の物語――。

終章・詠段

「石上鉄也、断頭と颶風の殺神刀だ」

いつかもやつた名乗りり上げの再現。

確たる意志と想いを胸に、より本質を突いた宣誓を告げる。

対する彼女は震えていた。遂に、遂に遂に、遂に遂に遂に遂に——!!
この神咒なまこを彼に告げられる。

これこそ己だと宣誓出来る。

感涙に打ち震えながら、もはや揺蕩わぬ蜃氣樓は己が呪を発した。

「まつろわぬ蜃氣樓、玖錠紫織いツ！」

蜃という名の神はもういない。

此処にあるのは摩利支天、玖錠紫織という可能性だ。

「さあ、わたしたちの祝言かぐらを始めよう。今度は最期の最後まで休みなく激みなく身の芯まで響く刃金の音色を奏でよう!!」

殴り砕きたい。

——でもどうかお願ひ、壊れないで。

斬り殺したい。

——まだだ、この程度で倒してくれるな。

このまま斬られたい。

「——いやだ、私はもつと高くに行ける」

このまま砕かれたい。

「——いやだ、俺はもつと遠くに行ける」

相反する渴望。正反対なのに両立する関係。

これもある種の自壊衝動。

自己矛盾に苛まれながらも、剣と蜃は交わり続ける。

冷たい刃が肌に沈み、皮を破いて肉を抉る。筋を搔き分け、骨を割断し、腕を落とす。
だが、その程度では斬り殺し切れない。

「興奮するよ、胸が高鳴るツ——！」

ああ、でも。この胸の高鳴りは……

「——これは、違う」

この胸の高鳴りは、恋じやない。

この愛おしさは、石上鉄也の愛じやない。

「これは刃の中の剣鬼の愛だ、蜃氣樓の番つがいいたる剣神の情。斬つても斬れない好敵手を歓迎する心」

だが俺の番いは、刃を納める鞘は蜃おまえじやない。

「玖錠紫織ですらないお前は——例え玖錠紫織だとしても、俺の愛は渡せない！」

だつて石上鉄也という刃は、彼女の為に生まれたんだから——！

それは剣呑で凄絶な、悲しくも愛しい殺刃の糸。

神殺し以前に彼が出会つた、とある一人の少女の話。

「愛しているよ、ネイア——」

「……うん、私も。愛しているわテツヤ」

そうして思考は回帰する。

時は昨年、初夏の頃、海を越えたイタリアの地にて……。

——ローマ。

イタリアの首都としてヨーロッパでも有数のグローバル都市にして、景観の美しさから『永遠の都』と称される地もある。

トレヴィの泉やサン・ピエトロ大聖堂など、有名な建造物を目的とした観光客は世界中から集まり、日本でも某映画から興味を抱く者が多くいるだろう。

しかし、それは表向きの話。

裏向きの、血と神秘に満ちた世界においては、少しばかり話も変わつてくる。イタリアという国、延いては欧州という地域において、自然災害は付き物だ。何故か。話は簡単だ。カンピオーネという怪物が三人も定住しているためである。魔王、墮天使、羅刹王、神殺し、エピメテウスの落とし子——カンピオーネ。

日本人としてはチャンピオンと呼んだ方が理解しやすいだろうか。

勝利者を意味するその名がイタリア語のカンピオーネという呼び名で定着していることから分かるように、欧州は神殺しの誕生が多い地域と判別される。

現存する魔王が六名だというのに、その半数がイギリス、イタリア、バルカン半島という近隣を拠点としているのだ。

その認識もやむなしというべきだろう。

無論、いくつも国を挟む程度には離れている位置関係だが、逆にその程度しか間がな

い距離と言える。

神々より簒奪せしめた権能を振るえば、彼らにとつて小国の一つ二つは一夜と待たず更地に出来てしまふのだから。

そんな物騒な土地に住まう魔術師たちだ。

当然の如く日ごろから胆力は鍛えられ、魔術武技の腕も世界基準で高水準を誇る。イタリアの地では七姉妹と呼ばれる名門魔術結社。

ミラノの『赤銅黒十字』『青銅黒十字』をはじめとして、トリノの『老貴婦人』、フィレンツェの『百合の都』、パルマの『楯』、最後にローマの『雌狼』と『蒼穹の鷲』。

その一つに、石上鉄也は身を寄せていた。

石畳の広場の中心にある噴水。

その淵に、彼女は座つていた。

鉄也と同じ黒い髪は長く伸ばされ、されど明らかに異なる美しさを兼ね備え。ぱちぱちと瞬く蒼の瞳は、空の色よりも鮮やかで。微笑みは向日葵よりも輝かしく。人類の粹を極めたような、理想をそのまま実現させたような少女であつた。

「はじめまして！」

「——はつ、はじめまして」

端的に表現して、それは一目惚れだつたのだろう。

このように見た目麗しい少女に声を掛けられ、初心な少年がしどろもどろになるのを責められはしまい。

「珍しい人ね、外国人？」

「あ、うん。日本人、だけど……」

「遠いところから来たのね」

眼を大きく見開いた彼女は、座つてとでも言うように掌で隣を叩く。

いきなりのことで戸惑つたが、少し迷つてお言葉に甘えることにした。

「どうして日本からイタリアに？」

「えつと……観光、に……？」

まさか魔術師として短期留学に來たとは言えず、曖昧な表現になつてしまふ。
その様をどう思つたのか、少女はふふっと笑い飛ばす。

「そうだ！ 私はネイアつていうの、あなたは？」

「——鉄也。テツヤ＝イシガミ。鉄也でいいよ」

「テツヤね！ 私もネイアでいいわ」

「よろしく、ネイア」

「これが後に宇宙を変える出会いであることを、今は誰も知らなかつた。

終章・破段

「まずツ——！」

首飛ばしの颶風が避けられる。着撃すれば人間の胴くらい優に切り裂く得意の技だが、奴の防御を抜く程の威力を放つには消耗が激しい。防がれるならばまだしも、回避されては後がない。
 （ダメだ、奴の方が速いツ）

万事休すか。

石上鉄也の力でやれることはやり切った。もう成す術がない。敗北の二字が脳裏をちらつく。それは死亡とほぼ同義であり、走馬灯なんでものを思い浮かべた。その時。

——、■■■■■■■■■■■■。

脳裏で誰ナニカかが囁いた。

——冥府魔道の息吹よ此処に、洗礼をもって吹き荒れよ」

呪言によつて微かに漏れ出た冥界の気が、斬首の颶風を後押しする。

届いた——ツ！

鉄也は本を閉じ独りごちる。

その題名を、エウリピデス作集といった。

「これも剣鬼を目指した故の宿業、なのかねえ……」

——即ち、愛する者こそを斬る定め。

暫し瞑目し、頭を振る。

これは考えなければならないが、同時に考えたところで仕方のない問題でもある。逢いに行こう／愛に逝こう。未だ達さぬ剣の御子は、揺れる心を静めに向かう。

「——ああ、今日は朔か」

これじゃあ……月が綺麗とは、言えないな。

ギリシア神話には狩猟の女神アルテミスへの生贊になつた少女の話がある。

ミケーネの王女として生を受けたその少女は、父王の失態を償う為の贊として捧げられた。彼女は女神アルテミスの化身という解釈を持ち、同一視される女神へカティーと一體になつたとされる。

少女の名はイーピゲネイア——これは即ち、そういうことだ。

「そうなんだろう、ネイア？」

眼前的少女は、まつろわぬヘカティーの表層人格は無言の肯定を示す。

「君が日中しか出歩けないのは、夜になれば月の女神であるヘカティーの本性が強まるから。俺に加護を与えて親身にしていたのは——」

——俺に君を殺させるため。

そうなんだろうと問いかけると、少女は申し訳なさそうに言葉を吐いた。

「言つたよねテツヤ、私は人間が大好きなの。国を護るために生贊になつたからこそ、これだけはもう譲れないのよ」

人が恋しい。人の営みが愛しい。

けれど、冥府神たるヘカティーはそれを引き裂かずにはいられない。

死神が愛するという事は、死と破滅をもつて魂を永遠に抱くという事。

「だから私は人を……あなたを殺さずにはいられないのツ！」

涙とともに苦しむ彼女の心意を、悟らない訳には行かなかつた。

ああ、だからこそ俺は愚行に出る。

全靈を賭して好きな女の子を斬る、という暴挙に挑むしかない。

「私は、私はテツヤを……わたし、は——」

目蓋の裏から現れたのは、夜空に浮かぶような銀月の瞳。

しかし見開かれた瞳のほかに、闇色の空に月はない。
 「そう、わたしは人間おまえを愛しているよ」

今宵は新月、朔の夜。月の女神たるカテーの神格が最も弱まる日。
 だからこそ鉄也は、今日ここで終わらせるのだと決めていた。

「時よ止まれ、お前は美しい——か」

口から出たのは、歌劇の主演たる男の渴望。

眼前の少女は出会った時から変わらない。

変わらぬのだ、俺を殺そうとしているこの時でさえ。

「死に濡れて冥界の腐毒に侵されながらも、君は美しいままだ」

ああ、だからこそ——だからこそ恐ろしくて仕方がない。

美しい思い出が血塗られて行くのが許せない。

「綺麗な君を、だからこそこれ以上汚したくない」

現世の毒に汚染され、冥神としての本性を強めている彼女。

ああやめてくれ、これ以上神らしくなつた彼女など見たくない。

——これはむしろ、愛を謳う破壊の君にこそ相応しいのかも知れないが。

「俺がこの手で……殺してやる」

死は重い。だからこそ我が破壊を厳粛に受け止めて欲しい。

軽々しい気持ちなんかじやない。俺は本当に君の事を——ツ！

「俺は君を愛している」

愛しているから破壊するのだ、愛でる為にまずは壊そう。

死にたくない。死にたくない。殺すしかない。でも殺したくない。

だけど、人を愛する君は殺戮を許せないだろう。人間を愛しく思うと、そう言つた美しい祈りは汚させたくない。

「——君は、誰よりも美しいのだから」

その姿を心に焼き付けよう。永劫、忘れる事などないよう。

例え何も見えず聞こえなくなつても。忘れたりしない。忘れてなどやるものか。だからまた逢おう愛しい君よ。

「さようなら……：ネイア」

それまで、少しお別れだ。

「ごめんねテツヤ。辛いこと、させちゃつたね」

艶やかな黒髪は憎々しいほど鮮やかな赤に染まつて。

それでも口元には笑みが浮かんだまだままだ。

銀月に輝いていた瞳は、明るい空を宿す蒼穹の色に戻っている。

「本当に、なんてことさせるんだよ……」

「うん、本当にごめん。ごめんね」

「ごめん、ごめん、と誤り続ける。

少年の頬を流れ落ちる涙を拭い、既に神ならぬ少女は更に告げた。

「でも、お願ひよ。私は人の営みを荒らしたくない」

いずれは愛し愛される者を引き離すのだから、それをいたずらに早めるような真似はしたくないと。

そう語つたのは他でもない、冥府に住まう者たるこの少女。

死後に神となつた、かつて神でなかつた少女は希こいねがう。

——あなたが愛していいると言つてくれたから。

——あなたに愛されているのだと想えたから。

——あなたを愛しているのだと、そう思うから。

——だから、残酷なお願いをしてごめんなさい。

「いつかまた出逢えたら、今度もあなたが殺してね。次もまた死ぬときは、こうしてあなたの顔を見ていいから……」

本当に、本当に残酷なお願い。それでも彼は、石上鉄也は応えてくれると信じているから。だからこそ余計にタチが悪いと、己の事ながら自嘲する少女。

そして応えた。少年は悲愴な覚悟で、少女の夢を叶えたいと渴望する。

「……なら俺は刃になるツ。これから神殺しになる俺は、どんな神をも殺して生きていく。生きて生きて生き続けて、最期のその時まで君の死を見取り続ける。——神殺しの刃として、君を殺すために生きていく」

それはなんて劍呑な誓い。

それはなんて凄絶な祈り。

なんて、なんて悲しく——そして愛しい永遠の約束。

「愛しているよ、ネイア——」

「……うん、私も。愛しているわテツヤ」

止め処なく溢れる涙が視界を遮るが、互いにその目は離さない。

永久に朽ちえぬ不滅の絆。石上鉄也の胸に輝く、永遠に色褪せない不变の刹那。この情景こそ、断頭颶風の神殺しが抱く渴望の原風景なのだ。

終章・急段

「お前、千年先も生きてるつもりか？」

次瞬、護堂の胸を射貫くような鋭い声が突き刺さる。

「百年二百年なら実例もいるから生きれるだろう。だが三百、四百、五百年先まで生きていられるか？ 寿命云々が無くなつて、だから生きていられると、お前は確信を持つて言えるのか？」

——言える訳が無い。

護堂自身が常々思つてていることだ。

自分はいつ死ぬか分からぬのだから、女に手を出す余裕がないと。

「よしんば生きていたとして、お前自身が暴君になつていないと確約できるか？」

——出来る訳がない。

未来は誰にも分からぬ、などという決まり文句ですらなく。

百年経てば時代は移ろい価値観は変わり、旧世代の老害と化すのは自明の理だ。

魔王暴君の代名詞たる羅濠教主もヴオバン侯爵も、百年二百年前には当時の偉人英雄像そのものだつたろう。

「元来、度を越えた頑固者が神殺しだ。一度根付いた価値観はそうそう変わりはしない。時代に合わせて、など出来よう筈もないだろう」

だからこそ石上鉄也は、神を殺しても滅ぼさない。

神は世界の守護者として、世を乱す神殺しを仇敵と定める。

〔神と魔王には互いが必要なんだよ。双方が同時に消滅しなければ、ただ力だけが跋扈ばつこする〕

それゆえ、どちらも共に抑止力なくして守護者たり得ない。

陰陽が両立し喰らい合うこの太極図は崩せない。もし天秤を傾けるなら、その後に総てを白紙に戻すしかないのだ。

「俺はその方法を探してる。神と魔王の対立を無くすべく、遍く神々を現世から葬り去るため」

その最後に待つのが己の消滅だからこそ。

彼の望みは究極的にはただ一つ。始まりの時から変わらず今も、愛しい彼女と永遠に——だからこそ、自分の死後にネイアが顕現しないため。両者が共に消滅するべく、鉄也とネイアは行動している。

「黒円卓は神殺しの騎士、自滅因子の軍団だ」

宿主を殺し己もろとも死滅する自壊細胞。アボトーシス 神殺しを生んだ義母を葬り、力の源となつた花嫁と共に果て消える。

それを愚かしい自壊衝動と、嘲笑う事などできはしない。

「齊天大聖は殺さない。奴にはこのまま日光で、防波堤として留まつてもらう。神と神殺しの存在が無くなるその日までな」
首領あるじの下した決定に、副首領ふくひしゆうりょうは挾む意を持てなかつた。

——天を超越した天上の果て。

少女の型をした宇宙の意思是は、淡く柔らに微笑する。

「それでいいのよテツヤ。あなたは良い子ね、本当に」

そう、だから。これは総て予定の通り。

それ 神座が望んだ采配の結果。

「ここまでおいで、私の可愛い七人目の死滅因子——」

絶望の導師、第六天パンドラが定めし運命に従い。

自滅因子にして聖遺物の型を持つ神殺しは、存在意義を果たすべく鳴動していた。

そもそも、石上鉄也は生糸の求道者。

——ではない。彼の本質はそうではなかつた。

彼に限らず、神殺しとは元来が霸道を歩む者らである。

例えば現存する最古の神殺し、サーシャ・デヤンスター・ヴォバン。彼は典型的な霸道を歩む王である。孤兎という身の上で神殺しを達成し、その才気を發揮し身一つで玉座に着いた霸王。

例えれば二百余年を生きる古参の一人、羅翠蓮。人知の及ぶ限りの武芸を極めた達人にして、魔道方術をも納める天下の女傑。己の力量を正確に把握する故に、大陸の頂点に君臨し民を従える武道王。

例えば、新世代にて最も尖った剣狂い、サルバトーレ・ドニ。上記二人とは違い、彼は天下に霸を唱えるという意思是薄い。ただひたすらに己の剣を高めたい。その祈りは一見すると求道に見えるが、しかしそく思い返して欲しい。

求道の典型、求道の極致——壬生宗次朗という剣鬼の事を。

天狗道の幕下に生まれた彼の抱く汚泥は、天下最強の剣士となる事。

この世に壬生宗次朗だけが残るまで、すべてを斬り尽くす滅相の祈り。

——人は一人じや生きられない。彼の言葉はその通りの真実であるが、それは人だから的一面だ。ただ生きるだけなら、生命活動の継続という意味だけならば、求道神に他の存在など必要ない。

その観点からすると剣の王は求道に一途とは言えまい。

剣を誇る彼はそれを高めることを至上とするが、その要因を外に求めているからだ。己が至高ゆえに總べてを斬り伏せそれを証明するのではなく、剣技を高め頂点へと登り詰める。

神と神殺しを相手に切り結ぶことで腕を磨こうとする彼は闘争の探求者。

その点で言えば剣鬼よりもむしろ黄金の獣にこそ似通っているだろう。
——さて、ここで異質に映るのは石上鉄也だ。

彼は霸王である。

軍団を率いて神を殺めし篡奪者にして、その根底を他者への情に委ねているゆえに。

彼の望みは究極的にはただ一つ。始まりの時から変わらず今も、愛しい彼女と永遠に。

そして再会が叶つた今、外へ外へと広がつていた意思が収束する。
収束する集束する終息する。

セカイ

宇宙が閉じる。

想いが巡り、因果は集い――

セカイ

いつかのどこかで、永遠の宝石が解けて流れて広がつたように。

生まれながらの神格は、大きな転機を迎えることで歩むべき道が転化する事もある。自滅因子という存在。

神格を植え付けられて生まれた半人半神。

純正純血の神格に対し混血という表現をされることもあるそれは、宇宙の總体が死を渴望する故に生まれる自壊細胞。

神座を殺すという特性から自然と霸道の氣質を持つ彼らだが、しかし。重要なのは宿主殺しというその一点であると考えれば、逆説的に座を殺す事が可能ならば求道でも問題はないと言えないだろうか。

癌細胞という性質上、宿主たる神が死ねば諸共に滅びる自壊の宿命。

霸道であつても座を獲ることは決して叶わぬ事なのだから、むしろ座の特性から求道の方が都合が良ければ、そちらにこそ天秤は傾くと思わないだろうか。

いつかも言つたとおり、宇宙は――『神咒神威神樂』の中ではない。

今代の太極^{そら}は天狗道でも曙光でもなく、パンドラの敷く弑殺曼荼羅^{しやさつ}。ただ神を弑^し逆^{いがく}するためだけの、殺神のみを目的とした異例の霸道。

元来、第六天^{かのじよ}は神の玩具として在った。ギリシア神話にその名残が残っている通り、天空神ゼウス——神座^{てんざ}を統べる神の意思により産み落とされた女。

そもそもが座の眷属として生まれた存在だから、彼女は神座の役割も、魂の行方も、霸道の意味も知っていた。だから、こう思ったのだ。

——霸道^{かみ}になつてあの神座^{おとこ}を殺してやろう。

そこに至るまでの道筋は、ここで語るべきでないだろう。

何はともあれ、今の彼女は第六天として座に着いている。しかしそこには大きな誤算があつた。

彼女はそもそも、自身の理がもつと慈愛に満ちている物だと認識していた。傲慢で幼稚な神を殺すことで、世界に自由と希望を振りまく物であると。

だが、世界に流れ出してのち愕然とした。

己が流出させた霸道の行き着く先は、今までと何ら変わらない世界。

確かに傲慢な第五天^{かみ}の神々は洗い流され、人間が王者となる世が生まれた。

しかしその代わりとして、葬つた残滓が型を成して地上に現れ始める。

エンキがいた。イシュタルがいた。ティアマトがいた。ニンリルがいた。イナンナ

がいた。シャマシユがいた。エレシユキガルがいた。デーヴアが、チャンドラが、アグニが、ヴァーユが、ラーヴアナが、シヴァが、クリシユナが、パールヴァテイが、ダグザ、ダヌー、マツハ、ヌアザ、ルー、バロール、アリアンフロッドアポロンメルクリウスセトインドラマルステユールバルドルロキオシリスアルテミステスカトリポカトールミーミルポセイドンヘスティアユノミネルヴァラークーベラスリヤヘパイストス。

かつて世界を彩った神々の影が像を結ぶ。

女神はどういう事だと狂乱し、いつしか納得と共に膝をついた。

とある人間が第五天の残滓を打ち倒し、その力を己がものとして振るい始めたのだ。それは正しく、かつての彼女自身に重なる姿で。後に「まつろわぬ神」と、「神殺しの魔王」と呼ばれる彼らの誕生を見て、自身の渴望がどんな物であつたのかを自覚した。

——ああ、自分は何と愚かで浅はかな女だつたのか。

絶望の導師と銘打たれる彼女は、嘆息と共に絶望の闇に包まれた。

ただ「神を殺したい」、それだけが己の渴^{のぞみ}望だつたのだ。

故にまつろわぬ神とは己の眷属同胞、勝手気ままに人の世を乱す悪なる者。神殺しの

魔王とは己の自滅因子、愚かな座^{かみ}を殺す自壊細胞。

——見るに堪えない、心底から下らない。

そこに至る悲劇、喜劇を台無しにする衆愚の祈り。

自分の宇宙がそんな下らないものであつたと知り、彼女は自死を決意する。だが、ただ己の自滅因子に討たれるのでは意味がない。世界が無色の白紙となつて漂うのでは、第五天を討つた意味がないと。

そんな決死の覚悟から幾星霜、遂に彼女の望みが叶おうとしている。
石上鉄也——ようやく現れた第六天の癌細胞。

ただ倒すだけでは足りない。壊すというならその先がいる。この愚かな神を破壊する神殺しの刃アボトーシスが、新世界を担うべき霸道と愛を育んだ。

かつて外宇宙から汲み取った情報に似た状況に、第六天は震撼していた。いつか何処かで存在したかも知れない水銀の蛇セレンダフに敬意を評し、その偉業を讃え習わせてもらおう。

「さあ、この災厄ゼツボウの箱を斬り拓いて見せなさい」

座して死を待つ太極の神が、主人公を操り陶酔していた。

終章 · 終段

天地開闢

それは第六天、絶望の導師パンドラが希望と絶望の壺を押し広げること。

否、そうではない。壺は太古の昔に押し広げられ、今やこの宇宙そのものとなつてい
る。だからこそ、壺を揺すつて波立てるだけで世界そのものが崩壊しかねないのだ。

だがしかし、彼女にそれを実行するつもりはない。

世界を揺さぶるに足る膨大な力を、ただこの場にのみ収束させる。

神ならぬ者の悉くを排除する必滅の審判。世界の荒波を正面から打倒するには、それは神の御業でなくてはならない。

故に

「是に建御雷神、御佩せる十掬劍を抜き放ち、逆に浪の穂に刺し立て、其の前に趺み坐さかしまさきあぐ

する」

アマテラスおおみかみ

たかぎのかみ
みこと

の

「次に此の神、天照大御神、高木神の命以ちて、問ひに使はせりと言りたまひけらく」
「建御雷神、返り参上りて、葦原中國を言向け和平しつる状を、復奏したまひき」

「是を曰く神武東征——もつて統べる石上の颶風。諸余怨敵皆悉摧滅」

——故にこれは、真に神なる者の武威。

「太・極」

「神咒神威——豊布都・武甕雷男神ツ!!」

その神咒を武御雷。

その神威を求道太極。

その神樂を、来たる次代に捧げよう。

豊布都とは布津主を表し、布津主神と建御雷神はその逸話の多くを共有する。神武

東征、葦原中國の平定もそのひとつであり、両者は時に同一視すらされる剣神である。

彼が得た神号の由来は今更言葉にするまでもなく。

傍らに花嫁を伴つて、断頭必滅の神咒神威が吹き荒れる。

「はじめましてですね義母上、これもあなたの望み通りですか?」

「ええ、勿論よ私の人形、万事總て偽りなく私の手のひらの上だわ」

今までのような世界の内に落とした影、触覚を通じての会話ではない。

眞実、この二人は初めて顔を合わせたのだ。

「神を殺したい」という霸道と、「神殺しの刃になりたい」という求道。^{かつぼう}宿主と自滅因子の関係を思えば当然とも言えるが、それにしても似^{にかよ}通り過ぎた二つの理。真正面からぶつかり合つて、競り勝つたのは後者の方だつた。

通常、霸道神と求道神では、同じ地平に立つてはいても力の優劣は前者が勝る。己の肉体を单一の宇宙として研ぎ澄ます求道よりも、己を中心に宇宙を広げる霸道の方が圧倒的な質量を持つからだ。それが座を統べる霸道神ともなれば、力の差はまさに一人の人間と一個の宇宙という関係になる。

だといふのに求道が霸道を退けたとするならば、太極の性質にその謎を解く鍵がある。

女神パンドラの理は神殺しの法則。神を弑^{じいぎやく}逆するため流れ出した、殺神のみを目的とした霸道の宇宙。神威に至つた彼女の法は、先代の座を一撃の元に滅相した。第六天が誇るのはその殺戮性。神座闘争において絶大な効果を發揮する、反則的なまでの特性。

しかし世界は皮肉で、そしてどこまでも誠実だ。鋭く尖つた凶刃は、だからこそ容易く折れもする。弑殺曼荼羅は「神座^{かみ}を殺したい」という渴望を忠実に叶え、座を統べるべき霸道神を殺し尽くす。

——裏を返せば、求道神を相手にその絶対性は發揮しない。

故にこそ、石上鉄也は自滅因子でありながら求道神として此処にいる。霸道神では第六天を殺せず、求道神ではパンドラに勝てない。だからこそ神座は——その袂に潜む■は、交代劇を引き起こすべくネイアを現世に顕現させた。新世界を担う霸道の女神と旧神を討つ求道の男神。歌劇や絵巻にも見られたその構図が実現すれば、第七天へ移り変わるという未来を予見して。

その結果が特異点に広がるこの光景だ。

「それではダメなのよ。癌細胞^{アーナタ}に殺されたんじや、新世界への路は開けない」
パンドラとてその本質は自由と成長を尊ぶ母性。

邪神として君臨した訳ではない彼女は、己の自殺に世界を道連れにする気はない。
故に、返す刃に全靈を賭して。さあ旧神を超えて見せろと、お前たちの霸道^{キズナ}を魅せてみろと試練を課す。

——だが。

「それではダメなのよ。癌細胞^{アーナタ}に殺されたんじや、新世界への路は開けない」

「まず感じたのは『哀愁』——求めしものは滅びなき世界」

発した祝詞は彼女に由来するものではない。

神座闘争はその在り方ゆえに、新たな神が先代の霸道を呑み喰らつて成長していく。支配領域を拡大し、保有質量を増大し、無限に広がつて流れ出すものこそ霸道神。

そうして次代に呑まれた神座の霸道は、そのままの形で記録されていく。以上でも以下でもなく、肥大化も減少もせず原型そのままの力を持つて。

「万象悉く円まる様こそ至高なれども、人は移ろい定まらない」

ただし、その力を余すことなく發揮できるかは別の話だ。

そもそも霸道とは——それが求道であれ同じく——主神の渴望建が根幹にある。本人の何をしたいかという祈り、何を以つてその願いを抱いたのかという経緯への共感。それ無くして理の支配力・強制力は体を成さず、法則は本質から遠のいていく。

「人に非ず悪魔に非ず、なればこそこの身は修羅にも勝る」

彼女がいま身を浸しているのは四代目の天が抱いた哀愁の渴望。意思に反して人を外れ、日常の平穀を奪い去られた魔造の魔人。

友と道を違え人魔と争い、彼らの理を跳ね除けて流れ出したのは望郷の念。退屈で窮屈な元の日常を取り戻したいという半人半魔の切なる願い。生まれた理は世界の再誕。過去を押し潰し踏み台にして、それでも人の可能性を潰えさせないための世を創ること

と。

「創世を願い、遍くすべてを混沌の泥に沈めよう。在りし日の平穏をもう一度——混沌

過程も結果も大きく違えど、共に自由な世界を望んだ者同士。汲み上げた渴望には一定の共感を示し、そして再現した。

特異点に広がるオリュンポスの神殿がひび割れる。

地鳴りと共に鳴動し、隙間から吹き上げるのは大地の息吹。

「ぐつ……あああああああああ——ツ!!」

斬る。

斬る斬る斬る。

斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬ツツ

それに応えるは斬の暴風。

足元から押し寄せる破壊の奔流に身を焼かれ、それでも鉄也は刃を振るう。この神威が第四天のものであるからと油断はできない。それを使うのは霸道殺戮の第六天ゆえ

地母神へ捧ぐ最期の晩餐。

贊たる挑戦者を呑み食らおうとする地脈の暴威に、断頭の嵐を振り下ろす。

神威の天閃と化した首飛ばしの颶風が、一条や二条では足りない無限刃——摩利支天の權能で以つて吹き荒れる。

文字通りの意味で神の權能と化した鉄也の異能。神座から零れ出た神威の欠片は、既に彼の色に染められているのだ。振るわれる刃の風切り音はもはや轟雷の域に達している。

これぞ剣神にして雷神、鬼神武御雷の武技。仮令術理すらなくとも一太刀一太刀が神の御業に相違ない。それが高密度かつ広範囲に広がる様は、極限まで行き着けば霸道神の支配域にも伍するだろう。

無論、至つたばかりの鉄也にそこまでの芸当は望むべくもない。
しかしそれでもパンドラに立ち向かうには十分だ。

「アクセス——我がシン。来たれ無価値なる者、罪惡の王」

身の芯から、心の罪へ——更なる奥の神の深まで。

墮ちろ、墮ちろ、底の底まで沈み征け。

凶氣を正氣へ。渴望を法則へ。殺刃より殺神へ。この求道を——神座へと。
〔我は汝を召喚す——闇の焰王、惡辣の主よ〕

ここで改めて確認しよう。

石上鉄也は自滅因子だ。求道に歪んではいるものの、その根幹に違いは無い。そして自滅因子とは癌細胞。

宿主たる座の神を殺す——延いては世界に対する反存在。物質界を構成する神を蹂躪するための、身体を死に至らしめる自壊細胞。

それは即ち、主をも焼き滅ぼす神の炎。

「肉を裂き骨を灼き、靈の一片までも腐り落として蹂躪せしめよ。死を喰らえ——無価値の炎」

靈劍が腐毒と魔炎を纏つて死に浸る。黒の腐炎、あるいは滅死の腐剣。

現行世界に影響を与える力であるなら、座より流入する力でその一切を焼き滅ぼす無頼なる者。その由来の通り座の自滅因子として力を引き出し、求道神でありながら霸道に似た支配領域の拡大を始める。

浸し、侵し、犯せ。権限を領域を凌辱せよ。

堕ちろ、堕ちろ、腐敗しろ。

——神座の支配権を寄越せッ！

天壤に座してイーピゲネイアは夢想する。

「ただ徒いたずらに死者を抱き締めつづけるなんて、もう嫌なのツ」

だからこそ、この渴望さけびを霸道きぼうに変えよう。

何時か何処かの宇宙にて、藤井蓮が「失った物は戻らない。だからこそ今あるものを大事にしたい」という思想でもって、「死者の生を認めない」という方向性に転化した。それとは違う宇宙では、摩多羅夜行が死を振りまくだけの傀儡から、死後を裁くという概念を生み出した。

ならば死を抱く己が進むべき道は、地母神として当然の在り方。死を抱き、次の生へと繋げること。黄昏の二番煎じであり模造品。彼女に肖あやかつただけの薄汚い金鍍金メッキ。だが、それこそ鉄也かれには相応しいのだと胸を張ろう。

「私が死者アナタを抱き締める」

そうして、今や座に坐する新世界の女神は謝罪した。

ごめんなさい、テツヤ。私は本当に酷い女だね。アナタの望みを、また叶えてあげられなかつた。でもアナタが自滅因子に目覚めてしまつた以上、私が神座を取ることになつた以上、パンドラを殺すことは出来ないの。だからお願ねがい、抱き締めさせて。いつかきっと、大欲界天狗道の再来が現れるのかもしね。けれど、だからって、アナタと過ごす今を手放したりはできないよ。

「だからお願ねがい、旧神かのじよの事を抱き締めさせて……」

女神パンドラと石上鉄也の理は、異様な程に似通つてゐる。共に神殺しという属性ゆえに、そして宿主と自滅因子という関係ゆえに、互いの存在がよく馴染む。神殺しの断頭刃という宇宙の中に霸道弑殺という太極を混ぜた所で、神座でさえも同一と認識できてしまうほどに。

そして死を求めるという彼女の在り方は、幕引きの鉄拳の求道に通じる部分がある。ネイアが目論んだ通り、座を辞した彼女は鉄也の渴望に引き摺られて求道に転化したのだった。

「私は黄昏のかの聖母ほど寛容じやないけれど、求道神なら神座の管轄じやないから容量が軋轢する事はない。でしょ？」

死愛の冥神、イーピゲネイア。

断頭の颶風、石上鉄也。

災禍の運び手、パンドラ。

次代に譲り渡して死に行きたいという渴きは潤わず、神を殺し恋人と永遠の安息を得るという望みは叶わず、死を抱き生を育むという祈りは天命に至つた。両者相打ち、伴侶たる女神の一人勝ちというわけだ。

これこそ喜劇と呼んで差し支えあるまい。

女神とその眷属たる剣神、そして零落した旧神。

この三柱を以つて、ここに第七天が完成したのである。

あとがき

石上鉄也

ｋｋｋで宗次郎に憧れ、彼の剣を模倣したオタク主人公。憧れの人物は壬生宗次郎だが、信仰する神は黄昏の女神。他の神殺したちは世界法則に則った超人たちだが、彼は世界法則を崩壊させる自滅因子。

ネイアを殺す際に神殺しの刃であると誓う。神殺しという偉業を成し遂げておきながら、彼女を殺すことしか出来なかつた自分を憎んでいる。本当は彼女を愛しているのかつた、などと嘯き自己愛を謳うのは己へ向けた皮肉なのだ。

剣の師でもある父は鋼助といい、鋼を助けるという神刀の一族らしい名。鉄也の「鉄なり」という名もこれから来ている。

『冥界の処刑刀』

ヘカート・デスサイズ

ギリシア神話に登場する女神ヘカテーより篡奪した権能。死の風を呼び込み絶命の武具を生むとされているが、そんなことをしなくともそのまま死を撒き散らす事も可能。急速に死へ近付く呪いの風や、骨肉を腐らせる毒を生み出す。

『疾走する停滞』

インド神話のラーフというアスラより篡奪した権能。ラーフは日蝕や月蝕を起こす悪星となる伝承を持つている。陽月が失われれば暦が読めず時が進まなくなるという特性を取り上げ、そこから時間停止の権能を得る。時空を歪め神速化する権能だが、後に掌握して敵の神速を解除する能力も得る。太陽を呑んで自分を加速し、月を呑んで敵を減速し、序曲から終曲へと進化する。予定だつた。

『陀羅尼摩利支天』

まつろわぬ蜃氣楼より篡奪した権能。文字通りの異能であるが、それはあくまで剣の像に限り、自身の像は紡げない。要するに燕返しの権能。太極に至ると凄まじい効果範囲へと変貌する、億千万の刃。は違うか。

ネイア

イーピゲネイア。一度はローマに顕現したまつろわぬヘカテーの表層人格。本性であるヘカテーの人格に呑まれることを見越して、鉄也に加護を与え神殺しを促す。鉄也と誓いを交わして消滅するが、不死の領域（神座の記録）に還る前に汲み取られて再び顕現する。犯人はパンドラか観測者あたり。

本来の彼女は第五天の世界に生きた人間であり、主神ゼウスの配下で疑似神格だつたアルテミスⅡへカテーへの生贊として捧げられる。それを哀れんだ女神はその魂を手元に置き、消滅も転生もしない今まで神座が交代。第五天ゼウスの消滅に伴つてアルテ

ミスも神格を失い、その魂を諸共に第六天パンドラのもとへと移動する。それから眠りに着いて幾星霜、彼女は運命の出会いを果たすのだつた。

八意

愛称はコロ。第二部で白面金毛九尾の龍骨である殺生石を食べて、某作品的に「喰靈解放——八意ツ！」みたいな感じの巨大化する予定だつた。某フオウ君みたいに、人語を解しはしても話すことは絶対にない。ケモツ娘や竜や武器は喋つても動物は話さない、という変なポリシーのため。

パンドラ

「神を殺したい」という霸道が鉄也の「神殺しの刃になりたい」という渴望に呑まれ、求道に転化した先代の神座。今代の座に認められているがゆえに消滅を免れているが、敗北した旧神ゆえに陽炎のように薄い存在。

ラーマ

最後の王という名の触覚。かつて神の眷属としてあつた旧世界の存在だが、自死を望んだパンドラが座より記録を汲み上げた。その役割は神への踏み台。神殺しという名の自滅因子たちが力を付け、その最終段階として神格域に至るために用意された贊であり最終試練。彼の死がそのまま特異点への潜行装置として機能しており、女神が霸道を流れ出さずとも特異点に至れた。という設定。

カンピオーネ

第六天パンドラの法則の具現。基本的に霸者の気質を持ち、神格を持つて生まれてくる訳ではなく、『まつろわぬ神』という神格の欠片を取り込むことで位階を上げる。神殺しというのは闘争により魂を鍛え、『まつろわぬ神』の力を取り込むという工程を経た、パンドラ流の永劫破壊と言えるかも知れない。

パンドラ自身も誤認しているが、「自滅因子＝石上鉄也」であつて「カンピオーネ＝自滅因子」ではない。神殺しの魔王は霸道弑殺の世界法則に則つた存在であるため、変則的だが第六天に属する疑似神格に近い。鉄也が自滅因子としては例外的存在なのは、この特性が混じつているためというのもあるかも知れない。

『まつろわぬ神』

第六天の法則である「霸道弑殺」により、神座より力を与えられた魂。それは小さな神格の欠片であり、神殺しという存在を進化させるための贊。現在の世界法則に馴染めぬ異形。行き場を失つた世界の、まつろわぬ化外の民。かつて滅びた神座せかいのかみの天の眷属、その影。つまりかつて実在した神格・疑似神格そのままであり、現代に伝わる神话伝承は旧世界の実話、森羅万象の根源である座より零れ落ちた情報から成り立つている。という設定。

正史編纂委員会東京分室、退魔部神靈対策課特命係
俗稱、極東十三騎士団黒円卓

第一位首領、石上鉄也 || 斷頭颶風シユトウルム・ルイゼットの神殺し

第二位、『斎天大聖』孫悟空

第三位首領代行、沙耶宮馨 || 神に刃向かう者

第四位、未定。

第五位、未定。

第六位、連城冬姫 || 貧造ツオアル・ゾーネンキント・祭壇の巫女

第七位大隊長、『黒騎士』清秋院恵那 || 猛き嵐デーヴア・ラージャの使者

第八位、万里谷裕理。

第九位大隊長、『赤騎士』エリカ・ブランデツリ || 紅い悪魔デイアボロ・ロツソ

第十位、甘粕冬馬 || 影に忍ぶ者

第十一位、『禍祓いの巫女』万里谷ひかり || 神を生む女

第十二位大隊長、『白騎士』八意 || 曰輪喰マーナガルムい

第十三位副首領、草薙護堂 || 東方の軍神

第十三位副首領前席、イーピゲネイアⅡ （カティック・グラディア） 死灰の花嫁

——以下、没ネタや小ネタ——

恵那

「鉄也さんの負け。つてことで、罰ゲーム！」

鉄也

「決め台詞つて、いきなりどこぞの奇策士みたいな事を言い出しあつてからに……」

「……もうさ、『ただしその頃には、アンタは八つ裂きになつているだろうけどな』でいいんじやないか？　いや、それでいいに違いない。それがいい。一番いい。はい決定

！」

「——違うんだよ！　元ネタありきのリスクと自分で考えた『かつこいいせりふ』とじや、痛さが全然違うんだよオツ！」

鉄也がまず思ったのはひとつ。

(九尾の狐……まさか型月の偉業が反映されてたりしませんよね……)

具体的にはケモ耳天照とか。

だつて白面金毛九尾などと言われたら、能登さん演じる黒いセーラー服JKとか、某
弾幕ゲーの「ちええええええええええん」な御方とか、そして良妻賢狐なキャラぶれ淫
乱。ピンクあたりが代表的でしょ？

そう公言して憚らない鉄也だからこそ、眼前の九尾に警戒心が膨れ上がって止まらな
い。

間髪入れず脳内再生されるのは螺子がぶつ飛んでブレーキがへし折れたシリアル
ヴォイス。

——謂われはなくとも即参上、軒轅陵墓けんえんりょうぼから、良妻狐のデリバリ―にやつてきました！
この九尾がもしアレだとすれば、持ちうる神格は多岐に渡る。

まず日本で白面金毛九尾といえば当然の如く挙げられる玉藻御前。

そして玉藻は九尾の狐ということから稻荷大明神として祭られる事もあり、同じく稻
荷神のダキニ天へ変化し得る。

インド仏教で荼枳尼タキニと呼ばれていた羅刹女は大日如来に調伏され、善神となつて大日

如来の徳の化身と解釈されるようになつた。

大日如来はその名が示すとおり、日輪を象徴する神格である。後に神仏習合の概念によつて天照大神と同一視された。これによつて玉藻^{キヤス}の前はアマテラス＝大日如来＝ダキニ天という、複雑怪奇極まる靈格と神性を有する事になるのだ。

簡潔に纏めると、魔女や巫女として知られ宇宙を生み出したとまでされる太陽の神。原型そのままならば神座万象的な意味での神に等しい存在である。

——勝てるわけがねえ！

誰だつてそう思う。

鉄也だつてそう思つた。なので。

「スーリヤへの報復あれ！」

まずは太陽^ラと月^フ絶対殺す^ケマンの権能を発動した。

権能の超感覚による判定は——白。

よしんばダキニ天まで繋がつていたとしても、そこから太陽の神性までは帶びていな

いらしい。ひとまず安心である。

「ま、神に成り上がられても面倒なんで即殺だけど」

——ゆえ、義母かみは問われた。
 『貴様あなたは何者だあれか?』

「知らぬならば答えよう……」
 —愚問もうまい。なり、無知蒙昧もうまい。

いつの間にか集つた石上鉄也の黒円卓なかまたち。

剣の巫女、男装の媛巫女、隠密の男、そして白き賢狼が咆哮した。

「——我が名オオオオオオはレギオンツ!!」

東の果てに建つ宮殿、黄金魔城が遂に顕現する。

「梵天王魔王自在大自在」

石上鉄也は神殺しである。

彼は剣士として修練を積み、そして魔王へ成り上がった。

確かにその力は諸人を寄せ付けない超常の代物だろう。

「除其衰患令得安穩」

だがしかし、である。

かの王は戦士としてなら一流を超えた超一流と言えど、剣士としてはまだまだ未完。

流派の皆伝とて得ていな。ならば、石上神道流の免許皆伝は誰であるのか。

問うまでも無し、その師にあたる実父である。

「諸余怨敵皆悉摧滅——」

彼は石上鉄也を上回る剣客であり、若輩の頃から数多の戦場を駆け抜けた経験は折り紙付き。

剣術の完成度もまた息子の遙か上を往く。

鉄也が実現せしめた首飛ばしの颶風とて、その修行風景を観察することでいち早く完成形を察し、実のところ息子より先に体得していた剣聖。

故に鉄也の父親が。石上鋼助こそが。

自他ともに認める、不動の石上流最強剣士なのだ。

「首飛ばしの颶風・蠅声エツ！」

二十年以上の歳月をかけて磨き上げた刀術。

イタリアの『剣の王』などという才能頼りではなく、修練によつて高められた達人の技巧により、

ネイアを現世に留めるには必要だつたのだ。

相応に高純度かつ希少な呪的血統と、その膨大な力で自壊しない器——

呪力を溜め込めないという欠点を併せ持つ存在が。

そして器として機能する者は、気位が高く他者の指図を受けないような人格こそが好ましい。我が儘で人の思惑を鑑みず、さりとて力を持たず影響力の乏しい人材。即ち彼女こそ――。

「極東十三騎士団黒円卓第六位、連城冬姫＝ツオアル・ゾーネンキント賡造・祭壇の巫女。本人は知らないが、そういうことになっている」

無知にして無自覚なる神の依り代。

石上鉄也の統べる黒円卓、その最後の一員であつた。

と、ここまでがちよちよくと思いついては書いていた没シーン。

或いは載せられるまで物語が進まなかつた故に掲載を断念した一幕です。

ここまで亀の歩みを思わせる遅筆でのろのろと続けて来ましたが、そろそろ潔く筆を置こうと決意しました。もともとは「女神を腕に抱く魔王」の息抜きとして、ストーリーとか何も考えずネタを綴つていただけの本作。それが物語を進めていく内に構想を練りだし、それ故に行き詰つてしましました。

この度に完結を断念したのは自分で「カンピオーネ！」世界を「神座万象シリーズ」

ズ」の世界が浸食し始め、果ては終章のように広げた風呂敷をさらに引き伸ばしてビリビリに破いてしまった、というような状態になってしまったからというのもあります。私事ですが、年末だというのに引っ越すという心を入れ替える機会も訪れたことから、この辺が退き時だろうと感じました。他の作品は今後も続けていきますし、本作も気が向けば断章という形でまたネタを突っ込むこともあるかもしれません。また私の拙い文に目を通されることがあれば、どうぞ「ここは間違っている」という指摘でも、図々しいながら「ここが面白かった」という感想でも書き込んでください。心待ちにしています。

それでは最後に、この作品に感想を送つてくださった方々。評価を付けてくださった方々。ページを開き、本作を読んでくださっていた皆様方に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。